

神 棲

號 參 拾 貳 第

會 窓 同 院 學 山 祖

謝 喻

樂 履 錄 參 觀

麻山學究同窓會

棲

神

第貳拾參號

目次

口繪寫眞 高祖御消息斷片

聖德太子への一考察	柴田顛秀(一)
開會思想	遠藤是妙(九)
清澄寺大衆考	鹽田義遜(一四)
宗祖本佛論及神本佛迹論の非を糾す	中谷良英(一九)
純粹宗學の理念と其の發展	室住一妙(二五)
御遺文にあらはれた下種思想	武田海正(三〇)
内房尼についての一考察	三木淨達(三三)
宗學への悩み	中澤要實(三六)
藤原共資公	鈴木智久(四〇)
諫	田邊正知(四二)
曉	田邊正知(四二)



結核克服に當りて……………松井大周(二〇)

如何に生くべきか……………宇佐美鍊昌(二七)

樂土建設への歩み……………香川是光(三〇)

時局と立正安國……………米村智淨(三三)

文藝欄

病 　　ひ……………(短歌)……………岡村教正(二六)

雜 　　詠……………(俳句)……………田村孤雪(二九)

晴 　　曇……………(短歌)……………後藤康信(三〇)

厚徳寮斷章……………寮隅住人(三一)

校友會報……………(三一)

同窓會報……………(三四)

同窓會各部記事……………(三六)

同窓會各組張幕

(三五)

同窓會聯

(二五)

對支會聯

(三五)

豐盛會聯

寮剛主人 (三五)

湖邊 (聯)

翁藤親母 (三五)

湖邊 (聯)

田林英岩 (三五)

湖邊 (聯)

關村五 (三五)

文藝部

初編も立玉賞圖

米林啓第 (三五)

樂土園遊への巻

香川長光 (三五)

歌附二巻への巻

宇野美穂昌 (三五)

詩附三巻への巻

松井大照 (三五)

七 法花經と三大師（三か）は水火也天地也（か）

日蓮此を不棄せず（三）三大師御弟子

尊答云法花經ハ顯經の中の最

第一顯密相對せハ或ハ第二或第

三と云々或云大日經ハ三密相

應ノ一切第一法花經ハ意密計

有て身口なし或云教主乃勝劣と云々隨て又日

本國の天台花（體）々等の七宗の學

者等も此義を證依（三）了此の故

四百卷（三）の間ハ日本一同此の義にて

候也漢土の○○○○のふとし

高祖御消息斷片

一、寸法 一尺 一尺三分

一、員數 一紙

一、紙質 情紙

一、行數 十一行

一、所在 大阪市天滿寺町成正寺

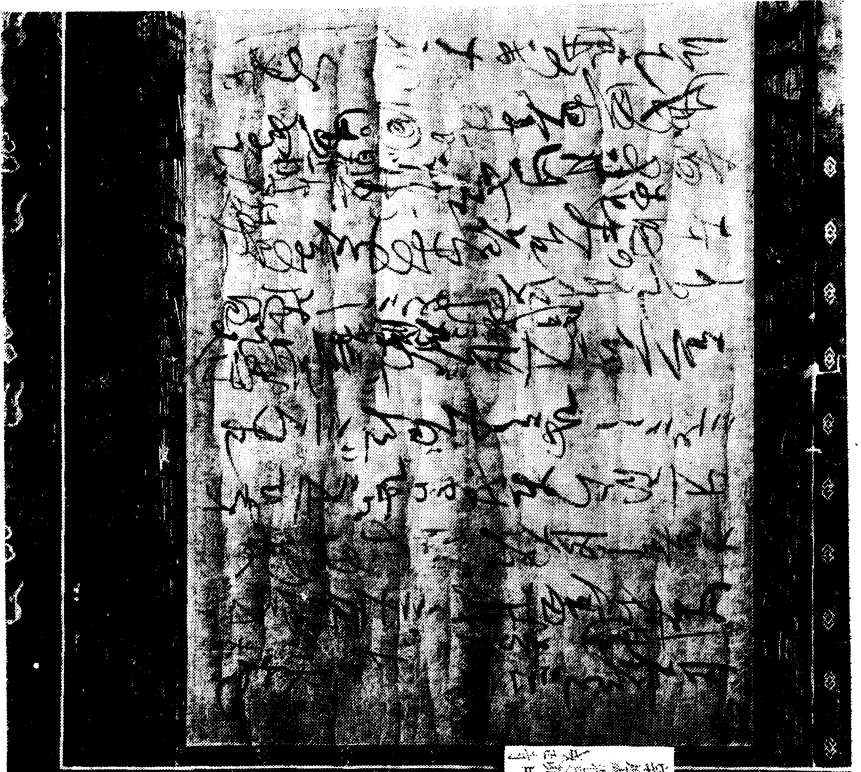
一、裏書

仲寬永第十一童讓甲戌未秋
九加証判心性院日蓮花押

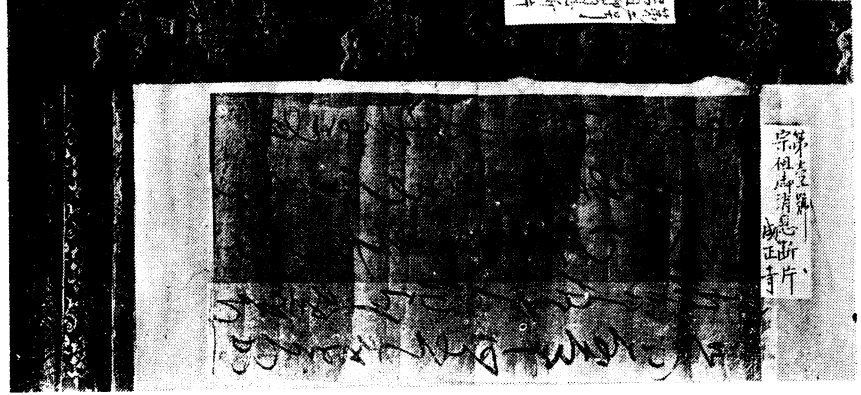
海軍兵士の〇〇〇〇のたうじ
 四百余〇の間へ日本一団地の養ひ
 奉給も出養も類分たうじの給
 本國の天合共々給の十余の學
 市うれ口たうじ給之給主は細きとたうじ願う又日
 願へ一世第一給共給へ意持情
 三とたうじ給之給大日給へ三層階
 第一層階階階せへ復へ第二層階
 給給共給共給へ階階の中の給
 日給出さふ不給たうじ〇〇三大階階階予
 給共給と三大〇〇給水火助天銀助
 じ

- 一、 養 給 仲水瓜頭心給別日給共明
- 一、 浪 共 廣米第十一高養甲安末給共明
- 一、 行 建 大列市天高寺加風五寺
- 一、 海 賀 給 十一行
- 一、 員 建 給 一 珠
- 一、 七 給 器中 一 只 三 十 三 分

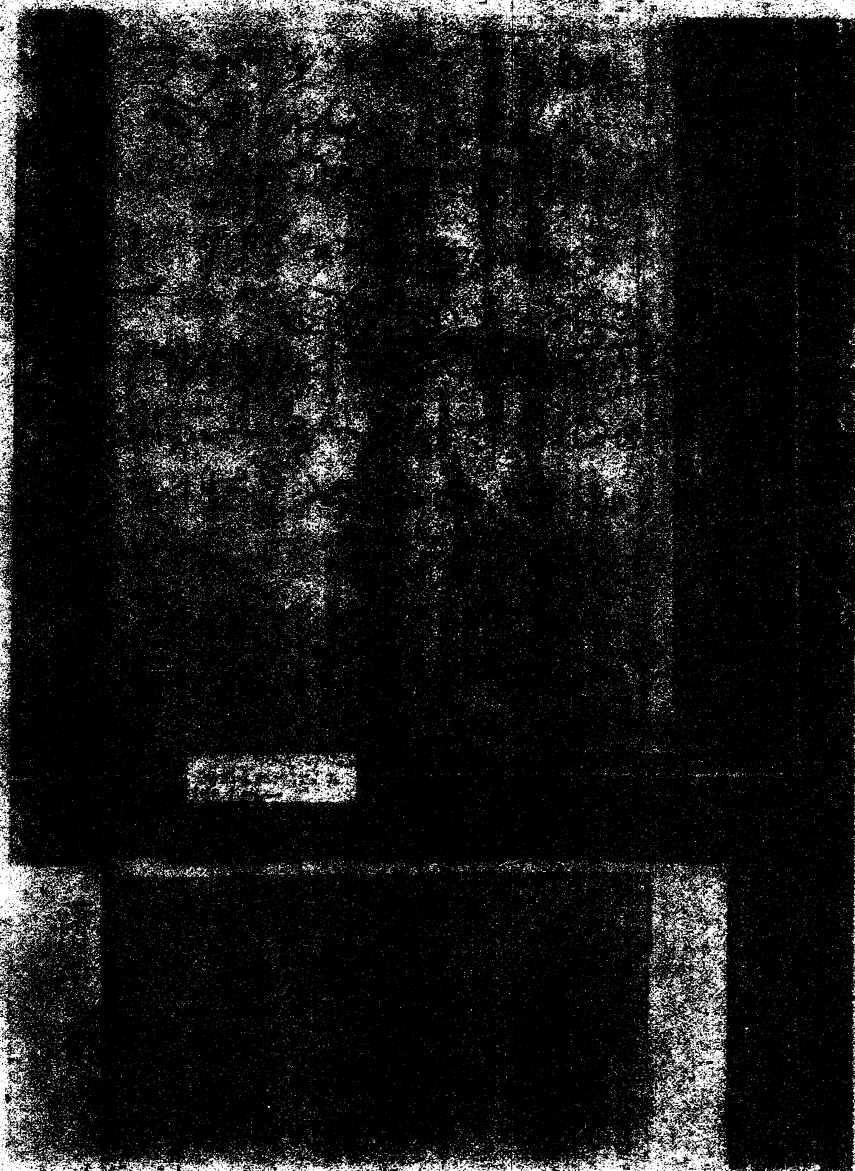
高 階 階 階 階 階 階



第 11 卷
第 11 卷
第 11 卷



宗祖廟清志正斷



聖德太子に就ての一考察

柴 田 顛 秀

聖德太子の佛教に對する態度

聖德太子は日本文化の開導者であり、神儒佛三教の融合的創見者であり、日本國体の基礎的創見者であり、日本佛教の始祖的^〇位置であるといふことは、誰人も否むことの出来ぬ事實である、各方面の何れの上から見ても太子の存在は偉大なるものであるが、此等の各方面を併せ持て居るといふことは、殆んど世界に比例のない、人類國家に對しての貢獻者である。

夫れ故太子を超人的に取扱つて、同時に八人の訴を聽いたなどといふことも無理からぬ傳説の一つではあるが、就中佛教に對しての御卓見は日本計りではなく遠く支那までも響き亘つたことは慈覺大師が入唐した時、荆溪大師の弟子明空法師が作つた上宮疏の勝鬘義抄六卷が有つて寫し歸つたといふ位だから、大方は想像が出来る。

太子は佛教各宗から皆因縁付けられ、太子を觀音の化身として西方往生を説いた淨土教の人々や（太子傳古今目錄抄）慧思禪師の後身とする天台宗（一心戒文）達磨大師の再來とする禪宗（日本佛教全書本傳）又之と逆に弘法大師の前身だといふ眞言宗の傳説（日本神仙記）などの傳來を考へても如何に太子が佛教徒の思慕の的で有つたかが想像される、事實は今日我等が想像以上の思慕で有つたことは、親鸞聖人が和國の教主聖德皇と和讃に言はれて居るのに

も明了だし、親鸞聖人も日蓮聖人も同じく磯長の御廟へ参籠したと傳はつて居ることに依ても考へられる、これ程思慕の太子も實は佛教各宗何れの宗派にも關係ないことだけは明白のことである、聖德太子御在世の折りは佛教渡來僅に四十年で、寧ろ一種の佛教學と見られ、一面からは現証利益の蕃神と見られて居つた時代であるから、何れからも宗派的影響をうける關係は更に無つたのである。

唯太子の師は慧慈法師であり、其の思想南岳大師を承けたには異ないが、古今目錄抄に

今此、疏者似_ニ天台_一似_ニ三論_一以_ニ光宅寺雲法師疏_一爲_ニ本義_一然而難_レ取_ニ何_一ノ宗_モと言はれるやうに何の宗にも偏頗して居らぬことは事實である。

實は太子の佛教は佛教の爲めの佛教でなく、唯皇室中心の爲めの佛法、教化第一の爲めの佛法で有つたのである、太子の叡智大陸文學の渡來に伴つた思想動搖の時に臨んで、直に之に没頭して研究をつとけて、この大陸の思想文學を融化して日本建國の精神に同化して、日本固有の精神と合致した大思想を創見した所に、太子の偉大さがあり太子の殊色が有つたのである。

夫れ故太子が數多の寺塔を造つたことも、儒者流に見て佛教に耽溺して數多の堂塔を造立したなど見るのは、太子の全貌を知らない淺見者の妄斷である。

奉爲_ニ天皇并御世天皇_一營_ニ造_ス七ヶ寺_一

以件_ノ伽藍敬_{シテ}累_{マシ}陛下并御世_ノ御世治_ニ天下_一皇上_ス

と四節文にあることが事實太子の本心であらう、四天王寺は守屋討伐の誓願に於て立て、法隆寺は用明天皇瘡病平癒祈願の爲めに建てられたと傳へられ、其外四箇院

施藥院	施藥慈善院
療病院	慈善病院
悲田院	孤兒養生院
敬田院	感化院

と言つたやうのものは言はずと知れた、社會事業の機關であるので、佛教徒に社會事業を委ね、尊皇愛國の道場を起さしむるなど、千三百年の昔にあつては普く外國に比類なき卓見であり、文化先進國の異例である。

憲法と三經義疏

かうした見地から生れた、太子の十七憲法と三經の義疏とは同一徹のものであるといふことは言はずと知れたこと、是れ明かに王佛冥合の先驅者である、佛の慈悲宏大なる佛徳は則日本天皇の聖徳でなければならぬ、日本建國以來の傳統的精神たる一視同仁四海宏被の精神は、平等一乘の佛精神でなければならぬ、此の点が明了に表顯されて居るものが、十七憲法と三經の義疏である、恐らく太子御一代に畢生の力を注いだものはこの二つであらう、而して太子時代の社會情勢は佛教的精神を以てかく上下一致萬民協和を馴致するの餘儀なき状態で有つたことは、國史を達觀するもの直に首肯せらるゝことで、太子がこの創見に於て唯一時の混鈍たる時代を救つた計りではなく、永く日本の社會を利導して今日の國民精神を作つて居ることは、國民一同が感謝しなければならぬ事である、之に衝動を得た日本佛教が殆んど大陸的佛教と其の所詮を異にして居ることも注意しなければならぬ。

十七憲法の條章を討檢し來らば、一として三經精神の潜在ならざるはない、其の大綱は大乗平等精神であり、其の

細綱は又勝鬘、維摩、法華の三經より換骨脱胎せしものと見るべし、十七憲法の

二二曰、篤敬三寶三寶者佛法僧也、則四生之終歸萬國之極宗也

と言へば

夫れ妙法蓮華經は蓋し是れ惣じて萬善を取りて一因となすの豊田……廣く萬善同歸の理を明かす

と法華義疏開卷第一にある文と同巧異曲

十四、絶忿棄積不怒、違人皆有心、心各有執彼是則我非、我是則彼非、我心非聖彼非愚共是凡夫耳……

とあるは勝鬘義疏の

萬行正法を以て（一念の）心とし（一念の）心を以て萬行正法と爲す、心と法と一体にして二相なき故に、萬行正法は即ち是れ心、心は即ち萬行正法なりと言ふなり（世界聖典全集義疏四十二）

とある義疏の精神と其の根本は一致して居ると見て差支ないと思ふ。

かく一々討驗を加ふれば太子の憲法精神の由來する所を知ることが出来る、其中第一條の「以和爲貴無忤爲宗」……は萬物融通の大平等主義から出發した大乘一實精神なることは勿論である。

而して憲法の別体は推古天皇の十二年で三經の宮中御講演は十四年と言はれてある、此の前後に於ける太子の思想境遇に變化のなかつたのみならず、身は推古天皇の皇太子として天皇の請に依て之を宮中に講じたので、この講本が天下を風靡したと言ふより、其の形勢風潮が天下後世に影響した所は眞に偉大なるもので、これから僧尼度牒の志願殺到して人員を制限身分を計つて許した制度の生れたのを見てわかる、此の感化徳風の偉大なる跡を慕つて後代に眞に戒壇建立の思想と輿論が生れたものと見たのは私の見解ではあるが、これは至當の推理であると思ふ。

戒壇建立の精神

戒壇といふことは上御一人より下萬民まで一定の場所で歸依の誓約を爲す場所である、これは聖德太子憲法の精神ともいふべき國民同化の状態を具体化したもので、元より形式は支那にあつても其の精神は聖德太子に出でたことは國分寺創立緣起などで之を示して居るものである、宮中に佛壇を置き諸國に國分寺を建て一時に佛教化さうとした治國の政策は何と言つてもこの形である、而してこの惣本山は奈良に東大寺と顯はれた、この東大寺は華嚴宗ではあるが當時は八宗兼學佛教の惣歸依所として始めて戒壇建立の事にまで進んで行つた。

この寺は聖武天皇佛教興隆の勅願に依て創め本尊天平十三年金銅盧舍那佛の鑄造を企て天平十三年始め九年を経て天平勝寶元年に至て成り、大佛殿は十九年工を起し六年を経て天平勝寶四年に至て成り、本願聖武天皇、開基良辨、勸進行基、導師基提仙那の關與せる所故四聖建立の寺といふ、其年四月孝謙天皇開堂式に臨幸に成り佛教興隆せば我國隆ならん、朕は三寶の奴とならんと宣へたといふので有名であるので、神、儒兩家の人々は國体を無視したなどいつて批評の種として居るが、元々同寺建立も鎮護國家の爲めである故其の御言葉の内容を考ふれば、佛教の爲めと言ふより國家の爲めの佛教といふ意味が多分で、聖德太子佛教興隆の御精神に依るものである。

此の東大寺本尊の前に天平勝寶七年四月唐の鑑真和尚が玉臺山の土を持來つて戒壇を作つたのが、本邦戒壇の建立の始である。其後淳仁天皇天平寶字五年下野藥師寺、筑紫の觀音寺に戒壇を設けて、國中の佛教徒を國分けして之に従屬せしむる方針を執つた。

勅願建立の戒壇も年を経て國民思想の轉換に及んで平安佛教の起ると共に、其の時代の代表者日本天台宗の開祖傳

教大師に依て、比叡山圓頓戒壇建立が企てられた、比叡山も桓武天皇の勅願寺であると共に其の戒壇建立も勅許に依るべきことを企圖したのは、東大寺戒壇建立と同一徑路である、傳教大師は弘仁十年三月十五日と弘仁十一年二月十九日と弘仁十一年十一月二十一日と三度に亘て上聞して、戒壇建立勅許を請ひ、併て顯戒論と内證佛法相承血脈譜などの著書を献上して、天台圓宗法華一乘の妙戒を以て戒壇建立することが國家隆昌の基であることを奏聞した。

天恩開許、先帝高願載々彌興^ッ大乘戒珠祀々清淨弘仁爲^レ源傳^ニ此大戒^ニ廻傳戒福、將護^ニ主上^一などと稱し

奉^ニ此功德^一以滅^ニ群凶^一上茲 聖壽無疆、承^レ此兆人清淨

弘仁十一年の上奏には

奉^ニ此功德^一以滅^ニ群凶^一上茲聖壽無疆承^レ此兆人清泰

などとあるに依て見ることが出来る、併し叡山圓頓戒壇の事業は南都各宗の提議に依て、太師在世中には勅許なく淳和天皇の天長四年義真和尚の時始て勅許を得て叡山に戒壇建立が成就したものである。

傳教大師の叡山圓頓戒壇は元より朝野遠近同歸一乘の抱負を以て出来たもので、法華經の閻浮提内廣宣流布の理想表示であることは言ふまでもない、故に比叡山の規模宏大なることは恐らく古今に絶したもので、比叡三千坊の創立諸佛諸坊の造營は、やがては權實雜亂の弊に陥つたが、矢張り佛教歸依の惣本山として、天下の崇敬をこゝに集めた状態は天下の偉觀で有つた、鎌倉時代の新興宗教が其の源をこの山に發したといふことは一面叡山の包容性を語ると共に、既に圓頓戒は名のみと成つて形体の力を有する状態に成つたことも又已むを得ないが、法華一乘圓頓戒の眞生命が失はれたことは恐らく傳教大師の願業の本旨ではないことと思ふ。

日蓮聖人の戒壇論

比叡山に修學して先づ此の欠点を觀取し、法華一乘圓頓戒の再興を企てたものは日蓮聖人である、日蓮聖人は釋迦——天台——傳教——日蓮と三國四師を外相承とした位傳教大師を崇敬した、其の本旨は同じく法華一乘宗に有つたからである、日蓮聖人は更に傳教大師の圓頓具足戒を手ぬるしとして事の一念三千の戒法を以て本門戒壇建立を絶叫した、天台は述門理觀の妙法であるが日蓮は事の妙法本門壽量品極秘の戒法だと稱し、本迹二門の差別を立て、一路法華一乘娑婆即寂光上行所傳の題目を主唱し、本門の三秘を宗旨として、本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇と稱し、此の戒壇建立は上行菩薩が本師釋迦佛より與へられたる、本化別頭の付囑であるとして日蓮聖人の晩年に至て之を發表した、此の發展に就て日蓮教學の上に容易ならざる準備と要意をしたことも、戒壇建立に就て深義の有つたことが考へ及ぶことである、今此の戒壇戒体に就ての研究を語るの餘裕はないが、兎も角も日蓮聖人が戒壇建立の思想は、矢張り立正安國の實際化で、聖德太子以來の傳統的精神を極度に發揮し、法華一乘の妙旨を國家の上に具體化するとする理想であつたことを明言するに憚らない、今日蓮聖人の遺文中一、二の文を抄録すれば、大方日蓮聖人戒壇戒立の旨趣を察することが出来る。

【報恩抄】 日本國には傳教大師が佛滅後一千八百年に當りて出させ給て天台の御釋を見て、欽明より已來二百六十余年が間の六宗をせめ給ひしかば、在世の外道漢土の道士日本に出現せりと謗せし上、佛滅後一千八百年が間月氏漢土日本になかりし圓頓の大戒を立んと言のみならず、西國の觀音寺の戒壇東國下野小野寺の戒壇中國大和國東大寺戒壇は同じく小乘臭糞の戒なり瓦石の如し、云々

【三大秘法稟承事】 戒壇者王法冥_ニ佛法_ニ佛法合_ニ王法_ニ王臣一同に本門三大秘密の法を持て、有徳王覺徳比丘の其乃_ハ往_ヲ移_シ未_レ法濁惡未來_ニ時、勅宣並御教書を申し下して尋_テ似_キ靈山淨土_ニ最勝_ノ地_ヲ可_レ建_ニ立_ニ戒壇_ニ者歎_レ待_レ時耳、事の戒法と申すは是也、三國并一閻浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋等も來下して蹋給べき戒壇也この兩文を併せ讀めば日蓮聖人の戒壇建立の意旨は尤も明了する。

而してこの戒壇建立の深旨は王佛冥合の志願目的を究竟として居る所に、聖德太子の佛教興隆の意旨と合致を見、法華一乘同歸四生と言はれた所に同じく、「萬善同歸」といひ、「四生の終歸萬國の極宗」と言はれたことに契合して聖德太子が佛教興隆の眞精神を發揮したものであり、日本佛教の特色を高揚したものであるといふに憚りない。

開會思想

遠藤是妙

開會の二字は法華經の思想を全的に言ひ顯はすよき文字である。法華經の山なる身延山の關門に、開會關と記されたる六牙潮師の三大文字は、この御山に最も相應せる額面として、毎に合掌拜觀しつゝ通過するのである。然るに文明の機械が思想界にまで影響するものゝ一ツとして、電車自動車等の交通は、參拜者に對する難有き恩惠なると同時に、尊き靈蹟を逸せしめるのみならず、御山の幽邃深嚴味を損滅する恐れがある。今の開會關の如きも幸に車掌の説明を聞いたものは、其の瞬間車窓より一瞥するに止まり、但だ大きな草書であつたと思ふばかりである。偶々山内にあつてさへ、祖師堂あるを知つて棲神閣あるを知らず、總門あるを知つて開會關あるを知らないものがある。自分は先日佐々木師の施本感應院日得聖人の報恩誌を得て、聖人を回顧すると同時にこの開會の感を新にしたのである。

開會といふことは宗門の學者にとりては、殆んど常識的に考へられながら、この位謬られ易い思想はない。そこでこの開會思想に對する認識を確にする必要があると思ふ。

開といふ字は、開顯・開發・開除・開廢等と熟字して、隱覆蓋覆を取り除く意味と、同時に法門の内容真相を明かにする意味なれば、この一字でも門戸開放内外融通真相發揮の状態は能く領解が出来る。其の上に會は會融・會歸・會合・會入等と熟字して、恰も百川の一大海に朝宗するが如く、差別の諸法を一ツのものに歸入せしむる意味であるから、開會といふ時は直に眞理顯彰、諸法統一、平等無差の綜合的名稱と心得べきである。是の如く考へるとき開會

の思想は但だ法華經に限るべきであるが、佛一代の聖教に於て、凡そ圓理を説く處又幾分開會の思想がないでもない。故に吾祖は一代大意鈔（一八四）に爾前の圓として、華嚴・淨名・般若等圓理の證文を擧げ來りて、「少々開會の法門を説く處もあり」と仰せになつて一往法華以前の開會をお許しになつて居る。然し通漫に法體教理の融通を以て開會と見なすならば、佛教に限らず他の宗教及び哲學思想中にも、之を見出すことが出来るであらう。其では開會を以て法華最勝の妙用、法華思想の全的表現などと珍重すべき價值はないと思ふ。加之このまゝ粗略に考ふるならば爾前も法華も念佛も題目も同じと云ふ思想に煩ひされ、やがては權實雜亂の大謗法に墮することであらう。吾祖の所謂「日本國の謗法は爾前の圓と法華の圓と一ツといふ義の盛なりしよりこれはじまれり」との御言葉は移して以て吾等が將來の警告とせねばならぬ。そこで更に開會の眞意、内容、目的等を研覈して見ると、容易に前述の如く簡單に説明しては措けない。即ち開會の意味は前の通りに相違なけれども、立名の所以は正に法華にあるので、根本は法華の妙旨を發揮すべき大事な法相なのである。その言葉丈を暫く爾前の圓教に寄せて觀たまでに過ぎないのである。言ひ換れば法華開會の後、更に爾前を顧みてその法味を再吟味し、その法門の價值批判を試みたに過ぎないのである。

されば開會は法華の妙を顯はすべき主要の法相で、法華思想を其まゝ顯はす言葉だとも云へるのである。即ち天台の玄義（二上四十四左）には「二に妙を明さば通して二となす、一には相待二には絶待なり、此の經（法華經）は唯二妙を論ず」（原漢文）とありて、相待に妙を論ずる時には、今（法華）昔（爾前）彼（爾前）此（法華）相對し、彼の昔の龜の教を破廢して今の教の妙なるを示し、絶待に妙を論ずる時には、權即實三乘即一乘と開會するが故に、實の外に權なく一乘の外に三乘なく、全く今昔隔會の法の別なきを彰はして、正に法華の獨妙を論ずるのである。故に前者は一往彼此の龜妙を判じ、後者は施權の彼を開會して、法華の實法に歸納して見れば、本來この實法の本心から、施權

の諸法を分別したのだから、皆一實の妙法となつて、彼此權實の相はなくなるのである。是を宗祖は總勘文鈔（一八九七）の中に「四十二年の夢中の化他方便の法門も、妙法蓮華經の寤の心に攝まりて、心の外には法なきなり、此を法華經の開會とは云ふなり」と仰せになつてゐるのである。即ち爾前の諸經は法華の眞實を顯はさんが爲めの權謀なるが故に、法華の實が顯はるれば爾前の權謀を要しなく、凡ては法華經體内のものとなつて、比較すべき何物もなく皆法華の一乘法となつて、恰も權經の存在を亡じた形になるから、開の時即ち廢すとも言はるゝのである。されば宗祖は「絶待妙と申すは開會の法門にて候」（縮遺九八）と仰せになり、併せて謬り易き思想を警戒して居られる。

是の如く絶待妙の意は、一代聖教を其まゝ法華經なりと開會すれども、法華經こそ能開の妙で、爾前經其他一切の法を能く開會する妙用ありとなし、爾前經等はこの法華經によりて開會せらるゝ所開の法と定めて（遺文一九五、四九三）開會の主體を明にすべきである。隨て諸大乘經中の法門も、法華の爲めの部分法として、或る時はこれを開會して活用し、又或る時は法華經の開會によりて、諸經當分の教益を究竟せしめる妙術をも含まれて居るので、開會は又淨化・活用・成佛をも意味することになるのである。（御遺文一八九七、一九一一）この場合逆即是順と相對的に開會するのと、小善を其のまゝ大善と同種類に就て開會するのと、二た通りあれども今は之を略する。

然らば前に述べたる法華以前の開會とは如何、華嚴・方等・般若等諸大乘經通同の圓理を、法華部より且く教に約して別して與へる邊より、少々開會ありと説くので、諸味の圓教は更に開すべからずといふものは是である。然れども部に約して通じて奪ふ時は、諸味の圓教は皆多少權を兼含して居る故に、悉く所開の法となること前述の通りである、但し爾前に許さるゝ開會は法のみ開會で、人の開會は法華經に限るとせらるゝので、その版圍に既に廣狹の差のあることだけはよく解る。更にその内奥の眞理を研覈する時は、但だ圓融相即の妙理と言ふだけで、圓教と稱する

一部一帙の經典があるのでなく、左様な教理を含んで居ると云ふに過ぎない。故に法華よりその部の正意としての教理を認めて法開會とすれども、華嚴は佛陀隨自の内證、方等は彈訶を主としての小權對破なれば、開會の意顯はれず般若部は法の融通を目的とするので、聊か法開會と稱することが出来るまでである。其の法門の内容としても、法華の如き諸法實相十界平等の眞理が顯はれざる限り、法のみ開會も未だ完全とは言はれぬ。況して爾前の開會は各其部内に限られてゐるが、法華の法開會は總じて一代聖教を所開の法とする。故に吾祖は「法開會の文は方等般若にも盛に談ずれども法華に等き事なし」(御遺文六六六)と仰せられたのである。

其上に法華迹門の開顯に於ては、開權顯實に於て爾前の權の教理を開會し、會三歸一に於て爾前の權の行人を開會し、圓滿なる法の開會の上に、爾前に絶へてなき二乘人天等廣く九界の衆生を開會して、等しく一佛乘に會入せしめた。是が諸經に秀でたる人の開會で、この時には開會によりて五具の思想がよく顯はれてくる。即ち皆成佛を目的としたものである。是の如く迹門の四一開會の上に、本門の開顯に於ては、伽耶近成の教主釋尊を以て、五百塵點久遠本佛の垂迹となし、その迹佛を開會して、本佛の實事を顯はすと共に、總ての佛界の根本的統一をはかり、迹門の四一開會に對して、本門の教理行果を顯はす、即ち本地所證の境界たる本有の實相も茲にあるのである。

以上迹門の開顯を以て、爾前の入法を開會し、本門の開顯に依て、爾前迹門の諸佛を開會し、二門の開顯を以て正に法華の開會を全うすとなすものは、尙ほ迹門に立脚せる天台の開會思想にして、本門立脚の吾祖より見れば、一切所開となるべきである。其は壽量品の顯本を塵點久遠とせば、從來の佛法を開會し得るとするも、過去に塵點の最初あれば、本當に過去常とは云はれぬ。剩へ本佛所證の境界を迹門所顯の實相とする様では、諸味の圓體同に遠からざる感じがする。乃ち吾祖は本門壽量品の文底を徹見して無始の古佛を顯はし、古佛の内證を妙法蓮華經としたので、

本佛も無始無終三世常住にして、所證の本法亦本有常住事常無作の妙法なれば、三世十方の諸佛並に所説の經法而かも今日顯説の壽量品に至るまで、悉く今の壽量文底妙法五字に對すれば、序分であり主段準備の法門なれば（御遺文九四二）五百塵點本覺の佛と雖ども、眞に無始の本佛に開會せられ、壽量品までの無数の法門も、一切妙法五字に攝まつて、妙法本佛の外には何物もなき程に、圓滿究竟の開會が行はれる。隨てこの時には偉大なる包容性も、三法一体の妙旨も、實際に發揮せられるので、是を眞に法華經の開會とも、皆成佛道とも云ふ、絶待唯一の法門觀であり、世界統一の本佛觀である。開會の思想も茲まで來なければ徹底しないのである。茲に無限大の救済力があり、茲に萬法活用の妙能あるを知らねばならぬ。徒に淺薄なる開會思想に泥んで、權實雜亂の大謗法に墮せざらんことを切望する次第である。

（十二、十、十五、在延學寮刻卒未定稿）

清澄寺大衆考

鹽田義遜

- 一、はし がき
- 二、清澄の大衆
- 三、淨顯 義淨 義一 慈義
- 四、宗祖と淨顯 義淨
- 五、淨 圓 房
- 六、聖 密 房
- 七、道義房義尙
- 八、圓智 觀智 實成
- 九、明心 圓頓 西堯 實智
- 一〇、伊勢公ノ御房
- 一一、助ノ阿闍梨
- 一二、明 慧 房
- 一三、肥 前 公

一

清澄寺大衆とは宗祖當年に於ける清澄寺の大衆の意である。これに先達て先づ師の房たる道善御房に就て述ぶべきであるが、これに就ては去月法華誌上に「舊師道善御房」と題して一文を草した故に、本稿は道善房以外の清澄の大衆に就て述べることにする。これを研究するに當つては、御遺文が根本史料であつて、次で遺文に就ての諸先師の末註等を参考して、これを彷彿乍ら取纏めて當年清澄に於ける聖人の四圍の環境を明にせんとするものである。

古來諸先師の研究中清澄の大衆を明かにしたものは、別頭統紀第三に當時に於ける同門の縑素とし、且つ清澄寺初轉法輪の折の對告衆として

道義房、淨顯房後歸三千高祖賜三諱日中、義淨房、青蓮房、明心房、實成房、淨圓房後歸三千高祖賜三諱日中、圓頓房、西堯房、圓密房、觀智房、實智房、圓智房雜僧稚兒之類咸出勞之(全、八〇)

と十三名を列ね、又錄外考文五には「開宗之日在座之人」として、前掲の外に地頭景信を出し、更に圓智、道善房の略傳を掲げて居るが、要するに是等の中圓密を聖密の誤とすれば、青蓮を除いては遺文の中に散見する、清澄を中心とする人々を列舉して、且らく清澄の大衆とし、又聖人初轉法輪の對告に擬したものである。

今遺文中に散見する當時の清澄の大衆を列舉するならば、清澄寺大衆中に七名、御振舞鈔に五名、善無畏鈔に三名、報恩鈔、四信五品鈔に各二名、新尼鈔、光日房御書、聖密房御書、別當御房御返事に各一名を見るのであるが、此等中にも勿論重出もあるので、別人としては且らく十五名を算することが出来る、即ち左の如くである。

人名	書名		御振舞鈔	光日房御書	報恩鈔	四信五品鈔	聖密房御書	新尼鈔	別頭御房返事
	善無畏鈔	清澄寺大衆中							
道義房義尙	六五〇		一四一一						
淨顯房	六五二二三七〇								
義淨房	六五二二三七〇								

淨圓房	一三七〇								
伊勢公御房	一三七〇								
圓智房	一三七〇	一四二一							
觀智房	一三七〇								
助阿闍梨	一三七四								一九三〇
實城房						一五〇〇			
圓頓房		一四二一							
西堯房		一四二一							
實智房		一四二一							
明慧房			一四二四						
明心房									
聖密房						一五四三		一六五九	
									續、九九

右の十五名が現に遺文に散見する所であるが、淨顯、義淨の如きは賜書もあり、且つ聖人と最も關係のあつた人々である。孰れにしても遺文中に於ける表示の多少は、順にまれ逆にまれ聖人との關係の親疎を物語るものである。

尙ほ此の外現存古文書中に、且らく三名を見出すことが出来る。即ち其一は身延文庫所藏の嘉曆三年正月の「日進聖人仰之趣」(樓神二一號所載)に、開宗當日の狀を述ぶる中に道善房は勿論、外に道義房、義一房、慈義房の三名が

見られ、又金澤文庫所藏の建長年間の寂澄手澤本の奥書に依れば、肥前公法鑣又は日乳が當時清澄の大衆であつたことが明かである。故に遺文散見の十五名に今の古文書の義一房、慈義房、肥前公の三名を加へて、且らく十八名を算することが出来る。以下是等諸人に就て述べることにする。

三

淨顯房、義淨房、義一房、慈義房

清澄寺大衆中に於て宗祖と最も親しかつたのは、恐らく淨顯、義淨の二人であらう、大衆中に於て現に賜書の存するのは聖密房以外には此の二人者のみである。又此の二人者は他の大衆とは異つて、その賜書の多い点からも、法門の内容からも早く聖化に歸し、隨つて親しい關係にあつたのである。今その賜書を出さば左の如くである。

佐前	文永七	善無畏三藏鈔 ^{七三}	淨顯、義淨
同	八	佐渡御勘氣鈔 ^{七〇}	同 同
佐渡	同一〇	義淨房御書 ^{五九六}	義淨
	建治二	清澄寺大衆中 ^{七三〇}	淨顯
佐後	同	報恩鈔 ^{一四}	淨顯、義淨
同	同	同 送狀 ^{二五}	同 同
同	同	華果成就鈔 ^{二七}	同 同
同	同	弘安元	同 同
		本尊問答鈔 ^{七〇}	淨顯

此の外二人者の名の出づるものは前表の如くである。

此二人は遺文中に於ては宗祖との關係は明瞭ではないが、恐らく二人共に健鈔(七、六)のいふ如く、宗祖と共に道善房の弟子と見るべきであらう。且つ二人は共に稍先輩であり、古來よりの聖傳は等しく宗祖開宗の日の初轉法輪の折、地頭景信の難に宗祖を庇護して華房に免れしめたと傳へる。此のことは本尊問答鈔に

貴邊(淨顯)は地頭のいかりし時、義城房とともに清澄を出で、おはせし人なれば、何となくこれを法華經の御奉公と、おぼしめして生死を離れさせ給ふべし。〇七六
とあり、又報恩鈔に

日蓮が景信にあだまれて、清澄山を出でしに、追ひてしのび出でられしは、天下第一の法華經の奉公なり、後生は疑おぼすべからず。〇七五
等とあるに依て古來よりしか解したのであらう。

併し乍ら身延文庫所藏古寫本、聖滅四十四年後の嘉曆三年戊辰正月一日の「日進聖人仰之趣」に依れば、身延第三世日進聖人仰として、開宗の日の有様が古老僧よりの聽聞として

一、日本國中の諸宗念佛、眞言、禪宗等皆無間亡國天魔と云々、其の時導善の御房を奉_レ初數十人の人々赤面してをします。良あて導善御房聖人をつくく_レと御覽あて被_レ仰けるは、道義御房の念佛し無間の業歟……其時導善御房は戸をたて、内へ入り玉ふ也、其後安房上總の念佛者と云百余人同心して、彌陀佛の敵よとて、夜打に寄て打殺しまいらせんと儀する處に、つねに聖人に付そいまいらせし、義一房、慈義房二人の御同宿此のよしを聖人に語り申也、其の故に夜打をのがれ玉ふ也、其の後東條左衛門に所をおはれ玉ふ也。

と記して居るが、此の記事が果して事實とすれば、開宗の說法に對する念佛者等の聖人夜打のことは數日後に屬し、又景信よりの擯出は更に其の後となるのである。

此の記事に依れば追放の事實は古傳と一致するが、唯時間の上に相違があり、又不時の難を免れしめたのは淨顯義淨でなく、義一慈義の二人となるのである。今且らく開宗の日の折伏に對する、念佛者の難は義一、慈義の内報に依て免れたとしても、後の地頭景信の追放の時に、淨顯義淨が宗祖を慕つて清澄を出てたことは、本尊問答鈔並に報恩鈔の文意に依て明かである。故に日進聖人の仰を眞なりとすれば、初轉法輪の折伏に對しては、念佛者の難と地頭景信の難と二回の難があつたと見なければならぬ。今且らく斯く見るとすれば、最初念佛者の難の時は義一、慈義二人者の内報に依て難を免れ、次の景信の難の時宗祖追放の折は淨顯、義淨の二人も共に、且らく清澄を立ちのいたと解すべきであらう。

四

更に宗祖と淨顯、義淨兩人との關係に就ては報恩鈔には

但し各々二人は日蓮が幼少の師匠にておはします、勤操僧正、行表僧正の傳教大師の御師たりしが、かへりて御弟子とならせ給ひしがごとし。〇五

とあるに依れば、二人は道善御房の弟子であり、且つ宗祖より先輩で出家以來何かと指導せられたことが明かである。然るに傳教と勤操、行表との如く後には却て宗祖に歸し、同じく法華の行者の一分となつた様である。故に佐渡御流罪中にも常に文書を往復して、安否を氣遣はれたことは、佐渡御勘氣鈔、己心佛界鈔等に徴して明かである。

されば宗祖は常に二人者を通して、自己の主張を清澄の大衆に呼びかけ、且つ師の房を始め大衆の捨邪歸正を勤めて止まなかつたのである。又清澄寺大衆中に

去年不_レ來如何、定めて子細有らん歟。七〇

とあるは二人が時々身延の聖居を訪問されて教を受けたことが窺はれる。就中淨顯房が聖化に歸したことは、報恩鈔送狀に

無_二親疎_一法門を申すは心に入れぬ人にはいはぬ事にて候ぞ、御心得候へ、御本尊圖して進らせ候。二五

とあるに依て證することが出来る。何となれば最初の法門に對する誠に依ても明かであるが、本尊を授與せられたことに依ていよゝ明かである。これに就ては文永十二年の新尼御返事に依れば

但大尼御前御本尊の御事、おほせつかはされておもひわづらひ候、乃至領家はいつわりおろかにして、或時は信じ、或時はやぶる不定なりしが、日蓮御勘氣を蒙りし時、すでに法華經をすて給ひき、日蓮重恩の人なれば、扶けたてまつらんために、此の御本尊をわたし奉るならば、十羅刹定めて偏頗の法師とをぼしめされなん。尼御前我身のとがをばしらせ給はずして、うらませ給ふらん。七〇

と示されし如く、重恩の大尼御前にさへ退轉の事ありし爲に、御本尊の授與はなかつたのである。此の点から見て二人者は不退轉の歸依者なることは知るべきである。

又淨顯房は建治二年道善房遷化の後には、その後を襲つて清澄寺の主座となつたことは、報恩鈔送狀に『御まへと義城房と二人此御房をよみてとして』と述べた宛名に清澄御房とあるはそれがためであらう。又義淨房には文永十年己心佛界鈔を賜ひ、壽量品の『一心欲見佛、不自惜身命』の文を引いて

日蓮が己心の佛界を此文にて顯すなり、其故は壽量品の事の一念三千の三大秘法を成就せること、此文に依て顯す也。五九六

と遺文中最初に三大秘法の名目を示し、不惜身命の信心を勧められて居る。若し弘安元年の華果成就鈔は、宗祖が一期弘通の功德を師の房に回向せられた、報恩鈔二卷の意を要約して述べたもので

稻は華果成就すれども必ず米の精大地にをさまる、故にひつち生ひいで、二度華果成就するなり、日蓮が法華經を弘むる功德は、必ず道善房の身に歸すべし。よき弟子をもつときんば師弟佛果にいたり、あしき弟子をたくはひぬれば、師弟地獄におつといへり。二七

と結び、師の房の回向に擬して二人者の信心を勸奨せられたのである。若し本尊問答鈔に至つては、曾て授與せられた本尊の疑問に對する説明書で、これ不空の觀智儀軌に出づる眞言の法華曼荼羅と我が大曼荼羅との相違を指示せられたものである。内容に就ては今の所論ではない。此の外二人者への善無畏鈔並に佐渡御勘氣鈔等は、道善御房攝化の法門であるが、一切は報恩鈔二卷に依て解決せられて居る、蓋し報恩の觀念は宗祖の道德觀の根本である。

若し佛祖統紀三には淨顯の諱日中(仲)と賜ひ(全書、八〇)又考文五に依れば淨顯は日專、義淨は日住(全書註四)と賜つたといひ、又一説には淨顯は聖人の肉兄といふが考異師のいへる如く信じ難い(全書註三)のである。孰れにもせよ二人者は宗祖と共に道善門下にあつて稍先輩であり、且つ法兄弟の關係にあつて宗祖の説に耳を傾け、相等信仰があつた人々である。若し最初清澄法難に於ける庇護に就ては、道一、慈義兩房の問題を留めて置く外はない。

五

淨圓房

淨顯、義淨以外の清澄の大衆の中で、賜書の存するは淨圓、聖密の二人である。淨圓房に就ては清澄寺大衆中に虚空藏菩薩の御恩をほうぜんがために、建長五年四月廿八日安房の國、東條の郷清澄寺道善之房持佛堂の南面にして、淨圓房と申す者並に少々の大衆に、これを申しはじめて其後二十余年が間退轉なく申す。^{七三}

といふに見れば、淨圓房は正しく初轉法輪の對告衆であつたに相違ない。且つ開宗十年後の文永元年九月の當世念佛者無間地事の初に

安房國長狹郡東條花房郷、於蓮華寺對淨圓房日蓮阿闍梨註之。^{五五}

とある（今の文の東條は西條の誤、考異全^{三三}）が、當時淨圓房は西條花房蓮華寺に住して、開宗以來宗祖の諸宗批判に對し疑問を懷いて居つた故に、念佛無間の所以を詳説したのが本書である。又淨圓房に對して宗祖が自ら阿闍梨と稱する点から見れば、淨圓房は後輩であつたからであらう。又當時蓮華寺は清澄の配下で、開宗後の難並に同年十一月十一日小松原の難を遁れたのも此處と傳へる。若し善無畏鈔に依ればその三日後、即ち十一月十四日道善御房と此に於て見參し、道善御房に心から捨邪歸正を勧めたのは此處である。即ち同鈔に

此諸經諸論諸宗の失を辨へることは虚空藏菩薩の御利生、道善御房の御恩なるべし。龜魚^{かめうし}すら恩を報ずる事あり、何に況や人倫をや。此恩を報ぜんがために清澄山に於て佛法を弘め道善御房を導き奉んと欲す。而るに此人愚癡におはする上、念佛者也、三惡道を免るべしとも見えず、而も又日蓮が教訓を用ふべき人にあらず。然れども文永元年十一月十四日西條華房の僧坊にして見參せし時、彼人の云く我智慧なければ請用の望もなし、年老いていらへなければ、念佛の名僧をも不立、世間に弘まる事なれば、唯南無阿彌陀佛に申計也。^{九四}

とはその折の宗祖の述懐である。後年報恩鈔執筆の動機は今の文中に躍如として拜することが出来る。

以上の事情を綜合して淨圓房は矢張道善房の弟子で、恐らくは文永頃から西條華房蓮華寺の寺主となつたのではないからうか、宗祖に對しては法兄の様にも思はれる。然るに傳燈大師錄に依れば淨圓は俗名を太郎重政といひ、貫名重忠の長男で淨顯並に宗祖の舎兄に當り、法諱を日在と稱し、小湊の妙蓮寺の歴代と傳へるが、若し西蓮寺縁起なるものを信じ得るとすれば、強ちに推論ともいはれない。又佛祖統紀三は高祖に歸して諱を日在と賜ふ(全書八〇)と前説に依つて居るが、此等の説はどの程度に信じてよいか相等吟味する必要がある。若し姉崎博士は淨圓を法敵(法華經の行者日蓮^五)と見て居るが、淨圓は宗祖と共に道善御房の弟子で、淨顯、義淨に對すれば目下と思はれるのである。

六

聖密房

次に聖密房であるが、建治三年聖密房へ遣はされたる賜書に依れば、専ら眞言の邪義を批判し、最後に

これは大事の法門なり、虚空藏菩薩に參じて、常に讀み奉らせ給ふべし。六一六
六五六

とあるに依れば、聖密房も矢張當時清澄の學僧であつたことは疑はれない。然るに健鈔には

此聖密坊と云は眞言宗にて、而も大聖へちなみ申たる様なる人歟云々(二五、八五)

といつて居るが、此の『因み申したる』の意味は、宗祖にたよつたといふ意味か何か不明である。又眞言宗といふことは法門の内容らか來たものであるが、既に當時清澄が台密であり、且つこれを是正するのが宗祖の役目であり、本

書執筆の動機と見れば、密徒とは台密の意で東密とは解されぬ。されば巧異下には健鈔の説に依り、「密徒而陰慕聖化二者歟」(全書^五)といへる如く、當時清澄は慈覺大師を開山とする台密であり、且つ後世に至つては淨顯、義淨等の計らいで、每年身延宗祖會下へ、幾人かの留學生を派したことは、清澄寺大衆中等の文意からして明かであり。今の書にも宛名に「聖密房遣^レ之」とあるより見て、聖密房も或は留學生の一人であつた様である。

更に身延録外に見ゆる別當御房御返事に依れば

聖密房のふみにはしくかきて候なり、あひてきかせ給ひ候へ、なに事も二回清澄(一回御經は誤讀)の事をば、聖密房に申しあわせさせ給ふべく候か、世間の理をしりたる物に候へばかう申すに候、これへの別(所は誤)頭ななどの事は、ゆめゆめをはず候。いくら程の事に候べき、但な(名)ばかりにてこそ候はめ、乃至大名を計るものは小耻にはぢすと申して、南無妙法蓮華經の七字をば日本國にひろめ、震且高麗までも及ぶべきよしの大願をはらみて、其願を満すべきしるしにや、大蒙古國の牒狀しきりにありて、此國の人ごとの大なる歎きとみへ候。日蓮又先よりこの事をかんがへたり、閻浮提第一の高名なり。先よりにくみぬるゆへにまゝこ(繼子)のかうみやう(功名)のやうに、専心と(に?)は用ひ候はねども、終に身のなげき極候時は、邊執のものどもも、一定と(た?)かへぬとみへて候。これ程の大事(蒙古襲來)をはらみて候ものゝ、少事をあながちに申候べきか、但し本寺(當時?)日蓮心ざす事は生處なり、日本國よりも大切にをもひ候、例せば漢王の沛郡ををもくをほしめしゝがごとしかれの生處なるゆへなり。聖智(?)が跡の主となるをもんてしるしめせ、日本國の山寺の主ともなるべし。日蓮は閻浮提第一の法華經の行者なり。天のあたへ給ふべきことわりなるべし。乃至これより後は心ぐるしくをほしめすべからず候 云々

乃時 別當御房御返事。(續九)

とあつて年號は不明であるが、文の内容より見て文永建治の交のものらしい。この二間寺といふのは二間川が清澄に流を發し、曲折南流して天津に至り、袋倉川と合して外洋に注ぐより見るに、或は今の天津若しくはその近邊にあつたのであらう。且つ此の清澄二間に就ては、建治二年の清澄寺大衆中に

東條左衛門景信が悪人として、清澄のかひしゝ等をかりとり、房々の法師等を念佛者の所従にしなんとせしに、日蓮敵をなして領家のかたうどとなり、清澄二間の二箇の寺、東條の方につくならば、日蓮法華經をすてんとせうじやう(請誡)の起請をかいて、日蓮が御本尊を手にゆいつけていのりて、一年が内に兩寺は東條が手をはなれ候しなり。虚空藏菩薩もいかでかすてさせ給ふべき。大衆も日蓮を心へすにをもはれん人々は、天にすてられたてまつらざるべしや。七三

等とあるに依れば、建治二年以前に清澄二間の兩寺に關して東條と領家との勢力争があつた様である。然るに此寺が虚空藏菩薩の利生で領家に期したのである。

此に問題となるのは兩寺の別當であるが、兩寺が同一別當に管掌せられたか、各一人宛の別當があつたが不明であるが、報恩鈔送狀に依れば淨顯は建治二年七月清澄寺を管理した様であるから、今の別當御房御返事は或は淨顯房へ宛てたもので、二間寺の別當に宗祖を淨顯房が推薦したのかも知れぬ、これに對する返信が別當御房御返事である。即ち生國の寺の別當といへば、漢王が沛郡を非常に尊重する様に、進んで受くべきであるが、今自分は法華經の題目を日本國を始め、支那高麗迄も弘通すべき大願を立てたのである。天の御計らいで此の使命があるから、折角の御好意ではあるが『これへの別當なんどの事ゆめゝ思はず候』と辭退せられたのである。

又文の最初に『聖密房のふみにくはしくかきて候、よりあいてきかせ給へ』とあるのを、若し聖密房御書とすれば今の別當御房御返事は、建治三年の聖密房御書の後でなければならぬ。果してさうだとすれば、此の問題は道善房死後何人かに依て（淨顯等？）二間寺の別當に宗祖が擬せられたものといふべきである。何れにしても聖密房は清澄より當時身延への留學生の一人であつた様である。若し別頭統紀二四（全書下^{五三}）、門葉縁起等には聖密房を以て、駿河の西山高橋入道なりといふが當らない様である。因に録内第百十七番目の聖密房御書は、第百四十七の斷片の重出なることは、愚案記（三、^{五三}）の如くである。

七

道義房義尙

以下は全く賜書のない清澄の大衆であつて、遺文に依る外全く手掛はないのである。即ち種々御振舞鈔に依れば佗人はさて置きぬ。安房の東西の人々は此事を信すべき事なり。眼前の現證あり。い。の。も。り。の。圓。頓。房。、清澄の西堯房、道義房、か。た。う。み。の。實。智。房。等。は、たうとかりし僧ぞかし。此等の臨終はいかんがありけん尋ぬべし。乃至日蓮こそ念佛者よりも、道義房と圓智房とは無間地獄の底におつべしと申したりしが、此人々の御臨終はよく候けるか。いかに、日蓮なくば此人々をば、佛になりぬらんとこそおぼすべけれ。^{二一四}

とあるに依れば、此等五人は粗ぼ同一地位の人々であり、且つ大衆中に於ても相等上位にあつたことは『たうとかりし』文で明である。而して此等五人は圓頓房を中心として、西堯房、道義房、實智房、或は圓頓房と次第すべきであらう。又是等の内今の文の外にその名の見ゆるは道義房と圓智房とである。

先づ道義房に就ては文永六年の善無畏鈔に依れば、道善房の事と叙して

此人の兄道義房義尙に此人向つて、無間地獄に墜すべき人と申してありしが、臨終思ふ様にもましまさおりけるやらん。〇六五

とあるに依れば、道義房とは道善房といふ如く、或は清澄塔中の坊名かも知れぬ。即ち清澄の岩村執事は曾で十二坊ありといひ、大衆中には『房々の法師等』二三とあるからである。或は通稱で字を義尙といつたのであらう。この道義房は熱心の念佛者であつたらうことは、左記の兩書共に無間地獄といひ、若し身延文庫の日進聖人仰之趣には

良あて導善御房聖人をつくぐと御覽あて被し仰けるは、道義御房の念佛し無間の業敷。道義御房は清澄寺の近所也。清澄寺は里より七里へたてぬる處也。寺へ登て四十年が間、一日に念佛一萬返、阿彌陀經百卷づゝ讀玉ふ也。此の人を生身の彌陀の如くに人貴みし也。

聖人仰云、道義御房は百卅六の地獄の中には無間地獄の底に落ち給ふべきなり、其故は一人勝て無間の業たる念佛被し申故也。

と御振舞鈔では清澄の人の様であるが、今の文に依れば清澄へ七里の所に居たとあるが、果して何處か不明である。

併し乍ら善無畏鈔には明に『此一人の兄』とあるから道善の法兄なることは明である。(啓蒙、三〇五)然るに一説に清澄寺の僧、御文に兄とは肉兄なりや、法兄なりや詳ならず。(聖典大辭林七〇)

と述べて居るが恐らく肉兄ではなからう。併し宗祖の法伯父であつた様であるがその他は全く不明である。

八

圓智房、觀智房、實成房

若し圓智房に就ては、大衆中、御振舞鈔、報恩鈔、四信五品鈔等に見え、御振舞鈔に依れば

圓智房は清澄の大堂にして、三箇年が間一字三体の法華經をかきたてまつりて、十卷をそらにをばへ、五十年が間一日一夜に二部つゞまれしぞかし、かれをば皆人は佛になるべしと云々。^{二四}

と圓智に就て述べて居るが、且く三の事實が觀取される。一に圓智は未だ聖化に歸せざるも、法華讀誦を日課とせること。二に五十年間二部宛の法華を讀誦せりといへば、御振舞鈔が建治二年作であるから、時に宗祖は五十歳、圓智房は七十歳以上の老齡なりしこと。三に右法華讀誦の日課は清澄山が台密を證し得ることである。

併し乍ら第一條に就ては、御振舞鈔に『道義房と圓智房とは無間地獄の底におつべし』^{二四}とあり、又四信五品鈔には

明心と圓智とは現に白癩を得、乃至罰を以て惡を推するに、我門人等は福過十號疑無き者也。^{四三五}
 と無間、白癩の罰と記せるは、圓智は謗法者で終つたのであらう。併し乍ら相等學者で弟子に觀智房のあつたことは大衆中に

圓智房の御弟子に觀智房の持ちて候なる。宗要集かしたび候へ。そのみならず、ふみの候由も人々申し候し也。
 早々に返すべき由申させ給へ。^{七〇三}

の文に依て知ることが出来る。又觀智房も圓智の弟子で建治二年頃或は身延に留學した清澄の青年僧の一人であつたといふ外知る由はない。併し乍ら遺文中常に圓智と引合に出さるは實成(城)房である。即ち報恩鈔には

提婆、婁伽利にことならぬ圓智、實城が上と下とに居ておどせしを、あながちにおされて、いとをしとおもうとし

ころの弟子等をだにも、すてられし人なれば（道善）後生もいかんがと疑ふ。但一の冥加には景信と圓智、實城とがさきにゆきしこそ、一つのたすかりとはをもへども、彼等は法華經の十羅刹の、せめをかほりてはやく失せぬ。〇五と右の文に依れば圓智、實城は共に道善の法兄弟で、圓智、道善、實城と次第すべきであらう。且つ二人は常に道善房の歸正を防げたが、道善房以前に死去した様である。これを宗祖は謗法に依る早世と斷じられたのである。就中圓智は清澄寺大衆中、御振舞鈔、報恩鈔、四信五品鈔に都合四回謗法の代表として引合に出されたことは、清澄大衆中隨一の謗法者であつたと肯かれる。啓蒙所引の古鈔に

圓智か實成の二人の間に一人、聖人の虚空藏堂の前にて御說法ありしに、御顔をつくくゝと見て、『誰かと思ひたれば藥王丸にてありけるよ』と蔑り奉りし事これありと申傳へたり。（二五、四九）とあるは、上掲諸文の意よりの想像であらうが、矢張謗法隨一の意が窺はれる。

九

明心房、圓頓房、西堯房、實智房

明心房は圓智と共に四信五品鈔に、謗法の罰に依て白癩に罹つたとあるが、若し同鈔の啓蒙には

明心等とは圓智は清澄の僧なる事、上にも見たり。明心、道阿彌事も定て清澄の者なるべし。更檢（二七、二六）と五品鈔に

明心與圓智現得白癩、道阿彌成無眼者。四一五

とあるに依て道阿彌を清澄大衆となすは不可である。今は謗法者の類を集めたので、清澄大衆を擧げたのではない。

御振舞鈔等は別である。いふ迄もなく道阿彌は法然の法孫道教の事で、思圓房叡尊の弘長中關東往還記には

新善光寺別頭、道教念佛者主領云々、對面の爲め近邊に寄宿し便宜を伺ふ云々。

とあり、又兵衛志殿御返事に『名越の一門の善光寺云々』(縮冊光作覺)とあるは恐らくこれであつて、道教は當時然阿良忠と並び稱せられた、法然房の法孫なることは明である。随つて清澄の大衆と見るは誤である。

此の外御振舞鈔に依れば圓頓房、西堯房、實智房の三人も見えるが、是等三人は他所にその名も見えず、唯御振舞鈔に『いのもりの圓頓房』『清澄の西堯房』『かたうみの實智房』とあり共に『たうとかりし僧ぞかし』のみで、その他は全く不明である。唯圓頓房に就ては健鈔に

其の比井の林(森?)の圓佛(頓?)坊と申す人有り。是は大聖人の御童體の御時の後見也。(七、六五)

といふのは、報恩鈔に道善房に就て『圓智と實城とが上と下とに居ておとせし』といふに徴すれば、圓頓圓智が同系とすれば圓智は道善房の法兄又は目上に位する故に、宗祖幼時の後見ともいはれる。若し『いのもり』に就ては宗祖開宗の遺跡を遺文には『嵩か森』一五三といへば、山中の地名とも思はれるが、西堯房を清澄といへば恐らく、その附近の一地名と解する外ない若し西堯房は山中の一房主、又は清澄寺の役僧であり、道義房より上役又は法兄であらう。

更に『かたうみ』の實智房であるが、このかたうみに就ては、善無畏鈔には

日蓮は安房の國東條片海の、石中の賤民が子なり。〇六

と遊され、又新尼御前御返事には

かたうみ、いちかは、こみなとの磯のほとりにて、昔見しあまのりなり。九〇

と遊ばされたに依れば、此の後の片海、市河、小湊の三地名であるか、これに依つて片海とは一方は海に面した漁村

の意と解すれば、海邊の市河小湊の意である。即ち市河は天津の東南に位し大村で、明應七年七月海嘯のために大半は海に没落し、後天保年中内浦と小浦を合して湊村といひ、小湊を以て『東條片海』といふより見れば、市河、小湊等東條一体が一方海に面した漁村であるより、東條一体を片海と呼んだのであらう。随つて實智房は天津邊に居つた清澄關係の人であつたらうが、その他に就ては全く明かでない。

十

伊勢公の御房

その他の諸僧に就ては清澄寺大衆中に依れば

抑も參詣を企て候はゞ、伊勢公の御房に十住心論、秘藏寶鑑、二教論等の眞言の疏を借用候へ、如し是は眞言師蜂起の故に之を申す。又止觀の第一第二隨身候へ、東春輔正記などもや候らん。圓智房の御弟子觀智房の持ちて候なる宗要集かしたび候へ、そのみならず文の候由も、人々申し候し也。早々に返すべきのよし申させ給へ。七〇三
とあるが、本書は建治三年の正月十一日、佐渡公日向に托して清澄寺大衆に與へられたことは

このふみはさど（佐渡）殿と、すけ（助）のあざり御房と、虚空藏の御前にして、大衆ごとによみきかせ給へ。七〇四
とあつて、當時眞言宗蜂起と聞いていよく佛法の邪正を糺すために、釋疏を集め法華の正法なる所以を力説し、清澄の大衆を引攝せんとせられたものである。今前引の文に就て次の三項が氣附かれる。

一、當時身延と清澄と常に往復ありしこと。

二、眞言破のため身延山に書物蒐集中なりしこと。

三、蒐集の書名に依て清澄の台密なることを證し得ること。

若し清澄寺に就ては、一昨年の本誌の清澄寺草創考に譲つて、此の中伊勢公の御房に就ては、健鈔には『伊勢公と云人も清澄の人』(二三、五三)とあるが、既に御房と敬稱あるに依て相等の地位の人と思はれる。又公の字を用ゐる点からすれば可成の長老であらう。

十一

助の阿闍梨

助の阿闍梨に就ては大衆中の末文にも見へし如く、佐渡殿と共に清澄寺大衆中の讀み手とした点から見て、相等以前より宗祖に歸した人らしい。そのことは新尼御前御返事に、大尼御前に本尊を授與し能はざる所以を縷説して

尼御前我身のとがをしらせ給はずして、うらみさせ給はんずらん。此由をば委細に助の阿闍梨の文にかきて候ぞ、
召して尼御前の見参に入れさせ給ふべく候。三三

これに就て健鈔が『佐渡の助あざり御房』(二三、五四)と讀んだのは、佐渡公日向を逸したがため、助の阿闍梨を佐渡の人としたのは誤である。随つて以下に

仰云、是は佐渡より助のあざりと云人を使として、安房國清澄寺へ遣はし玉ふ也。清澄寺は大聖の御そだちある處なれば、昔なれまいらせたる人々を教化有ん爲也。(三三、五二)

とあるはいよゝ誤であるが、それは古本が『佐渡助の阿闍梨云々』となつて居るに依て誤つたものである。されば

啓蒙には『健鈔義不_レ可_レ然歟』と述べ更に

平賀日意の首書には、此書は日向聖人へ賜り。清澄にて讀ましめ玉へり。御正筆は身延へ納めらるゝ也。佐渡阿闍梨を指せる旨著明なる歟。(三四、四四)

とあるが、朝師本と平賀本には『さと殿とすけのあざり』とあるから明瞭である。若し進んで日向聖人と助阿闍梨との關係に就ては、一説に依れば

若しこれを日蓮聖人の直弟とすれば、佐渡公等の老僧に先んじて、阿闍梨號を有する程の人ならんには、宗紀に何等かの傳もあるべきになきところより見れば、清澄寺にして法臘高き人の日蓮聖人の弟子分として、弟子に準じて應分の御助力をなしたる人なりしならん。(聖典大辭林七一)

と述べて居るが、宗祖の阿闍梨號を用ゐたるに就ては、勿論何等かの標準はあつたにしても、左程嚴密の意味でなく、時に依り、人に依て公といひ、殿と呼び、阿闍梨と稱したのである。故に辨殿日昭には殿と阿闍梨とを用ゐ、日向には公を用ゐた如く、就中拙寺珍藏の辨殿御消息の宛名には

辨殿、大進阿闍御房、三位殿。六六

とあり。又光日房御書には『三位房、佐渡公三四等あるに徴して明かである。即ち大進阿闍(梨)御房とあるも、大進は辨殿以上でなかつたのである。恐らくは當時眞言の灌頂を受けし人を、阿闍梨と稱した例に準じたかも知れぬ。

孰れにしても大尼御前に本尊授與せざる理由を、代辨せしめた点からして相等の學識あつた人であり、且つ日向聖人と同じく房總方面の出身で、大尼新尼等に有縁の人かと思はれる。

十二

明慧房

或説に依れば明慧房とは他師で、光日房御書等に出づとなし、

日本華嚴宗の碩徳、諱は高辨、乃至貞應元年正月十五日門下を誡め十九日寂す。壽六十、臘四十六、著作摧邪輪、摧邪輪莊嚴記等合して七十余卷あり。(聖典大辭林^{三〇})

と述べ、即ち華嚴高僧有名なる梅尾の明慧聖人を以て、光日鈔等に見ゆる明慧房として居るが、光日鈔には

念佛者と持齋と眞言師と一切南無妙法蓮華經と申さざらん者をば、いかに法華經をよむとも、法華經のかたきとしろしめすべし。かたきをしらぬはかたきにたぼらかされ候ぞ、あはれあはれけさん(見參)に入りて、くはしく申し候はどや。又これよりそれへわたり候三位房、佐渡公等にたびごとに、このふみをよませて、きこしめすべし。

又この御文をば明慧房にあづけさせ給ふべし。なにとなく我智慧たらぬ者が、或はをこつき、或は此文をさいかく(才覺)としてそしり候なり。或はよも此房は弘法大師にはまさらじ。よも慈覺大師にはこへじなど人くらべをし候ぞ。かく申す人をばもの知らぬ者とおぼすべし。^{二三四}

とあるが、本文は舊録内二十三の七紙、阿彌陀堂法邸祈雨鈔の末文で、小川泰堂翁に依て日光鈔の斷片と確定(遺文二〇、八七)された分である。

右の文意から見れば明慧房とは、どう考へても梅尾の明慧上人ではない様である。若し啓蒙に依ればかく申人をば等とは、或は御房より下にかけて見るべし。初の二の或の字は明慧房に預けよましめ玉ふ、道理を宣

とあり、後者には

建長六年甲寅九月三日未時了、清澄山住人肥前公日乳生年廿七才、爲佛法興隆法界衆生成佛得道也。

とあるが、此の肥前公法鑱又は日乳とは果して何人なるやといふに、甲斐國小室妙法寺開山中老の肥前阿闍梨日傳が肥前公と呼ぶ様である。別頭統紀十一には多年宗祖の眞言亡國の批判を聞き、偶宗祖身延に退藏せるを聞き、これを毒せんとして果さず、ために弟子となるといひ。妙法寺縁起には宗祖入延後日期日興同伴甲斐遊化の折、惠頂阿闍梨善智法師宗祖と角法して、大石を宙に上げしも下す能はずして弟子となると傳ふるが、統紀には乾元元年寂といひ、寺傳には六十七歳寂とあるから、恐らく乾元元年六十七歳寂と見られる。併し乍ら萬一善智法師が肥前阿闍梨と別人とすればいざ知らず、若し同人とすれば永仁六年の日興の本尊分與帳に

甲斐國大井入道殿孫肥前房者寂日房弟子也、仍日興申_ニ與_之、但今背了。(宗學全書、興門集。_{三一})

とあるが肥前公といふは古來小室邊一体大井庄といひ、地頭大井庄司入道も寂日房の弟子なる点から見て、小室の開山肥前房が或は建長五六年の交眞言研究のため清澄に遊學したとすれば、肥前房は恰かも宗祖開宗の頃清澄の大衆であつたことになる。若し此の推測にして誤なしとすれば建長五年の秋は法鑱といふ眞言師であつたが、翌年は早く宗祖に歸して日乳と稱したのではなからうか。若し果して然りとすれば日乳は、後甲斐に歸り故郷大井の庄に一眞言寺を創したが、文永十一年夏宗祖の身延入山を聞き、身延に宗祖を訪ひ弟子となつたのか、又は大井庄より六老の一人たる日興出でたる縁に依て、宗祖に歸し肥前公日傳と名を賜つたのではなからうか。これに就ては宗祖身延御入山後果して弘安元年の妙法尼御返事に

此深山に居住して門一町を出でず、既に五ヶ年に及べり。_{七七}

とあり、又同四年の上野殿母尼御前御返事に

去文永十一年六月十七日、この山に入候て、今年十二月八日まで、此山を出づる事一步も候はず。三〇
とある如く、一步も山をお出で遊ばされぬとすれば、入山當年の甲斐遊化に問題があり、小室山の縁起にも疑問があることになる。是等の点は更に充分の研究を要するが、肥前房が果して日傳なりとすれば、清澄以來の關係に一脈の自然性がある様に思はれる。

清澄の大衆は道善房並に宗祖を中心として、粗ぼ上述の十八名であるが、是等の中師弟關係の判然して居るのは、道善房と宗祖、圓智房と觀智房位で、淨顯、義淨も道善房の弟子と見て大過なからうが他は判然しない。法兄弟關係としては道義房、道善房、及び圓智房、道善房、實城房と義一房、慈義房等に就ては想像し得るが他は全く知る由もない。今從來の記述に依り且らく師弟、法兄弟等の關係を中心として、上述二十名の親疎の關係を圖表して見るならば次の別表の如くである

斯の如く清澄寺大衆考は、資料が乏しいので非常に研究が困難であり、隨つて正確なる斷案は下し得ぬが、宗祖と清澄大衆との關係が一分なりとも、明かにし得たとすれば幸甚である。本稿は棲神二十號の清澄寺創草考、並に法華二十四卷第七、八號の舊師道善御房と姉妹關係を有するものである。尙ほ擱筆に臨んで清澄山、金澤文庫、身延文庫には何等か文献上の關係のあることを感ずるものである。(昭和二二、九、二四)

日蓮正宗小笠原慈聞師の『先づ本尊を定めよ』
を讀みて宗祖本佛論及神本佛迹論の非を糾す

中 谷 良 英 稿
清 水 龍 山 閱

一、

初に師が立義の所依とする興門相傳兩卷書に就いて問はんとす。抑々相傳書或は口傳法門の特徴として、概して一門一派に偏し、或は後人の添加・攙入・謀書等と思はれるもの多く、随つて正式論場に於ける自他共許の證文とは出來ない。況や貴引の兩卷鈔は、他門流に在りては一切依用せず、のみならず、現に貴派内に在つても、堀日亨師は現存のまゝを全部は信用すべからずとし、先年吾立正大學正宗講座に於て、宗學全書の興尊全集について取捨を試みる。予も當時聽講者の一人として筆受せるものを見るに、兩卷鈔について「重要な書なれども、問題になる所及非難の点もある」と、可なり具体的に、例へば何頁何行より何頁何行に至るは不可、此處は存して可也等と指的せられ且つ「今且く此兩卷鈔を措く」と、これに直接に觸れずに講ぜられたるを記憶す。其他の文書についても可なり批判的に取捨せられたり。尤も頃日同師が其勘定本を吾學師に寄贈啓白せらるゝ所ありと。勿論堀師と雖も全面的に兩卷鈔を不可とせられたのではないが、たとへ部分的にもせよ、現に貴派に於て其根本聖典とし宗祖の眞撰也と

主張する書を、此部分は可、彼部分は不可となすが如きは、畢竟該書は與へて言ふも半身不隨不完全なることを表明し、奪つて言へば名を聖祖に託して後人の僞筆たるの一證をなすものといふべく、況や既に同宗派内に於てすら古今眞僞の異議あり、他門派の一切依用せざる相傳書を以て、立義の權證とすることは、謂ゆる「論未決の已前龜鏡に立つること堅義の法に背く」(法華眞言勝劣事)で、論場に於ける文證の綱格上斷じて安當でない。かゝる相傳法門を百千以て自義を誠證せんとするも一顧の價値なきに等しい。此点に就き敢て的確明快なる解答を請ふ。(兩卷鈔の眞僞に淺井要麟教授大崎學報第六) 十三號に云云、併讀を望む。

二、

次に貴引の組文の解釋について、先づ觀心本尊鈔の

此時、地涌千界出現、本門釋尊爲脇士、一閻浮提第一本尊可立此國。

の「本門釋尊爲脇士」を、師は「本門の釋尊を脇士と爲して」と訓点して

地涌千界出現の六字は、此御本尊を顯す教主を擧げられたもの、本門釋尊爲脇士云云より下は所顯の本尊の爲体を示されたるものにして、決して能顯の上行日蓮大聖人が所顯の本尊の中に飛び入つて脇士となるの義に非ず(今謂く垂迹日蓮は顯彰主としては明に本門の釋尊の脇士と爲り居るゝに非ずや)他の一般日蓮教團にては古來智者と稱せらるゝ人々も、此時地涌千界出現して、本門の釋尊の脇士と爲りて」と訓じ、飽くまでも釋尊を主体とする本尊なりと強辯(又曰、然り。地涌千界は顯彰の宗主)するは思はざるも甚しき大謬法なり。若し左様に解釋する時は、末法に出現せる上行日蓮大聖人が此御本尊中に飛び込んで脇士となることとなり、恰も

素人寫眞師がレンズを向けて置いて自身急いで飛び込んで寫さるゝが如きものとなり、笑ふべく亦憐むべき者也。他派の學者が佛法は釋尊が説けるものなる故に釋尊を離れては佛法なしといふ思想が先入主となつて、釋尊を脇士とすること能はずとする古

き信仰（又曰、實に然り、既に佛法と云ふ、若し佛を尊）は、一往尤もなれども再往の實義に於ては佛法の原理・釋尊の本意に叶はざるなり。

然らば其本尊の法主（又曰、法主の語若し此本尊の法を顯彰するの主とい）は誰なるやといふに、末法下種の教主日蓮大聖人の色心即ち大聖人の當体御魂にして、それをそのまゝ、十界互具一念三千の本尊と顯されて、我等末代の愚凡に一念三千を識らしめ給うたものなれば、

不ルレ識ニ一念三千ヲ二者ニハ、佛（大聖人）起メ二大慈悲ヲ一妙法五字ノ袋ノ内ニ養ミニ此珠ヲ一、令玉レ懸ケニ末代幼稚ノ頭ニ
（本尊鈔）

日蓮が魂を墨に染めながして書きて候ぞ信じさせ給へ——（經王殿御返事）

予カ己心ノ大事不レ如カレ之ニ——（三祕鈔）

本尊ト者法華經ノ行者ノ一身ノ當体也。其寶號ヲ南無妙法蓮華經ト云也——（壽量品御義）

等とあり、此等の聖文を拜見するに本尊は全く末法下種三徳の教主日蓮大聖の色心（又曰、己心の内證に）を文字に顯し給へるものにして、大聖人久遠元初の御悟り、自受用身の御當体御法魂を文字に顯したるものなり。故にまた

其本尊爲レ体カニ塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニ釋迦牟尼佛多寶佛——（本尊鈔）

首題の五字は中央に懸リ乃釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ——（日女書）

ともあつて、釋尊が本尊の主体に非ずして（又曰、否、塔中の妙法蓮華は、無）本佛日蓮大聖人が其法主であり主体なること知るべし（又曰、宗祖は下種の導師、教主）云云。（已上昭和十二年三月號）
（世界の日蓮）取意

此解釋に對して奇異に感ずる所は、一々文の下にも註したれども、

(1) に「能顯の教主上行日蓮大聖人」が自ら「所顯の本尊」の中へ飛び込んで脇士とならば素人寫眞師が云云と言

ひながら、而も貴説は脇士どころでなく自ら本尊の主体に爲り濟まして、自らの色心を寫したものと成る矛盾如何。

(2) に本門の本尊大曼荼羅は、宗祖が始めて顯彰せられたるものであるから、「日蓮が魂を染めながした」とも「己心の大事」とも云はれたので此には異議はない。然るに其「己心の内證」「久遠元初の自受用身」なるものは、聖人あつて始めて有るに非ずして法爾本有、謂ゆる「本地難思、不思議、一法」(本法又は本佛)にして、是れ正しく、本尊の尅体である。聖祖は此を證悟して、本尊に顯彰せられたものである。即ち法爾本有・本地難思、不思議一法なる「本佛本法」は所顯の本尊の尅体で、「本僧本化大聖人」は能顯の導師である。本尊能顯の導師と所顯の尅体とを混濫することと莫れ。而して吾祖が此「己心の證悟」たる、そも何處より得られたるや。外用相承は且く置く、之を内證相承に見るに、壽量開述顯本の釋尊の久遠所證の内容即ち「本佛本法」(一如法)を、大聖人が自ら信解し體驗し給へる所に現前し、その一瞬に於て「遣使還告」の「本僧本化上行」なる自覺に達せられたので、これ儼然たる事實である。それ既に本法證悟の經卷相承による本僧、「遣使還告」である。「壽量開顯の本佛本法あつての本僧である、何處に直に日蓮が本佛で本尊の正体であるとの道理・文證・事實やある(但し十界事常住の觀心義の場合は、唯日蓮が本佛なるのみならず一切衆生皆本佛である。然るに今は教門の道理に依る)。其壽量開顯の本佛釋尊が五百塵点の當初此本佛本法(一如法)を證悟し、已來非生現生非滅現滅、三世常住法界周遍して、每自悲願六或示現し、形聲冥顯の利益を垂る、その「名字不同、年紀大小」、特定の名號を以て稱呼すべからざるより「無作三身の寶號を南無妙法蓮華經」と稱し、七字以て本佛を表す。御本尊は實に此無始久遠の無作三身の本佛釋尊の象を圖顯せられたるものである。故に本尊鈔には其本佛(題目)の身土を

今本時娑婆世界、離三災、出四劫、常住淨土ナリ。佛既過去、不滅、未來、不生、
と釋し更に之を九界に約して

所化以テ同体ナリ

と示し復更に之を正く行者の己心に從て

此レ即チ己心ノ三千具足三種ノ世間也

と結び。此壽量文底觀心所顯の本尊（及び題目）の法体を直下に、

「迹門十四品ニハ未レテ説カレテ之ヲトシテ此本門ノ肝心ヲ於テ南無妙法蓮華經ノ五字ニ佛猶文殊藥王等ニ付ニ囑シテ之ヲ何ニ況ヤ其

已下ヲ乎。但召ニ地涌千界ヲ説テ八品ヲ付ニ囑シテ之ヲ

と釋し、其ノ所付の本尊の爲体即ち儀相を

本師娑婆ノ上ニ寶塔居レテ空ニ塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニ釋迦牟尼佛多寶佛、釋尊、脇士上行等ノ四菩薩

等と仰せられて居る。言ふ所の「本門ノ肝心南無妙法蓮華經」とは其尅体實に無始久遠本佛釋尊の表象である。豈無作

本佛本尊義に非ずや、此場合本化大聖は其本地上行は脇士で、其垂迹日蓮は顯彰の主である。何處に日蓮本佛本尊義

がある。文明に「釋尊の脇士上行等」といひ、又日女書には「釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ」といふではないか。

(3) 此我等の所立に對して、師は「それは文上教相の重の在世脱益の本尊義にして、文底觀心の重の末法下種の本

尊義に非ず」と言はるゝが、抑々「從レテ教起レテ觀」は台當二家教觀の綱格である。壽量品の釋迦本佛本尊義の文上教相

を無視して、如何してか文底觀心の本尊義が成立すべき。然るに、貴宗の日寛師已來本尊鈔の

在世ノ本門ノ末法之初トハ一同ニ純圓ナリ(本)但シ彼ハ脱・此種也、彼ハ一品二半・此ハ但題目ノ五字也。

の文の、上の二句は法体を同じ、下の二句は其相の異を判じ給へる文意を、下の二句は品要相對して勝要法劣品

を判じ給へるものと解して、

文上教相——一品二半——在世脫益——劣

文底觀心——要法五字——末法種益——勝

と立て、在世脫益の觀心は尙是れ今日に望れば教相也劣也として、文底觀心を一向末法にとる。然るに試に思へ、文上と言ひ文底と言ふは文と意との義で、須臾も不可相離しものある。即ち在世佛が第十佛界に約し、又塵点有始久遠に寄せて、法界周遍三世常住を説かれた客觀的を文上教相といひ、それを會衆が、主觀的に十界の大我の無始久遠法界周遍を示されたるものと、自己の妙色妙心に觀心證入して脫益を得るを文底觀心と云ふので、文底は文上を離れず、觀心は教相を離れず、同時同處にあるべきもので、在世の會衆が文上佛界の開顯に即して、文底十界の大我の開顯に觀心證入せるを「眞實當体蓮華證得」(當体義鈔)とも「眞實の斷惑證理」(十法界事)とも「脫益」(本尊鈔)ともいふのである。此_レ在世脫益の舒べた文底一品二半を、末法の爲めに卷いて要法五字として、本化に別付す。本化之を順縁の爲めには開して三大祕法と爲して受持成佛せしめ、逆縁の爲めには合して一大祕法と爲して、下種結緣せしむ。故に品と要とは其法体は則ち同じ、但だ在世と末法と種脱機異れば、其相は卷末法_在世_在異なるのみである。体の同じき所以は、抑々本佛から卷いて付囑せられたものである、何うして勝劣があつてならふ。但し興廢は論ずる、末法種益には要が興つて品が廢れる、然る所以は時機が異なるからである。興廢は直ちに勝劣ではない、混濫してはならない。田中智學居士の『日蓮聖人の宗教』等皆謬る。然るに寬師此義を辨えず文上文底教相觀心を以て遂に在末に分判す、故に我等は、敢て貴所立の文上文底教觀の義意を、糾問するのである。若し教門の義意を無視せる觀心を立つるが如きは謂ゆる天魔であり邪觀と簡ぶ所がない。

若し壽量文底觀心の實義より言へば、何ぞ唯日蓮本佛のみならず、十界三千殊に我等行者皆已心本佛本尊義に落

居す。御義の「此品の如來とは、總じては一切衆生、別しては日蓮が弟子檀那也」、又本尊鈔の「己心、三千具足三種、世間也」「我等己心、釋尊」「我等己心、菩薩界」等、皆正く事の一念三千の觀心法門である。更に貴引御義の「本尊とは法華經の行者一身の當体也。其實號を南無妙法蓮華經と云ふ也」の行者とは、別して聖祖を指した文意ではなく、總じて「我等行者」を指した文意であることは事の一念三千を明された諸文の通格である。

然るに、是等の聖文を自己流に牽強曲釋して、能弘能顯の導師聖祖を直に所弘所顯の本佛と爲し本尊の主体とし、却つて本佛を在世脫佛として捨て去らんとするは、聖自ら本佛の「遣使還告」と名乗り給ふ左祖の敵で、孝經を以て親の頭を撃つ者である、斷じて聖の御本意ではない。試みに思へ、師等も「神力別付の上は、在世脫佛は末法種種佛に教主位を譲り給へば、釋尊よりも大事の日蓮」といふではないか、其能付の佛が所付の佛より劣つて何うならう、父が子より劣る道理がない。但だ其責任が末法は「遣使還告」の本化本僧（本佛ではない）が「唯我一人能爲救護」の「良醫」であるといふ意を「釋尊よりも大事な日蓮」と言はれたものであつて、決して本佛は在世脫佛で、末法には無利益無功德、宗祖が下種の本佛であると云ふ意ではない。文に讀まれず義と意とを看取せねば學問的にはならない、それ此を「千ヶ寺法門」といふのである。本佛が尊いから本僧が尊いのである。父の系譜が子を尊からしめるのである。父が畜種なれば子も畜種である。宗祖が末法下種の導師・教主として尊いのは、在世の本佛が其脱益の要法舒べた文底觀心の一品二半を卷いて末法下種の要法の一字として「遣使還告」された本僧であるからである。要するに在世の人佛法が尊いから末法の人佛法が尊いのである。誤つて本法の人法を揚げて在世の人法を抑へてはならぬ。眞佛敎をして非佛敎たらしめてはならぬ。「過ぎたるは猶及ばざるが如し」請ふ深思精研せよ。

要するに貴説は、下種の教主と本尊の法体主体とを混濫して居る。宗祖を下種の教主導師とするは可、本佛・本尊

の主体とするは不可也。大聖人は本僧として此「本佛法の本尊」を建立し、弘通して、以て末法下種の教主・導師であつて斷じて本佛ではなく本尊の魁体ではない。

(4) 師は又「在世脱益の教主は釋尊なるを以て本果妙の釋迦本尊義もあるべし。末法種益の教主は本因妙日蓮にして、既に神力別付の儀に於て本化上行に末法下種の大任を委托されたる上は、觀心再々往の義に約して言へば上行日蓮が本佛、釋尊は垂迹也」(同誌三月號)云云。然るに聖祖は本佛釋尊が「遣使還告」された本化本僧であつて本佛ではないこと上來述べた通りである。偏に末法の人本佛本僧を揚げんとして、爲めに在世の人釋迦法華を抑ふるに至つたのが、貴宗門の元品の無明である。此義大に彼の日本天台尊舜が、『玄義』の私記縁起序の天台大師の十徳の「自解佛乘」及「玄悟法華圓意」の下、並に『止觀』の「説已心中所行法門」の下に、「釋迦は他受用報身・法華は其所説、

大師は自受用報身・三部は其所説、故に止觀・勝法華等の義に同じ、是れ聖の所破の邪義である。經意祖意は、正しく釋迦本佛本尊であつて、聖祖は本化本僧として「遣使還告」し給ふ導師である、絶えて宗祖本佛本尊義はない。

又師は

「本尊鈔九四八、報恩鈔一五〇九等を拜すれば、釋迦多寶等の迹佛が、中央の南無妙法蓮華經(師によれば本佛日蓮)兩大神(又師によれば妙法蓮華經が世法的王法的實踐的に法界を利益する佛者と示現云云)の脇士となりゐること直ぐに判明す、何處に釋尊を本佛とする證文ありや、祖書多しと雖も釋尊を本佛とする證文不幸にして見當らず、聖文を刮目して拜せよ、南無妙法蓮華經が本佛(師曰く蓮聖祖久遠)釋迦多寶の迹佛なること明了、何處に釋尊を本佛とする筋あるや。されば佛本神迹など言ふは蓮祖の宗旨・日本國の佛法には無き所なり云云

(同七月
號取意)

中央の七字を体の無作本佛とする時は、傍邊の釋迦多寶は用の迹佛なることは理在絶言。然るに中邊相即本体迹用並

へ、擧げたと拜する我等には、師と全く正反對に、「南無妙法蓮華經」は壽量開顯の釋尊の本体本佛であつて、日蓮本佛・釋迦多寶迹佛の義は全く見えない。それは「本尊鈔」に事一、念三千本佛緣起の本尊の儀相を示して

其本尊爲體カ表ニスルカ迹佛迹土ニテ故也

といひ、次に其顯現の時を明して

如是、本尊へ在世五十余年ニ無シ之、八年之間但限ニ八品ニテ此等ノ佛(權小)造リ畫キドモ正像ニ未ダ有ニ壽量ノ佛ニ來ニ入、末法ニ始テ此ノ佛像ヲ可シ令ニ出現セ敷。

と、明に壽量本佛釋尊本尊で、日蓮本佛本尊の文義意俱に無し。續いて本化独自の四種三段(又ハ五重)の教相を明して此の本尊及本門の題目の在處を定め、終に法華一部殊に本門は序正流通共に末法爲正の義を詮し、進んで在世と末法との異相に言及して即ち

在世ノ本門ト末法之初トハ一同ニ純圓(本)。但シ彼ハ脱・此ハ種也、彼ハ一品二半・此ハ但題目ノ五字也。

と、在末種脱品要の相の異りを判じ給うも、毫も其法体の勝劣は判じ給ふてゐない。即ち既述の如く、彼の在世脱益の衆の觀心證入せる符べた文底一品二半を、卷いて妙法五字と爲し、神力別付の正体として、本佛が本化に委囑吾祖今末法に本佛の「遣使還告」として此の本法を弘通し給ふ「本門ノ肝心南無妙法蓮華經」である。

故に文に曰く、

所詮迹化他方ノ大菩薩等ニ以テ我内證(本化の内證に非ずシ)て、久成釋尊の内證。壽量品ヲ不レ可ニ授與スル。召ニ地涌千界ノ大菩薩ヲ壽量品ノ肝心タル以テ妙法蓮華經ノ五字(本化に付)。令レ授ニ與セ閣浮ノ衆生ニカ。此經文ノ遣使還告ハ如何、答テ曰フ、四依也。至本門ノ四依ハ地涌千界末法ノ始ニ必ス可ニ出現ス。今(此)遣使還告ハ地涌也(日)。乃至今末法ノ初カ。至此時地涌ノ菩薩始テ出ニ現シ世ニ、但以テ妙

法蓮華經ノ五字ヲ令レ服テ幼稚ニカニ地涌千界出現本門ノ釋尊ノ爲ニ脇士ト、一闍浮提第一ノ本尊可レ立テ此國ニ
 と。當に知るべし、本化本僧上行日蓮は本佛本尊の始顯主・建立者・弘通師を以て自ら任じ給うことを、何處に日蓮
 を本佛とし本尊の主体とするの義ありや。即ち聖文は明に「地涌千界出現して本門の釋尊に脇士と爲つて」此ノ壽量
 本佛本尊を光顯するの義にして、「本門の釋尊を脇士と爲す」の義ではない。且つ上文に

如是ノ本尊(久成釋尊の内證)ヲ至八年之間但限ニ八品ニカニ來ニ入レ末法ニ始テ此ノ佛像ヲ可レ令ニ出現セ敷。

と明白に壽量本佛本尊は在世但八品の座と、末法の始とのみに出現するとあるに、何ぞ此ノ明文に違して、種脫法体
 勝劣ある二種の本尊を立て、取捨するや。又師の如く訓点して「本化地涌が本門の釋尊を脇士と爲して」自ら本尊の
 主体となる義なりとせんか、今の「遣使還告」及び「四依」の文を如何。又聖文の「本門ノ釋尊」をば在世脫益の人釋
 法門にして劣とし、「在世本門末法之始」の「在世本門」亦脫益の本門にして第四重三段也と捨て去らば(此義寬師
 の説可見)

同じく聖文に「本門ノ四依ニ地涌千界末法ノ始ニ必ズ可レ出現ニ之ノ本門」も亦脫益の法たるべし。然らば本化は脫益劣法
 の四依として末法に出現すと言ふべき歟。此ノ前後の矛盾如何。又神力別付の上は、壽量本佛自身一切用濟み在世脫佛
 用濟みて、付囑を受けた本化上行日蓮が下種本佛となつて之に代るの義とせんか、本佛の「每自悲願」今此三界
 の全文は忽にして反古となる。又聖自ら本佛釋尊と御自身との關係を示し給へる上述の諸文を如何せん。將又吾祖一
 代の行跡(現證)及文證・道理上斷じて無之。何となれば、吾祖は執權(佛)謗實(佛)の世に出でて、彼權佛權法を破
 廢して、此ノ實佛實法を建立、且く、佛本尊の破立の一面を言へば、彼の彌陀・樂師・大日等の權迹の諸佛本尊を破
 廢して此ノ久遠實成の釋迦本佛本尊を建立し給ふことは、開目鈔上卷廿四最も明瞭的確也。いかんぞ本佛釋尊を蔑み
 して自ら本佛と僭し本尊の主体となり給ふの理あらんや、思はさるも甚しい哉。

又種、脱、二種の本尊別立すべき理由何處にかある。今本尊鈔の種脱品要は但是れ体同(在末共に事)、相異(品と)のみ、種脱共に此ノ本佛本法に觀心證入(在世)、歸依信順(末法)するに在り、種脱共に此ノ本佛本法に於てす、此ノ釋迦本佛を脱佛として捨て去らんか、本化本僧たる聖祖の「遣使還告」・「四衣ノ導師」たる資格は誰れが其能遣者たる者ぞ、其能遣者所付の妙法を末法に還告下種するにそも何の不都合ありといふや、又若し末法は下種の時機なるが故に下種の教主たる久遠元初の自受用本佛名字日蓮を本尊の主体とすといはば、末法にも順逆の二機あり、順機は種即脱三益具足の故に本尊を授くるは勿論其義あり、而も逆縁に本尊授與の義祖書に堅く禁ずるを如何。又順機への本尊は當然即脱の故に脱益本尊なるべし、然るに通機に下種本尊を立てて種勝脱劣をいはず、本尊に二種を要することになり、言ふ所の下種本佛本尊は順縁即成の機には、一時的假立に過ぎず、旁々以て甚だ領解に苦しむ。

(5) 又師は、本尊鈔結文の

不識ニ一念三千者ハ佛起ニ大慈悲ヲ妙法ニ五字ヲ袋ニ内ニ裏ニ此ニ珠ヲ令テ懸ニ末代幼稚頸ニ。

之「佛」を大聖人也と註し、「妙法五字」を單に本尊の一法と註せらる(同三月號)、も、是亦全く經意祖意を得て居らない。壽量神力の經意及本鈔前後の文は「佛」は久成釋尊にして、壽量品の良醫・神力付囑の文の「爾時佛告上行等」之佛で、「妙法五字」は壽量品の良藥・神力別付の「四句の要法」であることは在文分明である。此の「佛」の「然於、病者心則偏重」の大慈悲は、在世脱益の一品二半の事の一念三千の珠を、是好良藥の妙法五字三祕總在につゝんで、末法幼稚の我等を救護する爲めに、特に本化上行に付囑し授與せらる。久成釋尊は師たり、本化上行は弟子也。上行は「我本行菩薩道」の本因妙、久成釋尊は「我實成佛已來甚大久遠」の本果妙なり。而して本尊は此本因(本化の)本果(本體に從はば中央の七字迹用)に據れば傍邊の釋迦、具足の本佛の全象たり。是れ即ち世尊が五百座点の當初所證の本法なり。故に聖祖は、傳教が「果

分一切ノ所有之法」等といへるを本鈔に借用し來つて、此五字の体徳を釋成せらる、即ち本因の修證・本果の功德、總含の「因果の功德聚」である。然るに妙法五字を唯「本因妙元初の白内證自受法樂」といふ法相教義は、吾人の了解に苦しむ所である。本因の妙は猶一分の無明を帶す、豈かゝる内證を以て妙法の全体とし大曼荼羅所顯の妙法とせんや。然るに「本種を返上せば久遠元初名字凡夫の上行日蓮が本佛にして釋尊は迹用也」とは吾人の首肯し得ざる所である。若し實相鈔の「凡夫は体の三身本佛・佛は用の三身迹佛」の文と同意なりと言はんか、本佛豈に唯久遠元初名字凡夫の上行日蓮のみならんや。我等も亦体の本佛三身にして、釋迦多寶等は用の迹佛三身なること前に引ける御義と同じ。かゝる無理押し牽強附會を敢てして、日蓮本佛本尊義を立てなければならぬ師の謂ゆる「一往爾前佛教・再往法華佛教・再々往日蓮佛教」てふ、佛教以外の「再々往佛教」を立てなければ日蓮佛教の特種性を發揮し能はずとする歟。是の如き觀心本尊や宗祖本佛論は全く附佛法、學佛法成外道たらざるを得ない。又師が聖文の「妙法五字」を單に本尊に配釋するも(これについては古今異議あり) 聖文の前後に照すに、明に、三、秘、總、在、の、一、大、秘、法、(付囑の正、体なる故) で、單に本尊の一法ではない。

(6) 師は更に

「本尊鈔といへども再々往觀心の重より見れば、富木竹谷等の信者を對告衆とせられたるが爲に『觀心ノ法門少々註レ之』とあつて、大聖人全体の觀心法門は述へ盡されずと見るべき筋があり、獨り興尊に對して御心中の秘事を傾けて明さる、これ即ち兩卷鈔也云云(同五月號) 取意

我等は此に至つて復言ふべき語を知らない。『少々註之』を文字通りに解して、反つて

此書日蓮當身大事也。秘レ之見テ無レノ志ニ可レ被レ開テ拓セ之ヲ歟、此書難多クメ答少シ、未聞ノ之事ヲ人ノ耳目可レ驚ニ動ス之ヲ歟。設ヒ及ニ他見ニ三人四人並ニテ座ヲ勿レ讀ム之。佛滅後二千二百二十余年未レテ有レ此書之心。不レ願ニ國難ヲ期ニ五

百歳ニ演ニ説ス之ヲ。乞ヒ願クハ歴ニ一見ニテ末輩、師弟共ニ詣テ、靈山淨土ニ拜ニ見シトラシニ三佛ノ顔貌ヲ

等。又題號の『如來滅後五百歲始觀心本尊鈔』の金文を看過輕視されたる点、『當身大事鈔』『正像未有』の最深祕書を、對告衆が在俗擅越なればとて、對機說法の隨他意方便・權說視する無軌道の大膽放言に至つては、最早祖書を權證として、宗義を鑽仰すること能はざるを覺ふ。此ノ本鈔觀は延いて此と一具一雙なる佐渡始顯の本尊をも眞實究竟の本尊とせず、該宗相傳の板本尊を眞實究竟、「閻浮第一の本尊」と立つる義を成す。是に至つては明に興門相傳の流義にして斷じて純正至公の日蓮教義には非ざる也。我復何をか言はんや、自法愛染の弊や茲に極まる、噫。

(7) 次に報恩鈔の明に「本門の教主釋尊を本尊とすべし」とあるを師は

本門の釋尊とは在世の釋尊のことに非ずして末法下種の教主日蓮大聖人なることに氣附かざるべからず、本門の本尊三大秘法は末法我等の爲の本尊なれば、末法下種の教主釋尊(連)を以て本尊とせざれば不可なり。三秘鈔にも「壽量品に建立する所の本尊は五百塵点の當初以來此土有緣深厚本有無作三身の教主釋尊是也」とあつて、「五百塵点の當初」又は「本有無作三身」とは久遠元初の名凡夫の當相なる本佛日蓮なること明瞭、若し在世の釋尊は壽量品に於て顯本すと雖も、藏通別圓と次第に昇進して相好を嚴り、而して後の顯本なれば有作莊嚴の假佛なり(同五月號取意)

と、御文明に「本門の教主釋尊」とあるのを歪曲して、「日蓮本佛本尊」義を立つるの非は上に既に辯じた如くであるが、更に問はん、先に本尊鈔の「本門釋尊爲脇士」の本門釋尊をば脱佛・迹佛といひ、今「本門教主釋尊」を忽に下種の教主日蓮本佛なりといふ、其の解釋の彼此矛盾如何。又三秘鈔の「壽量品ニ所ニ建立スル本尊カ本有無作三身ノ教主釋尊是也」も報恩鈔と同じく壽量品に説いてある始覺即本覺の釋尊の上について言へるものにして、開目鈔の「發迹顯本の三如來天の一月なる壽量開迹顯本の釋迦本佛」なること一点疑ふべくもない。何を苦んでか強ひて曲げて日蓮

本佛本尊義を強調するや。又「在世壽量品の釋尊は有作莊嚴の假佛にして無作三身と言はれず」とは何を根據とするや、尤も爾前の釋尊を有作莊嚴の假佛といふは可、若し今經迹門の圓佛は、尙「從_レ劣_ニ辨_レ勝_ヲ」・「不須現尊特身」なること、彼「微妙淨法身・具相三十二・以八十種好・用莊嚴法身」の文見つべし。「用莊嚴法身」の言、有作莊嚴の如く見ゆれども、實には根機圓熟せる今經開權の機感は、生身三十二相八十種好の莊嚴劣應身に即して、微妙淨法身の一大圓佛と感見するものにして、換言すれば法華の開顯によつて爾前の四教四種の機見亡泯する處。任運に微妙淨法身の無作圓佛の感應であつて、決して有作莊嚴有爲の假佛ではない。況や本門は分明に伽耶始成の生身に即して久成の實本を顯す、何ぞ有作の假佛と言はんや。若し始成始覺に即して久成本覺を談するを名けて有作といはざる、貴説の生身日蓮に即する久遠元初の自受用本佛も亦有作假佛ならざるを得んや。或は更に「我以相嚴身光明照世間」等の言を以て有作莊嚴といはざる、何ぞ知らん本化の徳を讚して「身皆金色三十二相無量光明」といふも亦是れ久遠劫來「勤行精進未曾休息」し「漸々積功德」して得たる結果の有作莊嚴ならずや。當に知るべし「五百塵点ノ當初_乃無作三身教主釋尊」とは壽量開顯の本佛釋尊なることを。

是の如く報恩・三祕兩鈔共に絶えて日蓮本佛本尊義なし。本尊鈔・開目鈔亦上述の如し。但し報恩鈔は三祕並明文なるが故に、單に本尊を明す文に異んじて「本門ノ教主釋尊を本尊とすべし」と云ひて其名を立て、次の本門の題目南無妙法蓮華經に濫せざらしむ。故に報恩鈔の「本門教主釋尊」は壽量開顯の本地無作三身体の本佛釋尊にして、本尊鈔の塔中の妙法蓮華經に同じ、名を立てるには久成釋尊といひ、体を顯すには南無妙法蓮華經といふ。而して兩鈔共に用の釋迦多寶を脇士となす。体用並べ安じたる本佛釋尊本尊であつて、決して日蓮本佛の義ではない。若し報恩鈔の「日蓮が慈悲廣大_云」の文を以て其義ありと言はんか、是れ末法に於ける法華の弘通は、大慈悲大忍辱力成就の善

薩に非ずんば能はず、今御自身自ら其任に膺り、開目鈔に謂ゆる「日蓮が智解は天台傳教には千萬分が一分も及ぶ事なければども、難を忍び慈悲勝れたることはをそれをも懐きぬべし」、「我れ日本の柱と爲らん」と同致にして、佛讖符合の法華經の行者・遣使還告の本化本僧としての資格に於てで、決して自ら本佛を任じ給ふた意ではない。

(8) 此外、顯佛未來記五七の「佛の如き聖人」、探時鈔二九の「智人一人」、同二三五「日蓮は閻浮第一の者」、下山鈔二五七の「教主釋尊よりも大事なる行者」並に餘書に於ける此種類文悉く其前後を拜する時、何れも報恩・本尊・開目鈔等の如く「遣使還告」・末法の導師・本僧たる御資格に於て、ある。

(9) 次に諸法實相鈔及本尊問答鈔について師は實相鈔の

されば法界のすがた妙法蓮華經の五字にかはることなし、釋迦多寶の二佛といふも妙法五字より用(垂)の利益を施し給ふ時、事相に二佛と顯れて寶塔の中にうなづき合ひ給ふ。如レ是等の法門は日蓮を除いて一人もあるべからず乃至是れ即ち本門の事の一念三千の法門なるが故也。されば釋迦多寶の二佛といふも用の佛也、妙法蓮華經こそ本佛にて御座候へ。

の御文について、「南無妙法蓮華經は本佛(師によれば日蓮本佛の内證)釋迦多寶は迹佛なること明了、何處に釋迦を本佛と稱する筋やある」と云云。然るにこれ亦其南無妙法蓮華經本佛は吾祖と拜すべきに非ずして壽量本佛釋尊と解すべきこと上來屢々辯じたる所であるが、元來本鈔は吾祖が迹門方便品の諸法實相一念三千を、十章鈔に謂ゆる「一念三千の出處は迹門の略開三の十如實相なれども、義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文也。但眞實の依文判義は本門に限るべし」(第六七五)といふ「文在迹門義在本門」の立場より、更に進んで壽量文底の妙旨・佛界緣起の事の一念三千義を以て、迹門の諸法實相・理の一念三千義を開迹顯本して、本と迹門の台徒たりし對告衆最蓮房に

會_レ理_ヲ歸_レ事_ニ・運_レ觀_ヲ入_レ信_ニの妙旨を教示せられたるもので、題號に謂ふ所の諸法とは十界三千の萬法の總稱、實相とは迹門當分にては無相法性の一理に約して法々互具融攝して皆妙なりとの法性緣起理實相義を、今先づ本門の義に近き荊溪の釋を借り來つて、任運に開して此本門の佛界緣起事實相義を顯はし「法界の姿妙法蓮華經の五字にかはることなし、釋釋多寶の二佛といふも妙法等の五字より用の利益を施し給ふ」云云と、即ち彼「實相理」を直に「妙法蓮華經」とも「法体の妙法蓮華經」とも稱し、其用を示すに「二佛」を以てし、又「妙法蓮華經こそ本佛にては御座候へ、經に云く、如來祕密神通之力は是也、如來祕密は体の三身にして本佛也、神通之力は用の三身にして迹佛ぞかし。凡夫は体の三身にして本佛ぞかし、佛は用の三身にして迹佛也、乃地獄は地獄の姿を見せたるが實の相也」云云と、彼迹門天台の理性融通を、直に此本門の事常住・即相顯性・當体全是・當位即妙の事の一念三千の妙旨に會理歸事せられしものである。されば師が所引の「妙法蓮華經」は如來祕密の三身本佛、「二佛」は神通之力の用の三身迹佛にして、法界事相の姿が即實相也妙法にかはる事なし、壽量文底觀心の實義より見れば、今日我等凡夫も体の三身本佛なるぞとの、本門佛界緣起の事實相の妙体を「妙法蓮華經」といひ、「かくの如き等の法門は、日蓮を除きては一人もあるべからず」と正像未弘今始弘之の旨を自歎せられたるもので、決して自ら本佛本尊を言はれたものではない、況や神本佛迹をや。故に此鈔亦久遠本佛の内證たる壽量文底事實相の十界三千の當体本佛本尊義である。

次に本尊問答鈔は、佐後の作と雖も、對告衆たる淨顯等清澄寺の台密徒であり、機未だ熟せざる所より、且く天台附順法勝佛劣の權實判に立據せる本尊義として法華經の題目を本尊とすべき旨を示されたるものにして、蓋し宗祖の本意未盡の書たり。故に其釋義専ら天台に依り「是れ私の義に非ず、上に出す經文並に天台大師の御釋也」といひ、又經文を引くと雖も専ら附文法勝佛劣の一意に據れり。故に其「法華經の題目本尊義」は、意暗に久成釋尊を示して

法表佛裏なり。日蓮本佛本尊の義、文義意俱に存しなす。

(10) 最後に師が神本佛迹論であるが、此に就ては、吾師既に祖書に依つて難じ、師の答辯も充分なる會通を成ぜざるも、抑々但だ師が「神本佛迹なることは大曼荼羅が第一の現證也」(七月)、又「我等の宗門にあつては、天八二神は生身妙覺の極位に居して衆生を利益し給ふと信じ」(五月)、或は「現見の事實について即斷するに釋迦は垂迹」云云(六月)、又「本体の妙法を世法的・王法的・實踐的に日本國に具現し給へるは二神にして、之を宗教的・哲學的・信仰的に法界を利益し給へる佛者は日蓮聖祖なれば、之が大曼荼羅の中心となり居る也」(七月)等の説は、祖書に全く無き貴宗相傳の立義に過ぎず。敢て問ふ、「二神が生身妙覺の極位に居して衆を利す」といはど、二神の本地は妙覺の極佛にして明に佛本神迹に非ずや。又大曼荼羅の諸尊悉く久成本佛釋尊の本体(道中)迹用(傍證)ならざるなく、普門示現の利益ならざるなし、何ぞ持に二神に限つて「極位に居して」といふや、二神は吾學師が日眼女書によつて壽量品の本佛が或説他身の或現天皇身にして本佛は体、國神は用、即ち佛本神迹なること斷乎動かすべからず。師が評破は一も當らず。又師「本体の妙法を世法的王法的に」云云一連の文について一言せんに、若し然らば聖の大曼荼羅圖式中に、二神を必ずしも中央に書し給はざるものあるは如何。其等の本尊は未究竟やと言はんか、何を根據として證成するや。又師は「大曼荼羅の十界は勸請ではない、南無妙法蓮華經には十界を具足して居る所以を、南無妙法蓮華經は圓具の平等空諦、十界は差別の假諦、此二諦に即して圓融の中諦となつて顯れ、三諦圓融の實證躍動し來るなり。而して三諦圓融の大曼荼羅は、もと久遠元初の本佛日蓮の一身に歸するを以て日蓮判と遊ばし」(今日、此は顯彰(主の責任表示也)たるにして、十界勸請など稱して十界を祭り込んであると言ふが如きは、大聖違背の誘徒也」云云(四月號)と云ふかと思へば直次に「尤も十界列座の中にある釋迦多寶等」(龍樹天台傳教等の正像の人師は孰れも南無してあるが故

に勸請の意味が含まれてゐる所に、宗教的意義存するも、地獄餓鬼畜生等のものには南無せざる故斷じて勸請なぞ思ふては大謗法となる」と部分的に勸請を許して上と齟齬するは如何。又聖御自筆の大曼荼羅に、十界に「南無」を冠した總歸命の本尊を何と會通するや。よも聖祖を謗法者とは言はれまじ。

又「南無」のあるは勸請の意、これ無きは勸請の意に非ずと言はど、師が今の連文に「天八二尊はもと生身妙覺自行の利益を垂れ給ふを以て別個の意味に於てお祭り申上げる」の説をも綜合して、聖の御圖式にも、二尊に「南無」を冠しないものが多い。此を何と會通するや。

師の説それ自体に、前後矛盾齟齬是の如し。更に前に「勸請など、言つて祭り込むといふは大謗法也」と言へると今「お祭り申上げる」との矛盾如何。若しそれ十界の代表以下は謂ゆる「別個の意味に於て勸請する」と言はど上に「大曼荼羅はもと久遠元初の本佛日蓮の一身に歸す」といひ、「本佛日蓮自内證の當体御魂にしてそのまゝ文字に顯はせるもの」といふに照して、久遠元初本因妙の自受用本佛日蓮の御内證に既に龍樹・天親・天台・傳教等の法華傳弘の諸師及天祖等を別個の意味に勸請する意匠存したりと言ふべきや如何。存せりと言はど其證如何。又師が今の連文に、二神勸請について、興尊の書によつて「廣布の曉には(一)大聖人の御影堂、(二)本化垂迹の天照皇太神宮、(三)法華本門根源、三堂一時に造營すべきやと書殘さる」と云云。今之を見るに、興尊は本化垂迹の天照太神と云ふ。其本化を師の謂ゆる久遠元初自受用本佛とせば、明に興尊は佛本神迹論者也、今派祖に違して神本佛迹を言ふは如何。

要するに神本佛迹の如きは、本と台密が盛んに愚説せる所にして、吾學師の舊著『偽日蓮義』に具に出して、故柴山師の「〇〇本佛本尊」の魔説の馬脚を暴露されて居る。是の如きは固より俱に純正宗義を語るべきでない。

四、

上來且く『世界の日蓮』既刊分(自昭和十二年三月號至同八月號)を讀んで愚見を披陳、謹んで師の合理的學問的なる高教を仰ぐ。淺學非才殊に不文、或は禮を失したるものあらん、請ふ慈愍寛恕、幸に道の爲めに高教に吝なること莫れ。和尙。最後に特に問ふ。言ふ所の宗祖本佛本尊義の貴宗に於ける本典は何書乎、異して門祖興尊の説耶、將た後人(寛師)の説耶、敢て詳説明示を乞ふ。

巳 上

純粹宗學の理念とその展開

室 住 一 妙

純粹宗學は唯一の理念をもつ、といふよりは寧ろ、その唯一の理念なるものが純粹宗學を成立せしめたのである。否、現に成立はしてゐないかも知れないが成立せしむべきものである。即ち純粹宗學が現在には成立してゐなければ、ない程、却て一層強くその創生を要請するものが即ち理念なのである。

純粹宗學の理念こそが、實は純粹宗學そのものとして誕生し、發育し、活躍するものである。現今切實にその誕生否活躍を要望されてゐなければならぬ筈であるが、果して如何？ 深く省みる必要がある。

純粹宗學とは、徒らな抽象的理論宗學ではない。勿論、布教とか、寺門經營とかの策略を授けるものではない。が、そういうふ生きた活動運營の依つて基づく所以を確め、實現し向ふべき目的を明め、更に態度を正し、方策を練る指導原理たるべきものであるとせば、具体的宗學の切實に要求せざるを得ぬものではなからうか。

純粹とは、まじりつ氣のないことでさりとてかの無味乾燥な蒸溜水ではない。母乳のやうな、醍醐味、天の甘露ともいふべき滋養成分の精（エキス）のやうなものと見られる。宗學のエキスは、宗祖の純粹なる精神である。それをば嚴密な方法で明確に、公正な態度で把握、表現していく所の學術であるといへようか。

そういうことは、今更喋々を要せぬことであると、思ふ者があるかも知れないが、喋々を要せぬならば此上なく結構である。と申し度いが、それこそ現實的宗門意識の自覺を欠いてゐる所以、即ちそこにこそ一層眞劍に純粹宗學的理念を究明する必要があるのである。

二

現に山積せられてゐる宗門の諸問題、或は又方途を失うてゐる現宗學界の實狀、非常時的國家、危機暗雲に閉ざされたる世界を何を以て打開していくべきであるか。宗徒の覺悟は果していかに、學徒の使命はいかに。その言ふ所は壯にして大、行ふところは卑にして微、考ふる所さへも夢の如く幻の如くであるとしたら百年河清をまつことゝなる。宗祖の純粹な精神によつてのみ、一切の諸問題、危局、暗雲を解決し開拓し、一掃していくことが出来る。さう信ずる所以の原理、理想的な信念をば、純粹宗學の理念であるとする。それ故、理念は觀念的存在ではない、又理想的な概念でもない、とらはれたる我執の信念でもない。それは理想意志的にはたらく信念である。

而して、純粹宗學の理念は、信念ではあるにしても前述の如く、學術的にはたらく信念である。出來上つた學術体系の一角に陣どれる中心的物体ではなく、學術体系の全体そのものゝ中樞にまた全体の枝末にまで充溢しつゝはたらく精神である。未だ体系を作さぬとしても、そのときそのまゝにはたらいてゐる精神である。實に、已むに已まざるは、たらしきそのものであるといふことができるであらう。

純粹宗學の理念とは、現在に於て實在する。生きてゐる、はたらいてゐる、いかやうにといふならば、純粹宗學的觀念体系としては未完成である、生成途上であらう。生成途上にあるといつても未完成であるといつても、それは必

すしも半端もの、幼稚なものとして看過してはならぬ。むしろそういふ現在に於てこそ一層慎重に究明し、見まもるべき實態であるともいへよう。なぜならば、純粹宗學の理念そのものは、決して純粹宗學の概念建築をめざしてゐるのではない。その生成過程に於てはたらく所のはたらしきそのものに意味があり、價值があるのであるから、従つてその展開こそ、所謂純粹宗學の理念そのものゝ表現であり、純粹宗學の内容であるともいふことが出来る。

三

純粹宗學の理念は内外二つの方面に展開する。外向するとは、中心主幹から發して、外延的に擴大していく所のはたらきである。なほそのうちに於ても、量的に布教宣傳或は教育等、それらに關連する所の施設・經營・研究等之に屬する。それから質的には、整理・調査などより淨化・改革乃至特殊な創造に及ぶ等、それらに關連する施設・經營・研究等。

次に内向するとは、中心主幹に發しつゝ、自体の一層内奥深き中核に向ふ所の、内包的に深化し、充實していく所のはたらきである。之は外向的のはたらきに相關しつゝ、中核原理に嚴密な有機的・精神的關聯を保つものである。例へば、布教宣傳の一項目について見ても、それが時代・社會の變遷・異質なるとき、中心主幹に發した來の教權そのまゝか、又はその應用で事足る場合と、更にそれでは事及ばずして、或る程度の變革又は全く新たな創造的様態をもたらさねばならぬときは、一層嚴重に切實に、所謂、純粹宗學の内向的理念を要求する。而して、新時代社會に即應する所の布教宣傳上の應用變革、創造的諸様態をば、指導する所の原理或は批判する所の原理を發揮せしむるものが即ちその内向的展開なのである。

以上の如く理念の展開は、譬へば有機的生理器官における、かの動脈と靜脈との如くであらう。一は發動的に血液を送輸し一は之を收斂して淨化する。唯一の理念は、この二方向のはたらしきをなす心臓である。健全なる心臓にして始めてこの循環を活潑ならしめ、潑刺たる動脈靜脈の循環こそ中樞の心臓を強健ならしむることいふまでもない。

四

純粹宗學の理念は現在の超非常時局に對していかに認識し行動していくべきであらうか。例へば、こゝに先年來宗門的に重要な問題となつたものについて、いさゝか考究をすゝめて見よう。かの遺文録削訂といふことが問題化したのも、多少は事を好むもの、或は惡意を以て望むもの、又は職務上處置せんとする爲もあらう。その間に處する宗當局の苦心も買はねばならぬ。然し乍ら今日かういふ問題に遭遇するといふこと自体、我々宗門人に若干の責務がかゝつてゐると思ふ。又近く、曼荼羅諸尊勸請中における不敬問題といふのも、それに關連して今現に學界に論題化してゐるが、之は事甚だ樞要で、而もそれが全くの門外の人々、否或は多少とも好事的といふより攻撃の具としようとする人々に對する進退であり、釋明であるとき、前にも劣らぬ厄介な事柄に違ひない。即ち眞實の義を吐露しても、難信難解と申されてゐる宗の秘傳を一朝一夕に萬人に納得させ得ることもできず、さりとて誠意を欠いてもならぬ。その事情と對手を充分認識した上に、誠意を盡して應答すべきである。曲學阿世していくことは以ての外の態度であるが、さり乍ら只の一本棒のやうに、なんの曲もなく藝もない抜ひでは、事態を圓滑に進めるに役立つ。そういう奥秘の宗義はもつと慎重に扱ふために充分の注意をし度いと思ふ。上來のこの問題について我々宗門人の深く反省せねばならぬ点は、從來その扱ひが余り放漫になされた隙を衝かれたものではなからうか。又かうした疑義を投ぜられ、

辨明し釋明して進退を伺ふことは、宗門自体の從來の國民教化における怠漫を意味することにもなり、之を深く反省することなくして、一時逃れの辨明で事すんだとしても、次の日次の時代には更に深刻な問題となつて現れ來るであらう。我々はそういふ秋に善處するために、純粹宗學の理念に本く覺悟と準備とを以て、國民大衆層に眞實の宗門布教を徹底させていかねばならぬと考へるものである。また最近身延山に創設された宗立信行道場なるものも、趣旨として結構なことである。即ちこれは從來の學校教育の弊を補ひ、信行の磨きをかける所謂僧風教育の試みである。今のところ全く一の試みであつて將來はなほ、制度としても完整せしめ内容も充實せしめ、規模も大ならしめて、そこに眞の宗門的人材、肩書のためでなく、黙々と椽の下の方持ちともなり得る實力的法器を作るべく致さねばならぬと考へる。それらに關連して宗門寺院（都會・農村寺院）宗門財政等の問題もあらうが、之も前述の眞の法器に依つて、必ず自づと解決せられるであらう。思ふに今日ほど吾が日本は恵まれてゐる時代はない。それだけに超非常時である。一步あやまればその前途は累卵の危機を喚ぶことである。日露戦争における日本海々戦も皇國の興廢の機点であつたが、今日の時局は幾年にもわたる長期に於て、而もその對手は世界的な複雑錯綜した關係と戦局の進轉と吾國內情勢特に國民精神の動向消長に關係あることは、かの海戦のそれとは比べものにならぬ重大事であると思ふ。因つて政府當局も國民精神總動員運動を捲き起したのである。我々宗門人は宜しくこの時局、この運動をば深く認識して邁進し終局の美を濟すやうに努めねばならぬ。のみならず、實際の必要は一面、國內のそれと同時に對外的に進出飛躍といふ、その事である。即ち具体的には、滿洲の開教・布教網の完成であり、次に對支文化工作等である。此等は何れも我日本の生命線を確保し、更に進んで皇國日本のいよ／＼神聖なる使命遂行の機會なのであることはいふまでもないであらうが、滿洲並に支那本部における赤露の脅威は實に、武力よりはその宣傳力である。來るべき吾が國戰

後の疲憊混亂に乗じてはたらしきかけるであらうかの惡魔の如き思想である。之に對抗し排撃していくことが、我帝國の生命線確保の最も欠くべからざる要意である。それにはかの我國內外民衆の實際生活の安定とともに、公明正大にして圓融活達なる宗教信念の培養が肝心である。かうした物心兩面一躰の健全強化こそ、眞の金城鐵壁ではあるまいか。對支文化工作といふも、その所詮・要契は實にこゝに在るのである。過去の孔子教の宣傳とか、漢文字・支那語の學習とか、日本文化の藝術や知識の普及などは、その末梢的工作であつて、眞の基礎工作は、切實な實際生活と宗教信念の發揮そのものである。之を忽せにする時、支那全土の赤化が永く禍根とならう。又滿洲國も將來は日本と疎隔を來すであらう。そして、日支滿ともに分裂鬭争をくり返して、衰亡の一途を急ぐやうなこゝならぬとは、必ずしも保證し難いのである。是れ實に我々國民の責任である。之に反して、日滿支一体協和していくとき、こゝに世界は燦然たる眞文明の光輝に浴することができらう。畏くも 神武聖帝の勅語に「八紘一宇光宅天下」と仰せられた、その天業が恢弘されるのである。是れ實に我々皇民の光榮ある使命ではないか。別して宗門人、末法萬年のため世界人類のために、眞實の佛教即ち日本の佛法をば佛陀の豫言に應じて唱導せられたる宗祖の門下、日本人中の日本人としての責務であり、唯一の使命である。

光明にたゞやく世界の絶對平和、常寂光土の建設を期して「一閻浮提第一の本尊此國に建て」給うた宗祖の教團、全宗門、今こそ擧つて奮起すべき秋である。

眞實の佛法、その佛法の西漸に奮起すべき嚴命はすでに降つてゐる。

「天竺國をば月氏國と申すは佛の出現し給ふべき名なり。扶桑國をば日本國と申す、豈に聖人出で給はざらむ。月は西より東に向へり。月氏の佛法の東へ流るべき相なり。日は東より西へ入る。日本の佛法の月氏へかへるべき瑞

相なり。月は光あきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり。五五百歳の長き闇を照らすべき瑞相也。佛は法華經謗法の者を治し給はず。在世には無き故に。末法には一乘の強敵充滿すべし。不輕菩薩の利益此れなり。各々我弟子等はげませ給へ、はげませ給へ」

然らば日蓮門下に果していかなる用意があるか。その本來の宗教信念發揮の實力、乃至構へは如何？

以上は純粹宗學の理念が、差し當つての社會・宗門事象を通じて、その外向的展開を考究したものである。次に之が内向的展開を見よう。

五

そも、宗門の組織的要素の實體は、信徒としての個人と家庭、僧侶と寺院、及び信徒・僧侶を統括する宗團なるものがあることは、いふまでもないが、今日前古未曾有の超非常時局に際して、内外一新、宗祖の天命を遂行するには有機的精神的に完全なる統制組織を整へねばならぬ。之を具体的に云へば、信徒は個人としても家人としても、日蓮宗門をせをうもの即ち日蓮大聖人の御門下として、その本分を盡すことである。又然るべく能化者即ち僧侶が指導教養すべきである。僧侶はそれが本務である以上、自ら先じて一般信徒に範を垂れ、個人としても、家人としても社會人としても、さすが立正安國宗の指導階級であると信徒には勿論社會にも國家にも認めしむることである。かくして、信徒の個人も家も、他宗他教の賞讃敬慕的となり、個人も寺も宗團も、無爲にして化すといふ、實力主義の布教・實徳主義の宣傳となつていくとき、全く一瞬にして立正安國が實現できよう。それは筆舌をもつてのみする所の、ともすればインテキ宣傳より、實物・實力・實徳・實用を以てする膨脹擴大は何ものでも抑へ、妨ぐることがで

きないのである。四海歸妙といふも全く一舉動である。

然らばその國民的模範の人及び家とはいかなる者ぞ。又眞の宗教、正しき宗教人、絶対に善き宗團とはいかなる者ぞ。我々宗門人の信する所は、此れは確にかくであると同實に示さねばならぬ以上、又實物・實力・實徳・實用を以て現はさねばならぬ以上、この根本基準即ち信念理想を明確に活きくと生かさねばならぬ。學的にいへば生ける信念即ち純粹宗學の理念の發動展開に俟たねばならぬ所以である。かくて益々理念は内向的に求心向に進んだ結果その中核をば宗祖に求めるのである。而もその求め方は、又特別な意味で求める。

完全圓滿なる人・家・宗團とは佛陀の謂である。今純粹宗學の理念は、その唱導の先達であり中心である宗祖に、その實證を求めようとする。即ち宗祖をば歴史的人格と見ずに、現實的佛格と見ようとする。換言すれば、即身成佛せられたる者として見る。即身成佛の佛格の現證をば宗祖にのみ究明せんとすることこそ、純粹宗學の理念の展開的結論である。さし迫つた現實の全面を徹うて、外向的發展を論明し、さらに翻つてその現實に即しつゝ、内向的に展開してその中核を把握するのである。

六

扱て、如上の結論に本き、純粹宗學的理念は更に、教學的に課題して次の研鑽を要求することとなる。

すなはち「即身成佛論」なるもの之である。勿論、古來この義目は非常に重要視され、古哲先匠も多大の業績が残され、汗牛充棟も嘗ならざる事であらうが、時勢は切迫してゐる。それらの文献學的乃至解釋學的研究は關いて、達意的に取要的に研鑽の歩武を進めねばならぬと思ふ。そこで、宗祖自体の範圍に限つて、宗祖は之について、いかに

考へいかに抜ひ、いかに實踐され、いかに体得され、いかに教導され、又その教への真意はいかに、證據はいかに、文證・現證・道理證の上からいかに把握されたか、此等について、吾人はいかに考へ、いかに信じ、いかに實踐していくべきか。而も、それらについて現代生活上よりの矛盾、問題を究明して、更に現下急要の時局に處する用意を充備せねばならぬことである。この研鑽に本く信念とその鍛練こそが、現代的に發動する所の教權の源泉なのである。宗門の生命的源泉の涌くところ眞の大日蓮の呱々の聲は近いであらう。

然らば右の研鑽には、いかなる態度、方法、資料が要るか。第一態度は公明正大なること、即ちあくまで嚴密に自由である。第二に方法には、醇化せられた意味の精神科學的方法をとる。之は從來のデールタイ學派のそれを佛教的世界觀から止揚したともいふべき立場に於て、販納的方法以外に演繹的方法が重要な役割を果すものである。第三に資料としては、茲に新たに集めねばならぬものもある。

一、「宗祖の傳記」今までののは多く興味本位のものであつたが、之は考證學的に確實な資料によるもので、さし當り御傳資料集を編纂すべきである。同時に年譜である。これはすでに幕末の學者健立日諦玄得日香兩師の編輯が先驅的にある。それを更に補訂完成せしむること。なほ御傳資料集には、御門下諸檀越方の史料も勿論編すべきであるがその上これらの背景をなす所の一般史實特に政治、宗教、社會、經濟、文化の諸部門にそれ／＼の定説を網羅して編輯しをくことは、宗門人にとつて知識的に何よりの必要な強みであらう。即ち研究的にも或は實際運用の上にも當然必要なものである。

二、「御遺文の編年的全集定本」現在流行されてゐるものを、更に研究完整し、就中眞偽未決のものや、且く先づ別輯をいいて、嚴撰主義で、定本を作ることである。然し一般用として普及せしむるものはそれ／＼の索引を附し

解説をつけ、読みよく、廉價に、手軽く、堅牢に愛寵されるやうな装幀で刊行すべきであらうが、さきの宗定の定本は宜しく永久保存に堪え、莊重にすべきである。現在刊行の所謂「縮刷遺文」には登載されない全く未刊行の御遺文断片も研究に従つて、その適當系年に組み入れ、ともかくいかなる断簡零墨も洩らすことなく、嚴確な定本が、眞の研究用に當然必要なものである。

三、「御眞筆本尊全集」これも近年に至り漸く、私人によつて二三の刊行を見たが、それも全く小部分なもので、全數の豫想の四・五分の一を出でないであらうと思ふ。從來この点についてさほどの重要性を認めなかつたといふ、一の雄辯なる證左ともなつて甚だ歎かましい事である。その因果がむくへ來り、年來の諸問題が惹起されたこと、内外・上下に對し畏多き極みではないか。現に天照八幡勸請の意義の究明も、やはりこの基調に關係あることであらう然し今は、さうした事柄はともかくとして、御本尊特に宗祖御眞筆の本尊の全集格護は、そのまゝ、法命相續の樞要なる事行なのである。而も、宗祖の内證生命をば最も雄辯に具體的に直瀉せられたる、本地の風光に至つては、宇内萬邦絶對の尊嚴的靈寶である。かの御傳記の確實豊富な研究も、かの御遺文全集の完璧も、この御本尊全集によつて点眼し奉るべき三位一躰のものである。とりあへず、宗門の事業として、その所在、内容編年目錄でも編成すべきである。幸ひ、之が寫眞集を費用をいとせず、永久保存といふ目的のもとに進めてゐる千葉市の片岡氏があるが、之も一個人にまかせをかず、好意的援助、指導、積極的贊助を以て、その完成を宗門としても期すべきである。即ち全門下の責務であるから。

なほ直接研究上の要求でもないが、純粹宗學的理念の展開として、ついでに一言し度いのは、以上の根本教權的法寶を永久に護持し奉るべき設備即ち寶藏の建設である。宗門事業として、最も安全な田緒ある靈地を選び、數ヶ所に

建設するべきこと。かの中山の聖教殿はその一試設であるが、宗門人は奮つてその神聖な意義を体して、その充實、格護の制度をなほ一層練る必要がある。いつ何時、空襲爆破に曝されるか分らぬ時、殊にその必要を痛感する。

省れば、事は末法萬年の未來のために、世界を寂光土たらしむる聖業のために選ばれたる光榮ある個人であり、宗團ではないか。小さいその日暮らしの觀念や情實を洗ひ流して、洋々赫々たる宗祖の大慈願海に悠游しようではないか。

根本資料としては、先づ大体以上とすれば、次に之が具体的に研究の機關について考究し度い。

七

研究の機關といへば、たしかに大學がある。研究院もある。然しそれらはすでに現實として、純粹宗學的理念の展開に參與してゐないと思はれるのは研究者の動機に於てそうである。公明正大であるべきだ。互に猫の鼠をねらふやうな卑しい態度があつてはならぬ。學問があつてはならぬ。情實があつてはならぬ。功名や地位や利欲の爲めには、いかなる業績すらも、宗祖の法命を冒し奉るとさへ畏れて自ら慎み度いと思ふ。かの綱要導師を中心に五人の盟約などは、實にそのよき模範で、教へらるべき意味が多いのである。以上は人の問題であるが、設備としては、さきの資料を蒐めた圖書館、場所としては勿論、清閑な健康地、さらにそこには、信行中心に則る道場が儼存されてゐること。發表機關には即ち討論、非公開の文書（適宜に公刊するは慎重になすべきである）等を有する。そして研究委員は互に敬重愛護し協同研鑽して少しも個人的な嫉妬、排擠なく、相はげまし、相たすけ、切磋琢磨の益友、異体同心同信同行の善知識の團體を形成すること。

同時にまた右の超越的アカデミーな組織における欠陥をも充分認めて、生ける現實世界との交通理解を顧慮すべきは勿論のことである。これらはユートピアとしての談柄でなくて、さし迫つた時局への嚴正な指導原理即ち、理念の外向的一大展開に必須の機關であると考へる。が然し、現實はまだ今しばらく、之をユートピアとして看過して流れいくことであらう。

八

私は今、この稿を結ぶに當つて、讀者に附言してをき度いことは、以上の叙述でも明かであるやうに、純粹宗學の理念は何時、いかなる處でも、徒らな個人的發見發明を快しとするものを嫌ふことである。それはいついかなる場合でも、現實的諸問題の些少なる裁決に於ても、必ず宗祖の純粹なる精神發動に依らねばならぬから。従つて名を競ひ利の爲にするやうなのは、まことに畏れ多いことであらう。純粹宗學は、それ故に私有物であつてはならぬ。また私生物でもない筈である。この稿は實に、文辭章段は稚拙であらうが、その所説の義理に於ては、私のものとして徒らに卑下せず、却て讀者諸賢のもの、公のものとして頂かねばならぬと信ずる。然し誤謬があつては一大事である、大いに啓蒙し、叱正して頂き度い。若し所論正しとせば、直ちに、この結論より出發して、更に進んで内外に向ふ純粹宗學の理念の展開を期して頂き度いのである。即ち私は、衷心から、如上の意味の即身成佛論をば、私自ら稿する以上の價值あるものを、一般諸賢に期待して已まないものである。つまり再び拙稿の出づる餘地なきやうに待望するのである。但し参考までに餘白の恵まれた節には、始めて拙稿を披瀝して、更に啓蒙叱正を蒙り度いと願ふのみである。

— 昭和十二年十月三日稿 —

御遺文にあらわれたる下種思想

(前號續)

武 田 海 正

3、性 乘 二 種

性種とは人々に本來具つてゐる佛性であり、乗種とは覺者が人類の心田へ下種する佛種であるといつてすましておくならば何も問題はない。しかるに今は通佛教的佛種問題をのり越えた久遠の本覺種を性乗二種の尺度ではかつてみようとするのでからむづかしい。

本覺種を性種であるとするれば性種とはあらゆる生物が本來具有してゐた佛性といふことになるから、別に本覺者によつて下種してもらわんでもよろしい。もし單なる乗種とするならば久遠の下種も大通下種もその他の下種もその價値に於て皆等しいものになるであらうから久遠下種だけを特に稱揚する必要はない。

常識的に考へれば佛性は衆生本具のものであり、佛種は佛のものであつたにちがひないが、本覺種の場合はずでに無始久遠を論ずるのであるから体の佛種と体の佛性とは同じものであるとみななければならぬ。体の佛種と体の佛性とは同じものであるといへば久遠下種以前には衆生に佛性といふものがなかつたのであらうか。そういふ疑問は本覺種の下種がすでに無始久遠に行はれたものであるといふ事を忘れて久遠以前にも何かあつたかの如く思惟するから起るのであつて、事實久遠以前といふものはないのである。佛種と佛性とは同一であるといひ得るのはたゞ久遠下種だけである。久遠下種からみれば衆生本具の佛性といつても覺種が人々の心田に殖えてあるといふ事にすぎないが、久

遠下種以外の下種からみれば衆生本具の佛性とは衆生に無始以來恒存してゐた佛性となり、それを開覺するのが目的だといふ事になる。

天台一家ではこの久遠下種の覺種を性種と解釋してゐる。それは無理もない。もと／＼天台の三益論は今番迹門脱益の衆生實益論に立脚し、今番脱益の化源を三千久遠の大通下種と定め、その時の佛種だけを乘種と解し、その他の下種の佛種を悉く性種としてゐるのであるから。

其中衆生悉是吾子——性德佛子非善非惡——十六王子覆講法華時間法者——即成了因性 文記會二七ノ一

これに對して當家では久遠下種の本因佛種を性乘不二の本覺種と解するのである。こゝで性乘不二といふのはたと性乘並存といふ意味だけではない。性種に即する乘種、本覺に即する始覺的な佛種といふ事である。性種の大地に深く根を下ろし高く乘種の空中に花をつけ實を結ぶ具体的な本覺種を指すのである。本覺種は單なる非因非果の性種でもないし、又單なる因果の乘種でもない。その種体は因果を越えた本覺に立脚してゐながら、因果的に現世へ實現して來る極めて宗教的なものである。

もと／＼性乘不二ならば性乗何れかといふ疑問は起らぬ筈なのに、なぜか或は性種にみえ、或は乘種にみえるのであらう。それはたと觀点の相違、立場の相違によるのであつて種そのものゝ相違によるのではない。下種する覺者からみれば諸他の佛種は勿論久遠の本覺種でも乘種である。問題は下種された幾類、下種された人々の方にある。下種された人が壽量品の不失心者であり日向記の孝子であり開目抄の信心了因の子であるならば久遠下種は乘種であつたと思ひませう。下種された人が久遠の失心者であり不孝の子であるならば性種であつたといふにちがひない。迷つてゐる人は久遠下種などかつて被つた事がないと思つてゐるから、本當は自分の心田に覺種が殖えられてあつてもそれ

を信じない。彼自身は信じないけれども第三者からみればちやんと佛種が心田の中に殖えつけられてゐる。

かういふ場合は久遠下種は性種の價値しかあらわれてゐないから性種であるといはれるのである。

しかるにこの迷つてゐる人に向つて君の心田にはすでに覺種が殖えられてゐるのだと告げる人があれば、その聲をきいてもしその人があゝそうだつたかといつて自分の心田に久遠以來殖えられてゐた覺種に氣がつくならばその時は性種に即する乗種の開覺をみるから本覺に即する始覺の覺りを開くことができるのである。酒に酔つてゐる友は衣に寶珠をつけてゐながら貧乏してゐた。しかし酔がさめて衣裏の寶珠をみつけた時は百萬長者になつた。久遠の覺種に氣づかぬうちは性種性得の寶珠であつたのが氣がつくと同時に性来不二の修得の寶珠となるのである。

御義上に云く

龍女が手に持てる時は性得の寶珠なり。佛受け取り玉ふ時は修得の寶珠なり。中にあるは修性不二なり。七九

四、久遠下種

1、經說

久遠下種の妙相は法華經の如來壽量品にとかれてゐる。それによると五百億塵点の久遠元初本覺者自ら全人類へ一大秘法の本覺種を下種されたのである。本覺者の出世の本懷は一切衆生皆成佛道の大理想を實現し全人類をして我と異る事なからしめんが爲であつた。

衆生救濟の根本誓願たる每自悲願の不行は藥師の十二願・普賢の十願・彌陀の四十八願・悲花經の釋迦の五百大願法華經の能爲救護の大願等あらゆる三世十方諸佛の本願別願を悉く綜合統一しそれらに超越せる總本願である。

この本覺者の大願を象徴的に人間のことばをもつて表現したのが壽量品の良醫譚である。

たとへばこゝに一人の良醫がゐる。この良醫は智慧があつて非常に情深い人であつた。それでよく藥の良否を見分けたり、上手に藥を調合したりした。

それだからどんな難病でも治せないといふ事はなかつた。その良醫には百人の子息があつた。或る時この父は他村へ診療に行つた。そのるす中に子供達は藥室へ入つて毒藥をのんだ。やがて毒が全身にまわり悶亂して大地の上をころがつて苦み初めた。父が我家へ歸つてみるとこの有様である。毒をのんだ子供の中には毒の爲にすつかり本心を失つてゐる者もある。まだ本心を失はないでゐる者もある。子供等は父の姿をみてたいへん歡び

今私共は毒といふことを知らないで誤つて毒をのんで苦しんでゐるのです。どうか病氣をなをして、もつと壽命を與へて下さい。

とお願ひする。父は子供等の苦しんでゐるのをみて色の美しい香のよい味もよい藥草を集めて調合し、子供達に向つて

この良藥は色も香も味もよい。さあおのみ。毒の病などすぐなをるよ。

といつて藥をすゝめる。子供らの中で本心を失はなかつた者はその藥が色香味がよいのをみてすぐにのんだから全快してしまつた。しかるに本心を失つた者は父が歸つて來たのをみて、歡んで治療を求めたのだけれどもせつかく父が藥を與へるとそれをのうともしない。それはあまり深く毒に犯されてゐて色香味ともによい藥をよい藥と信ずることができなかつたからである。父はこれを見て

彼等は毒にあてられて心がみな顛倒してゐる。私をみて歡んで治療を求めながらかような大良藥を與へるとのもう

ともしない。私はある方便を用ひてもこの薬をのませてやらねばならぬ。と考へ、子供等

私はこの通り老ぼれてしまつたから死ぬのも遠くはあるまい。この薬はこゝへのかしておくから自由にとつてのみ。のめばきつと癒るぞ。

といつて又他村へ行つてしまつた。そこで使を遣はして

お前等のお父様は死んでしまつたよ。

と告げさせる。子供等は父が死んでしまつたといふ事をきゝ悲歎にくれ

お父様がおはしたならば私共を一層可愛がつて下さつたであらう。今やお父様は私共をすてゝ遠い處で亡くなつてしまつた。私共は依り所のないあわれな孤兒となつたのである。

と思つた。あまり深く悲しんだ爲に迷へる心が自ら醒めて、父のおいて行かれた是好良薬に氣がついて服用した。良薬の力でさすがの重病もたちどころに全快したのである。その時父は子供等がみな全快した事をきいて再び歸宅し事の始終を物語り、もと通り一家平和な生活をつゞけたといふ事である。

この壽量品の譬説を法門によせて因果論的に組織したのが久遠下種の法門である。本佛の無縁の慈悲より起る全人類救済運動はこの久遠下種を化源とし、本迹二門に脱益を示し、靈山下種に進んでは正像を利し、文底に種を留めては末法下種を展開して現今の人々に即身成佛の大果を結ばしめるのである。

2、良醫譚の意義

壽量品譬説の良醫とは本佛釋尊のことである。

日向記云 良醫とは教主釋尊、智慧とは八萬法藏十二部經なり。 五七

釋尊は父なり。 五五

良醫の子とは久遠以來本佛の子たる私共のことである。

日向記云 悉是吾子の子は孝不孝を分別せざる子なり。 五四

我等衆生は子なり。 五五

この子の中には毒をのんで本心を失つた者もあり、亦本心を失はないものもあつた。その失心の子とは久遠下種の佛種を忘れた者であり、不失心の子とは本覺者を信じた法華經の行者のことである。

日向記云 爲治狂子故の子は久遠の下種を忘れたれば物にくるう子なり。仍て釋尊の御子にも物に狂う子もあり、不孝の子もあり、孝養の子もあり、所謂る法花經の行者は眞實の釋尊の御子なり。 五四

毒藥とは他宗余教の教義であり、毒をのむとは邪法を信ずる事である。

御義云 他とは念佛禪眞言の謗法の比丘なり。毒藥とは權教方便なり。法花の良藥に非ず。故に悶亂するなり。悶とはいきたゆるなり。壽量品の命なきが故に悶亂するなり。 九四

毒をのんで本心を失つたと父本佛を忘れ、久遠の下種を失つた事である。

御義云 本心を失ふとは謗法なり。本心とは下種なり。不失とは法花經の行者なり。失とは本とあるものを失ふ事なり。 九五

是好良藥とは一大秘法の南無妙法蓮花經の事をいふのである。

本尊抄云 是好良藥壽量品肝要妙法蓮花經是也。 九四四

——こゝまでは久種近脱を含む久種現脱の説で、こゝから下は末法下種義を密表してゐる——

こんなによい薬を與へてものまぬというのは權乘への執情が強過ぎて本佛が與へた一秘の妙法を信じない事である。

御義云 毒氣深入とは權教謗法の執情深く入りたる者なり。之によつて法華の大良薬を信受せざるなり。九六
父が子供に向ひ

是の良薬を今こゝに留めておくからお前達は勝手に取つてのむがい。

といつて他村へ行かれたといふのは末法萬年の衆生の爲に覺者が一秘の妙法を壽量品の文底に留め御入滅遊ばされたといふ事である。

御義云 今留とは末法なり。此とは一閻浮提の中には日本國なり。汝とは末法の一切衆生なり。取とは法華經を受
持する時の儀式なり。服するとは唱へ奉る事なり。九六

使を遣はして父が死んだと告げしめたといふのは本化上行日蓮大菩薩を日本國へつかわし本覺者の非生現生非滅現滅
の理を示し、常住此説の妙法を宣傳せしめる事をあらわしたものである。

本尊抄云地涌千界末法始必可出現今遣使還告地涌也。九四四

御義云 法華經の行者は如來の使に來れり。五九

以上の宗義を簡單にまとめてみれば、父たる本佛釋尊が久遠の大占から十界の衆生の八識心田へ一大秘法の本覺種たる南無妙法蓮華經を殖えておかれたのである。しかるに下種された人々の中にはいち早く自己の心田中に覺種が殖つてゐた事に氣つき發心して覺つた人もあつたが、中にはいつまでも何時までも自己内心の覺種を忘れて六道の苦界に輪廻してゐた人もあつたのである。父の與へた妙法の良薬をのんだ人は早く妙覺の位に昇つたのであるが、ひどく邪

教の毒にあてられた連中は今なを六道の苦界にころがつて苦しんでゐるのである。この人々を救はんが爲に如來使たる地涌の菩薩が人間と生れかわつて來たのが日蓮聖人であるといふ意味である。

3、下種の教主

久遠以來三世十方にわたつて無量無邊の下種が行はれた事であらう。三千久遠の大通佛時代には十六王子によつて大通下種が行はれたといふ事實が化城喩品に説かれてゐる處からみると、無始久遠以來三千久遠までの中間に於てもその當時の十方寶土で無量無邊の下種が行はれてゐたといふ事は想像するにたたくない。それから大通下種以後にも靈山下種や末法下種があるのだから久遠劫來未來永恆にわたつて無盡の下種が行はれており、又行はれる事であらうそれらの下種は皆それ／＼下種の教主によつて行はれるものであるから下種の教主も下種の數にしたがつて無數に存在するわけである。

しかし壽量品の精神からみれば燃燈佛等も本覺佛の一分身佛であるといふ事になるから三世十方の下種の教主たる諸佛如來も悉く本覺佛の分身散体であるといはなければならぬ。さうすると三世十方のあらゆる下種もその當分々々の佛の下種ではなくて、そのもとをととせば本覺佛の下種であつたといふ事になるのである。

その本覺佛が一番最初下種したのを久遠下種といふのであるから、この久遠下種はあらゆる下種の中心主体であり根本生命であるといはなければならぬ。久遠下種は全法界の一切衆生に下種したものであるといふ立場からみると分身散体の諸佛の下種は久遠下種の上に更に下種する重復の下種になりはしないかといふ疑問が起つてくるが、これはどう解釋したものであらう。それは久遠下種の下種といふことをしばらく用ひたのであつてその内容を探究すれば久遠下種だけ本當の下種益であつてその他の下種は熟益に該當するのである。

三世十方のあらゆる下種を統帥しそれらの教主を統一せる久遠下種の教主は無始久遠の古佛であり無作三身の本覺佛である。骨董品でさへも古ければ古い程高くうれるのである。下種の教主の壽命が長遠であるといふ事はその教益が擴大無邊であるといふ事をあらわしてゐるのである。無始以來本覺者自ら覺種を下ろして人類を救済するばかりでなく三世十方に身を分けて無邊の衆生を教化してゐるのである。さういふ風に無限の教益を施すにはどうしても久遠以來の古い佛でなくてはできないのである。そこで古い佛程無量無邊の弟子と信者とを有してゐるわけだから古い佛程尊いといはなければならないのである。本覺佛はたゞ古いばかりでなく一身にして無量身を現じ無量身にして一身を現する無作無碍の自在身を有してゐるのである。

本尊抄云 教主釋尊五百塵点已前佛也。因位又如是。自其已來分三身十方世界。演說一代聖教。教化塵數衆生。九三四

日眼女抄云 釋尊は天の一月、諸佛菩薩は萬水に浮ぶ影なり。 一八三二

4、三・五下種の本義

大根や菜の種であれば畑に殖えても種が未熟だつたり耕地や湿度などが適合してゐなかつたりするとその種子が發芽しないうちに途中で朽ちてしまふ事がある。佛種には決してさういふ憂はない。少くとも佛種は無量の壽命を有せる久遠の本覺者の大智慧と大慈悲との結晶体であつて、その中には久遠の生命が脈うつて流れてゐるのであるから絶對に枯死するような事はないのである。無始久遠の元初本覺者が下種したといふ妙覺の種子は全人類の識田に殖えつけられたまゝ永劫に生きてゐるのである。

文句記云納種在識永劫不失 會本、一三、五〇

御義云 妙法に結縁すれば億劫にも失せず。 一六三

一度殖えられた種子は永恒に生きてゐるとすれば途中でどんな事があつても枯れたり失はれたり無くなつたりしないわけであるから再びその上に下種する必要はない。しかるに天台あたりでは久遠下種以後に更に大通下種などを立てゝゐるのはどうしたわけであらう。久遠下種の上に再び下種しなければならない何等かの理由があるのだらうか。天台では下種の佛因を正了縁にわけて久遠下種を正因の下種とし、性乗二種にわけては久遠下種を性種としてゐるから、どうしても大通下種を立てゝ了縁の下種を行ひ、乗種の下種を全うしなければならなかつたのである。天台で大通を下種といふのはかように迹門立脚の立場からみて當然のなり行としなければならぬ。しかるに日蓮聖人も三五の下種などと仰せられてゐる處もあるから、本門立脚の宗義から大通を下種といふ理由があるのであらうか。それは嚴密な意味では大通を下種と稱する事はできないのであるが、久遠下種を開發する爲の發心の下種といふ意味ならば大通下種といへない事はない。又ことばを簡にする爲に三千久遠と五百久遠とを並べ稱して三五の下種といひあらわす事もありうるから、その場合は三五下種といつてもたゞことばのあやにすぎない事になる。だからことばの上は三五下種とあつたからといつてたゞちに久遠下種と同格に大通下種を下種として認めてゐるのだと思つてはならない

日向記云 三五下種の法門なり。 七四

太田抄云 三五下種の輩也。 一〇九六

迹門當分の天台一家の立義にしたがへば大通下種も立派に下種として通用する。けれども一度本門立脚の我家の宗義からみれば迹門の大通下種は結縁または熟益とならなければならぬのである。

本尊抄云 久種を以つて下種となし大通前四味迹門を熟となす。 九四二

久遠下種大通結縁。 九四四

國家論云 彼の久遠下種大通結縁の者の五百三千の塵点を経るは法華の大教をすて、爾前の權小にうつるが故なり

二四六

富木抄云 大通結縁の輩は衣珠を忘れ三千塵劫を経て貧路に踟躕し、久遠下種の人は良樂を忘れて五百塵点を送り

三途の嶮地に顛倒せり。 一三八四

要するに下種を本門に約すればたゞ久遠下種だけが眞正の下種となり、その他の三世十方諸佛諸菩薩によつて行れる又行はれるであらう全法界のあらゆる下種は悉く熟益となつてしまふのである。

しからば當家に於て久遠下種の上に更に末法下種を主張するのはどういふわけであるか。すでに久遠下種は性乘不二の妙覺の種子を下種したものであるとするならば、更にその上に重ねて下種する必要はないではないか。それはまことに興味ある問題であり、本論の眼目ともいふべき好題目であるから、くわしく書いてみたいものである。

五、末 法 下 種

1、末法下種とはどういふ下種か

久遠に下種された人々の中で最上根の人々は過古世に覺者となり、近世に熟脫の益を得、大通下種の輩は迹門に來て如來となり、久遠下種の中根の者は本門で脫益を得たのであるが、なを熟脫の益を得ないで末法まで流れてゆく最下根の人がある。それらの人に對して釋尊は壽量品の文底に一大秘法の大良樂たる妙法の覺種を秘藏されてのこされたのである。この文底秘沈の良樂の妙法を末法に如來使として應現せる本化地涌の菩薩が宣布する事を末法下種とい

ふのである。全人類が久遠の元初から下種益を蒙つてゐるのだから今頃は皆んな覺りを開いて脱益を得てゐるのが當然であるのにどうしてかうも迷へる人々が多いのであらう。なる程下種は十界平等に被つたのであらうが、その覺種を下ろされた人々の心田に差別があつて良田ばかりではなく惡田や荒地などがあつたからその熟脱にも遲速ができたのである。壽量品の不失心の一類は過古世近世、或は大通迹門、或は本門や正像時代にすでに熟脱の益を得てゐるのに、余失心の連中は久遠の寶珠を忘れ妙覺の種子を失つて末法の今日まで流轉して來たのである。久遠下種を忘れたり妙法の覺種を失つたりする様な最惡劣機の衆生には先づ折伏逆化の超悉檀根本大化を施して久遠以來忘失してゐた佛種の覺醒運動をしなければならぬのである。そういふ化導を末法下種といふのであるから、末法下種とは下種される人々に約してしかいふのであつて佛心に約して末法下種といふのではない。

正法千年像法千年すぎおはつて末法時代に生れた私共は皆久遠の失心者であるから父本覺佛に背き久種の珠を忘失したところの不孝の子であつたのである。せつかく父本覺佛から頂戴した久種の珠を忘失するような馬鹿者には尋常一様の教法や普通の化導法を用ひても何等の反響を齎らさないであらう。そこでぐわんと一つ鐵拳をくらわす必要がある。それを折伏といふのである。その折伏逆化の教線をはり唯一佛乘の妙法を唱へ無始已來の彼等の邪法に對する執情を蹴飛ばして久種の覺芽を開發せしめるのが末法下種の大行なのである。

開目抄云　しらす大通結縁の第三類の在世をもれたるか。久遠五百の退轉して今に來るか。　七六八

本尊抄云　末法の初は謗法の國にして惡機なる故に之を止めて地涌千界の大菩薩を召して壽量品の肝心たる妙法蓮花經の五字を以て閻浮堤の衆生に授與せしめ玉ふ。　九四二

御義云　在世は脱益、滅後は下種なり。よつて下種を以て末法の詮となす。　九二一　以下次號

内房尼についての一考察

三 木 淨 達

一、緒 言

内房尼は建治四年の春「氏神詣でのついで」とて身延の御草庵を訪れ、聖祖から本末を誤るものとして追ひ返され、た有名な老尼である。

然しその俗姓については、古來異説紛々「攷異」の如きは「一老尼不詳何人也」と匙を投げてゐる。が然し吾人は假令、最後に至つて匙を投げるとしても、出來得るだけその範圍を狭めて見たいと思ふ。

二、内房尼入信の時と因縁

内房尼の入信の時を知る確實なポイントとなるものは、やはり三澤鈔である。何となれば身延詣で己前の入信は明であるからである。

然しこの三澤鈔の御述作年次に多少の異説が見られる。即ち「譜目」及び「境目」は弘安元年とし、「統紀」は弘安三年としてゐる。今且く「遺文録」に従つて建治四年二月の御書と見た。

『又内房ノ御事ハ御年ヨラセ給ヒテ御ワタリアリシ、痛ハシク思ヒマイラセ候シカドモ、氏神ヘマイリテアルツイデト候シカバ、見參ニ入ルナラバ定メテ罪フカカルベシ、其故ハ神ハ所従ナリ法華經ハ主君ナリ、所従ノツイデニ主

君へノ見參ハ世間ニモオソレ候、其上尼ノ御身ニナリ給ヒテハマツ佛ヲサキトスベシ、カタガタノ御トガアリシカバ見參セズ候。此又尼御前一人ニハカギラズ、其外ノ人々モ下部ノユ（温泉）ノツイデト申ス者ヲアマタ追返シテ候尼御前ハ親ノゴトクノ御トシナリ、御ナゲキイタワシク候シカドモ、此義ヲ知ラセマイラセンタメナリ』(二七〇)と。

既にこの御書が二月とすると、尼の身延參詣の事實は、それ己前の正月ではなかつたと思ふ、若し然らば氏神參りの事は、ズツト軽い意味で氏子としての正月の禮參拜で、實は宗祖への年頭の挨拶が主ではなかつたかと考へられる。で、なければ内房から身延まで八里の道程であるから、氏神の所在が問題になる。

然し何れにしても、尼が敬神奉佛の人であつた事は明かで、而も尼御前と敬稱されてゐる点から見て、相當身分もあつた人とするべきであらう。而も亦『其上尼ノ御身ニナリ給ヒテハ』とあつて、『神ハ所從ナリ法華經ハ主君ナリ』の大義を斷乎として示されてゐる所から推して、入信の程も察せられるのである。

内房本成寺の「寺傳」に依ると

『正嘉二年駿州岩本實相寺ニ趣キ玉ヒテ……遂ニ門外ニ擯出セラレ玉フ、爰ニ同國庵原郡内房殿トイヘルハ窪尼御前ノ長子ニシテ、岩本ノ領主上野殿ノ郡代官ナリ。其日偶一人ノ旅僧ニ會見其氣高キ威容ヲ見テ、意衷コレ凡侶ニアラズト思ヒ供奉シテ我邸ニ歸ヘルニ、果セル哉纔ニ一晝夜ニシテ法義ヲ聞テ歸依信伏ス』と、記してゐる。

こゝには窪尼と内房尼を同一人として扱つてゐるのであるが、未だ岩本入藏已前に内房に入られたと云ふ他の記録を見ない、のみならず次に

『其眞眞言寺ニシテ胎鏡寺トイヘルアリ、住持ハ同ジク窪尼御前ノ子息ニシテ、其兄弟モマタ出家シテ兄ヲ東林法印弟ヲ佛像法印ト號ス、等シク眞言ノ奥義ヲ極メタル學匠ナリシガ母兄トモニ既ニ高祖ニ信伏セシヲ見テ憤リニ堪ズ屢高祖ニ詰難ヲ試ミタレドモ遂ニ説キ破ラレテ法弟トナル……寺號ヲカヘテ長遠山本成寺トナシ』
と、述べてゐる。

これを「本成寺歴代相承」に檢して見ると、兄の東林房は永仁元年七月十三日四十九歳で化し、弟の佛像房は延慶三年八月朔日六十三歳で遷化してゐる。而してこれを逆算すると正嘉二年は、實に東林房十四歳、佛像房十一歳となる。如何に天分に恵まれたとしても、この年齢にして眞言の學匠とは肯けない。且つその後の教線にも名が見えないのは不審とすべきであらう。

そこで「統紀」を見ると

『又上野呂主族ニ有ニ内房ノ阿摩。居シ干菴原郡内房邑ニ、別ニ築ニ新室ヲ介シ庄司入道ヲ慇懃ニ敬待ス、高祖不扼十六日宿ニ茲ニ、阿摩竭シ誠ヲ罄シ饗應盡シ美矣』

と云つて、文永十一年五月、聖祖身延御入山の砌りの結縁としてゐる。

「年譜」はこれを受けて

『十六日愆ニ干内房ニ有ニ老尼ニ供饌』

と記し、「攷異」は認めて

『内房在ニ庵原郡ニ其地後人建寺號ニ長遠山本成寺』

と、云つてゐる。

要するに「寺傳」の正嘉二年入信説は、種々の点から妥當を缺くものゝ如くである。恐らく身延御入山の時に教化に浴し、後に尼となつたものであらう。

三、窪尼との關係

次に「寺傳」が内房尼と同一人として扱つてゐる窪尼について考證しやう。

窪尼が頂いた御書として現存するものに前後七通ある。最初の弘安元年五月の御書には

『サテハ熱原ノ事、コンドラモツテラボシメセ、サキモ虚事ナリ……佐渡ノ國ニテモ、ソラミゲウソ（虚御教書）ヲ三度マデツクリテ候シゾ』（一、七二六）

と、熱原法難や佐渡三度の空御教書の例を引いて

『師子ノ中ノムシノ師子ヲ食ヒウシナフヤウニ、守殿ノ御恩ニテスグル人人ガ、守殿ノ御威ヲカリテ一切ノ人人ヲラドシナヤマシワヅラハシ候ウヘ、上ノ仰トテ法華經ヲ失ヒテ國モヤブレ、主ヲモ失フテ、返ツテ各各ガ身ヲホロボサンアサマシサヨ』

と、時宗の威を借る家人共を難ぜられてゐる。更に同年の六月二十七日には

『世ノ中ニイカニ今マデ御信用候ケル不思議サヨ、根フカケレバ葉カレズ、泉玉アレバ水タエズト申スヤウニ御信心ノネフカク、イサギヨキ玉ノウチニワタラセ給フ歟』（一、七〇四）

と、述べられてゐる。

これ等の御文から推察して、窪尼は鎌倉御在住の時からの入信であり、殊に時宗との縁者ではないかと思はれる。

「祖書證議論」は既に「時宗所縁の人か」と云つてゐる。

然し弘安二年五月の御書には

『又御心ザシモスグレテ候、サレバ故入道殿モ佛ニナラセ給フベシ。又一人ヲハスル姫御前モイノチナガク幸モアリテ、サル人ノ娘ナリト聞エサセ給フベシ』(一、八五〇)

と、見えてゐるから、此頃は一人の娘と共に怙びしく夫の佛事を勵んでゐた事は明かである。

何れにしても鎌倉で相當身分のあつた人の妻と思はれるが、これについても諸傳各々所見を異にしてゐる。

然し「攷異」が

『持妙戒號也以レ處呼レ之曰ニ窪尼、駿州富士郡久保村有ニ尼公ノ家』

と云つてゐる如く、窪の持妙尼たる事は大體間違ひがない。故に内房に住む内房尼とは全然關係がない。

然るに「寺傳」がこれを混同したのは、「統紀」が「内房優婆夷者上野豪族松野氏ノ妻」と云ひ「舊記」(玉澤宗師御縁起、同通師境妙庵目録等)が窪尼を以て松野六郎左衛門の室とした事に混同されたものと思ふ。

四、内房女房との關係

内房尼と同じく駿河の内房に住んで、弘安三年八月に聖祖から直接御書を頂戴した人に、内房女房がある。

即ち「内房女房御返事」には

『内房ヨリノ御消息ニ云ク、八月九日父ニテ候シ人ノ百箇日ニ相當リテ候、御布施ノ料二十貫マイラセ候乃アナカシコク。御願文ノ狀ニ云ク、奉ニ讀誦シ妙法蓮華經一部、奉ニ讀誦シ方便壽量品三十卷、奉ニ讀誦シ自我偈三十卷奉ニ

唱妙法蓮華經題名五萬返云 同狀ニ云ク伏メ惟シ先考幽靈生存ノ之時、弟子遙カニ凌シ千里ノ山河ニ、親リ受テ妙法ノ題名ヲ然ル後ニ不レ經ニ三十日ニ永ク告シ一生ノ之終ヲ等云……又云ク弘安三年女弟子大中臣氏敬白等云乃至此五字ハ凡夫ヲ佛トナス、サレバ過去ノ慈父尊靈ハ存生ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘシカバ即身成佛ノ人也』(一、九七一)と、

即ち内房女房は亡父の百箇日追福の布施として金十貫文を献じ、且つ願文を添へて『女弟子大中臣氏敬白』と云ふ。布施の料、並に願文の内容によつて凡そ身分と教養の卑しからぬ事は判断出来る。而も亦、大中臣氏を名乗る以上神祇に關係ある事は云ふまでもない。

因に内房の村社千眼神社(淺間ノ古名)の神体は本成寺から奉祠した首題の木札である由。又宮ノ下相沼に祖先以來淺間の宮司をしてゐる家がある。同家の古記録には藤原朝臣、中臣朝臣等の記名も見え、四百年來鈴木刑部大夫と稱してゐる。

こゝに於て内房尼と内房女房の特殊關係が考へられ、「聖典辭林」は

『内房尼御前トハ母子ノ關係ナルベク弘安三年卒去セル女房御前ノ父ハ此尼御前ノ夫ニハアラザルカ』(五一七)

と云つてゐる。若し然らば尼は大中臣氏で共に敬神奉佛の人であつた事に不思議はない。又當時の習慣として入道及び尼は必ずしも家庭生活を離れてはゐないから、老尼の夫が弘安三年四月に寂したと見る事も出来る。且つ聖祖の慣用例として母を尼と呼び、嫁を女房と稱せられた事からも肯けるのである。

そこで「御書略註」は内房女房は内房日住禪門の妻で、三澤藤次の娘だといひ「祖書證義論」は、日住禪門を内房殿として妙嚴の孫、日源の兄弟だと云ふ説が出で、故島智良帥も亦、妙嚴を内房女房の父とし、尼を母として會通を試みてゐるのである。

然しこれ等は要するに内房尼と内房女房、及び三澤殿との關係づけの努力に過ぎない。結局「攷異」の如く「一老尼不詳何人也」と匙を投げるべきであらう。

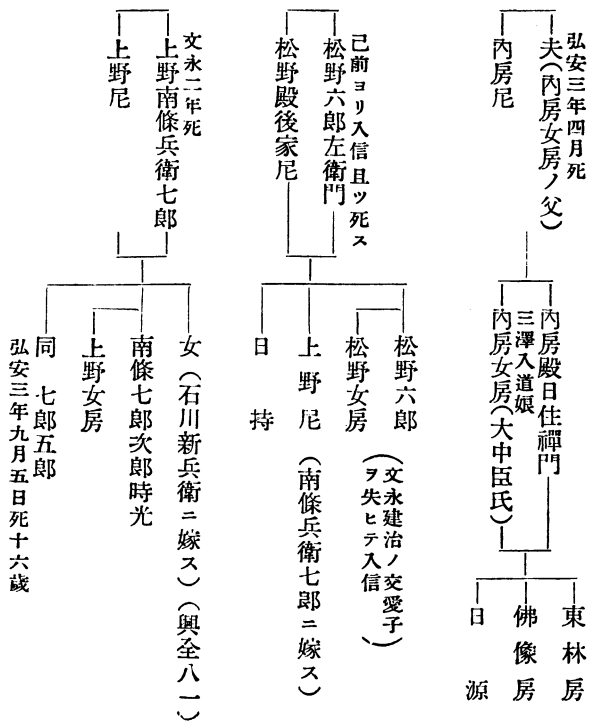
五、結 言

最後にこれを綜合して考へるとき、内房尼は内房女房と母子、或は姑嫁の關係で共に大中臣氏として、敬神奉佛の人と見る事が出来やうと思ふ。而して「御書略註」が内房女房を三澤氏の娘とするのも「眞實傳」が内房尼を三澤氏の伯母としてゐるのも、共に「三澤鈔」によつて通家ならんとの想像からと思はれるが、その袖書に

『カヘスガヘス駿河ノ人人ミナ同シ御心ト申サセ給ヒ候ヘ』 (一、七〇二)

とある御文から拜して、三澤氏は駿河一圓の觸頭の如きものではなかつたかとも考へられるのである。

又諸傳に多く尼を上野邑主族とし、松野六郎左衛門の妻としてゐるが、若し然らば六老僧日持上人や上野尼の母であるべきである。が然しその事も見えないし、御書の上から見ても別人とすべきであらう。―昭和十二、十一、十一―



宗學への悩み

中澤要實

一、いはんとする悩みとは

宗學への悩みと言つたからとて、本化宗學が卑賤低級なるものであると云ふ意味ではない。と云つて本化宗學が余りに廣遠且大であるが故に究理困迷の世界にありすぎると云ふ筋合でもないのである。勿論腦留守な私にはないでもない。佛陀は此法華經は難解難入と説かれた程であるから。されど幸哉、宗祖は唱題を以つて末法の易行と遊ばされて下されたが故に單信流入する事の出来ることは下棧の喜悅とすべき所である。されば何かと云ふに本化宗學の實踐性、行動性について現在の寺院の制度下に於ける宗徒が如何に宗學の指示通りに生きてゐないか、或はゐられないかと云ふ点である。勿論これはたゞ宗徒の罪とすべきではないが宗徒として目覺むべき所も

多々あるのではなからうかと思ふのである。この迷みは事幾分違ふかも知れないが且て中村又衛氏の「信後の悩み」(宗教公論四卷二號)にも似たものであるかも知れないと思ふ。

二、宗學の行動性

本化宗學を大分して二とし、教相門と寶賤門と分つ。教相は五網を立て實踐門は三秘即一秘の唱題の實踐化と云ふ事になつて所謂身口意の三業に實行せよと云ふのである。成程哲理的に考へても宇宙の眞理性である法華經本迹兩門の粹を取つて、それを實踐化し、而も現在までその實踐行動が続いてゐる事は事實である。この唱題の行法によつて弱者も強者に蘇り所謂利益と云ふものを得

てゐる。なれども現在に於て日蓮上人の如く、独自の信念のもとに法華經でなければどうしても救済されないといふ如何なる迫害の下にも言ひ切るものは幾人あるであらうか。ありとすれば單信の徒の間には盲蛇の譬の如くあるかも知れないが通途の宗徒は「おれではない、日蓮上人がかく言はれたまでを信じたまでだ」と遁辭し、時によ

りて日蓮上人の本意すらも曲解して、勢力に如同せしめんとする傾向すらもつものが多い。少くとも日蓮上人の独自の信念の如きものを吾等も持たなければ今後の宗學の存立の意義が危い。現に佛教の教團も既成的存在以上に出ない限りは没落の過程におかれてあると見てよいであらうか。それ何故かと云ふに現在の佛教寺院の存続は漸くにして昔時からの因襲によりて、その命脈を得てゐるものであると見てよいであらう。良き因襲は既成教團の經濟と精神的安定の礎であるが故に、その因襲の弱き寺院は正に没落は目捷である。何々山何々寺の名稱は嚴にして一なれど内容の微たるもの如何に多くあるかは生

活するものゝみの知る現状である。この救済はどうすればよいか、私は云ふ、本化宗學に教られたる五綱教判を現代的に見直して進むことが第一條件であり、第二は教團の組織的統制にある。この二條件の完備は本化宗學の再生であり、教團の勃興であると思ふ。

三、教判の見直し

先に述べた如く教判は教機時國序の五綱である。初の教であるが釋尊出世の本懷である法華經と云ふ信念は結構である。この信念を如何に法華經でなければ駄目であるか。救済されないかと云ふ点を確固に教學的論據を實證的に擲んで頂きたい。

次に國柄も時も機も違つた近時の狀勢である。これがなければ序所謂流通宣傳は出來ないのである。現代人の一般的機風は何時も法を求めてゐる。又法に飢えてゐるのである。なれども明治維新以來反宗教的教育の下に科學的に進歩した近代人も近頃漸く信仰の必要さを知つて

來たが、それは何宗派でよい或は宗派でなくとも自己の性に合ふものでさへあればと云ふのであるから宗教心は幾分おきても益々寺院と人心と隔離されつゝあるは必然の理である。この人心に對機説法的にもねて行けと云ふのではない。この人心をして如何に本化の教であり行に依らなければ救済されない道であるかと云ふ事を教ゆるだけの力ある教理と行動形態を大衆的たらしめたいと云ふのである。具体案は斯道の大家に待つと同時に吾等も體驗的信念より研究しだそうと思ふ。

四、教團の組織的統制

次に私は現教團を組織的統制あるものにする事が教團の復興であり勃興であると述べたい。それはあなたがち今日の統制ばやりの言葉に支配されて云ふのではない。むしろ現政府の統制問題たる米穀にしろ産繭にしろ、それ等に對してはむしろ反對の意見をもつ私である。されど教團に對しては統制は必要であらう。これも祐福な寺祿

と法子相續によるものは反對であらう。それは祐福なる家族制寺院生活に做れた人間の本能的思想にあるエゴイズムによるからである。現在の寺院に對する宗務と云ふものは酷評すれば恐らく机上の皮算用より割出された宗費等の取り立ての統制以外には何ものもないと云ふ現狀である。これで一体宗門發展、四海歸妙の理想の實現と云ふ事が行はれるであらうか。それに同じて本末寺院の關係に於ても然らんと云ひたい。或は吾人の曲解かも知れないが、かゝる感情を持たしめる現狀に見ゆる事は悲しい事實である。此處に於て私の意見がある。都會寺院はいざ知らず農村寺院の現在に於ける安定せる生活狀態は檀信の多數を有し、師檀關係の因襲的援助關係が深く結ばれ、寺祿の祐福に有する所に存續の可能性がある。然るにかゝる關係薄く宏壯なる頽破的殿堂を有し、僅かの寺財たる不動産には二重課税があてられ、檀信の用務少き寺院は有名無實な存在である事は今更言を俟ない。正に没落淵底におかれてるのである。

これを知つて知らないものゝ多いのが現在の本山であり、宗務院である。たと役目的な事務にのみ没頭してゐて少しも伸張さすべき機關に具体的案がないのである。その具体的案とは土地、状態、人氣に對して、人材の該地に適するや否やの問題が起つて來る。此處に所謂教學の適用による組織的統制、即ち教は前に論じた故に機時國序の適用を進言したのである。例せば農村寺院に於けるこの地、この民に、この人氣に對しては如何やうな人間が適應し發展させ得るか。或はこの都會寺院にはと云ふやうに教師の按配、法器の活用の上に組織的統制あらしめたい事を今回行道場が身延山に建設されるにつけても感ずる所である。更に教團の權能を社會的に力あらしめると云ふ事が、國家施政方針から云つても教化運動を徹底にならしめる所以である事を痛感しつゝ項を終る。

五、暗路にあがく

現在宗學は意義なきもの、活動性なきものであるとは云はない。それはむしろ自己の愚を發表するものであらう。實に妙法は高遠であり、永遠不滅の眞理であり、宇宙の定規であり、法理である事は感ずる。なれども現代の人心の上からは宗教心、信仰心の必要性は認められ且憑依せんとしながらも現在の寺院から遠ざからんとする傾向がある。敬遠的に忌避せんとするあるを見る時、教團人の教團の意義、存在の價値を認識せしめる事が大切である。教團人が敬遠をおそれて俗化して行く時は教團權能は薄らがしめる事多きに失する。且て濱田本悠師が農村寺院改革についての意見に一村一宗、寺院の公會堂化等の改革意見がかゝれてあつたが、理想とすれば誠に結構であり、實現可能ならしめば申分なしと云ひたいが哀れなる哉一般人心はそれを改革せしめる程理解がないと同時に近時至る處貧弱乍らも公會堂を別建立してゐる

ので欲しやうとしない。さりとて寺院の伽藍に對して縮少する事にも喜ばない。「おらが村さのお寺」と云ふ因襲的觀念は活動なき淋れたまゝ乍らもあるを喜ぶが村人の心……此處に像法的遺物たる伽藍は向上も時には退歩を見乍らも現状維持の露命、住職は肅々として法燈相續伽藍相續に寺門丹誠だ、養蠶もする、田植もする、養豚養

鶏と聖僧行基たらんとする？ されどこの中に豪農あり貧農ありする、農村寺院にありながら農に同じて行基の行をなし得ず法燈淡きに悲しむものあり。秋風サツ／＼と立初むる法窓の紙破ぶれて、火の消えざるをおそれてゐる。時正に日戰交戰の非常時局皇軍の武運長久を念じつゝ。

日蓮聖人
御遠祖 藤原共資公

鈴木智久

序

日蓮大聖人の御先祖に對しては古來色々の説がありまして一定しません。日蓮大聖人は佛様の御使だから御先祖や御系圖等はどうでも良いと言ふ人があります、然し如何に大聖人が三千年の昔本佛お釋迦様の前で法華經の

御附囑を受け末法の今日本化上行菩薩の再誕として法華經を弘むの行者でありましたが、御兩親がなくては此の世の中に御生れになる事は出来なかつたでせうし、又御兩親も其の御先祖がなくてはあり得ないのであります。古來偉人とか賢人とか、又は聖人とか言はれる人は大抵小さい時から家庭教育、御兩親の教化によつて後年偉大

な事業をなしてゐるのであります。今我が日蓮大聖人の御両親が今迄多くの人によつて考へられてゐた様に只安房國小湊浦の漁夫の小供であつたなら、どうして後年あれ程迄の御方となる事が出来ませう。こう考へますると姓氏血統は其の人となりと重大な關係を有するのであります。日蓮聖人の御先祖は立派な御方であり、御両親は山緒正しき御方であつた事は其の人となりを見る時誰しも考へられる所であります。では一体日蓮大聖人の御先祖はどういふ御方であり、御両親は如何なる御方であつたのでありませう。

其の源を遠く尋ねますれば、人皇第三十八代天智天皇を扶け奉り、蘇我氏を滅し大化の改新をなし國家を泰山の安きに置き奉りましたる大職冠藤原鎌足公であります此の鎌足公から九代目に共良公といふ方があり、聖武天皇の御代外國から我國を攻めた事がありました、天皇は非常に御心配遊ばされ討手の大將として此の藤原共良公を差向けられました。共良公は大軍を以つて直ちに外敵

を退治致しました。天皇は非常に御喜びになり、其の賞として遠江國を初め多くの國々を賜り、特に遠江國は子孫代々迄との約束でありました。此の共良公から四代目即ち鎌足公から十二代目に共資公と言ふ御方があり、父祖の功勞によつて人皇第六十六代一條天皇の正暦元年六月、只今（昭和十二年）から九百四十七年前御年三十才にして初めて遠江の國司として赴任し、只今の濱名郡村櫛の郷に御城を築き志津城と名付けて住せられました。

此の共資公から十一代目に日蓮大聖人が御誕生遊ばされたのであります。此の備中守共資公が遠州の國司として村櫛に下向せられたから其の子孫に日蓮大聖人の様な偉人が出、又維新の前彼の安政の大獄を出現せしめて最後水戸浪士の爲に櫻田門外の露と散つた幕府の忠臣大老井伊掃部頭直弼即ち只今の井伊家を出したのであります。若し共資公が遠州の國司として村櫛に赴任せられなかつたなら日蓮大聖人も御誕生遊ばされなかつたし、又現在五百萬の信者を有する日蓮宗もあり得なかつたので

ありませう。共資公には男子がなく女子ばかりで自分の後繼に随分苦心せられました。神佛に祈願をして良き男子を得られん事を願ふてゐました。下向後二十一年目に引佐郡井伊谷の八幡宮に参拜して石段を下らんとした時石段の下の井戸の傍で赤兒を拾ひ、此子が成人の後自分の女を嫁せて後目として備中太守共保と名附け井伊の姓を與へ、又井桁に橋の紋所を與へました。此の共保公が井伊伯爵家の元祖になり、共資公が共保公に與へた井桁に橋の紋所が現在日蓮宗を代表する紋所となつて今日残つてゐるのであります。こういふ譯で共資公を日蓮大聖人の御遠祖と申し上げてゐます。

然るに共資公滅後九百年に及ぶのに一体日蓮大聖人の御遠祖共資公とは如何なる御方であり、日蓮大聖人の御紋所である井桁に橋は何處から出てゐるか一切不明でありました。是は御遠祖共資公が九百年已來世の人から忘れられ久しく世に現れなかつた爲であります。不肖幼少より共資公は何處の地で御逝去遊ばされたか、又如何に

祭祀せられてゐるか随分處々方々を尋ね苦心の末、大正八年に至り遂に遠州濱名郡村櫛村の御山塚にある古墳こそ夢にも忘れられぬ共資公の永へに眠り玉へる御墳墓地である事を確證を得ました。遇々外護者たる濱松市利町藤田淺藏氏夫妻の淨財寄進により、此地の買収を行ひ爾後數回に亘り地域の擴張に力め、遂に昭和七年十二月十一日多年の宿望であつた復興祭を營み報恩供養塔建立するに至りました。茲に於て九百年以來地下にあつて何等供養を受けられなかつた共資公は、日蓮大聖人の御遠祖として世に現れたのであります。

日蓮大聖人の御系圖

藤原鎌足公から九代目三國藤原共良公の時外寇を征伐して遠江國を始め諸國を賜りました。十代目を良春公、十一代目を良宗公と申され此の三代の間は京都に御住ひになり、十二代共資公の時正暦元年六月領地である遠江國に初めて下向して村櫛に住せられました。共資公の養

子共保公は引佐郡井伊谷に新城を築き井伊と名乗つた事は前述の通りであります。共保公の世繼を共家公、三代目を共直公、四代目を惟直公と言ひ代々村柳と井伊谷の

兩城に住して國政を司つておました。五代目の盛直公から一向井伊谷に住ふ様になりました。此の盛直公に三人の小供があり長男は早世して次男良直公は井伊の六代を繼ぎ、三男三郎俊直公は同郷横尾に分れて赤佐家を興してゐます。是が後の奥山家の先祖であります。四男を四郎政直公と言つて、又井伊家から分家して皇紀一八一〇

年久安六年頃遠州の貫名郷に下つて貫名氏となつたのであります。此の政直公が日蓮大聖人の直接の御先祖に當る方でありませぬ。政直公に二人の子供があり、長男を四郎行直公と申され貫名二代を繼ぎ、次男の六郎直友公は石野に分家して石野氏となつたのであります。三代目を重實公、四代目を貫名次郎重忠公と申され、此の重忠公が日蓮大聖人の御父上であります。重忠公御年三十二才建仁三年五月七日皇紀一八六三年幕府の怒に觸れて安房

國小湊浦に流罪になつたのであります。故に貫名氏が遠州貫名郷には政直公、行直公、重實公、重忠公の四代五十三年間住れたのであります。

重忠公に五人の子供があり、日蓮聖人は第四番目の御方であります。御兄弟の中一番末の弟の藤平重友と言ふ御方のあつた事は明でありますが、其の外の事は明ではありません。現在重友の子孫は下總大野郷に藤平を姓として、曾て縣會議長をした程の名門として今猶榮へてゐます。

日蓮聖人は重忠公流罪になつてから二十年目、共資公下向から二百三十二年後で、只今から七百十五年前で重忠公五十一才の時であります。

御母上は清原氏で下總八幡郷の大野吉清の女で、重忠公が安房に遷されてから嫁せられたので大聖人は小湊浦で御誕生遊ばされ、重忠公は小湊に遷されてから濱の小供を相手に手習を教へ、暇があれば濱に出て漁夫の生活をしてゐましたから人々は日蓮大聖人は漁夫の小供であ

つたと考へられたのであります。然し本當は只今申しました様に由緒正しき御方の後裔であります。

井桁に橘の紋所の興起

御縁祖共資公は共良公の功勞によつて備中守に任ぜられ、遠江の國司として村櫛に赴任せられ、村の東南で濱名湖に突出した淺間山一帯に御城を築き志津城と名附けました。志津城は南北の兩殿に分れ幕末迄其の面影を残してゐましたが今は大凡養漁池に變つてゐます。共資公は志津城に住し領内を檢分せられ、租調の令をしき、民を愛撫して良き政を行ひましたから人民から神の如くに慕はれてゐました。此の共資公は下向してから二十年御年五十才になるに及んでも男子が御生れにならなかつた此の上は神佛に御願するより外はないと、引佐郡井伊谷にある八幡宮に祈願せられ絶へず參拜せられました。明れば共資公五十一才の寛弘七年正月元旦いつもの通り家來數人を引連れ八幡宮に參拜を濟せ神主と共に石段を下

らんとした時、何處からか赤子の泣き聲が聞へるので不思議に思つて見ると玉垣の傍井戸の中に衣に包まれたいとも可愛らしき赤兒が捨てられてありました。共資公はこそ神の我に與へ玉ふたものに相違ないと大いに喜び、神主に命じて養育をさせ神主は自身では養育が出来なかつたので社内に住んでゐた野澤某を乳親として七才迄養育をさせました。當時の神主は西尾權守といひ其の子孫を西尾常吉と言つて現に井伊家の系圖を所持してゐます其子の七才になるに及んで城内に連れ文武の道を教へました。一を聞いて十を知る聰明さ、共資公は掌中の玉として愛し十五才になるに及び元服して備中太守共保と名乗り、井伊の姓を與へ、出生の井戸の傍に橘木があつた所から井桁に橘の紋所を與へました。共保公二十才に及び井伊谷に新城を築き自分の女を嫁せて一切の國政を共保公に譲り、自分は思ひ出深き志津城に歸り余生を送りました。是から村櫛を志津古城、井伊谷を新城と呼ぶ様になりました。

現在井伊谷に龍潭寺といふ寺があります。千百年程前行基菩薩の開山で當時は八幡山地藏寺と稱し、八幡宮と地藏寺とが合祀せられてありました。共資公當時は三論宗で後に天台宗に變り現在は臨濟宗であります。此の龍潭寺の門前を去る約一町の田の中に共保公出生の井が今猶昔ながらに存してゐます。

共資公の御逝去

共資公は養子の共保公に一切を譲り思ひ出深き村櫛に歸り志津古城で風月を友として余生を送り御年七十五才の七月一日眠るが如く大往生を遂げました。御遺骸は御遺言により御城の裏山の小高き丘に葬られました。是から此の裏山を御山塚と尊崇する様になりました。

共保公は共資公の後を受けて良き政を行ひ、益威勢を四方に振ひ遠江に十三郡、駿河、三河に幾つかの領地を得ました。かくて寛治七年三月二十日御年八十四才で井伊谷で逝去せられました。

御遺骸は當時の地藏寺に葬られ、御法號は自淨院殿前備中大守行輝寂明大居士と申し上げ、以來地藏寺が代々井伊家の菩提寺となつて今日に至つたのであります。共保公以來代々井伊家の御墳墓は龍潭寺に祭祀せられてゐます。又龍潭寺の井伊家の御魂屋には共資公以來の御靈牌が安置されてあります。共資公の御法號は信元院殿前備中守本源道性大居士と申し上げます。此の御法號は九百年昔ながらの御法號で是を見ても當時遠州の國司であつた事が知れます。共保公以來の御方は龍潭寺に葬られ井伊家及び同寺で厚き供養を營んでゐましたが、養父の共資公は一人村櫛に葬られた關係上年と共に忘れられ九百年の今日迄何等供養を受けられなかつたのであります。大正八年村櫛に御墳墓地を發見するに及び初めて法華經御供養を受けらるゝに至りました。御命日には御墓前で盛大なる供養祭が毎年營れてゐます。

共資公と法華經

井伊家代々の當主が逝去せられた時は龍潭寺の寺主が法華經一部を提へて墓前で讀誦し、彦根へ國代へになつてから後もわざ／＼彦根に向き法華經を讀誦してゐました。井伊家と法華經とは共資公以來何等かの因縁關係に置かれてありました。徳川末期一身を犠牲にした井伊大老も熱烈なる法華經の信者でありました。共資公は久しく地下にあつて法華經の御供養を受けられん事を願ふてゐました。古來御山塚に手を觸れた者は必ず病み村人は恐れて此地を千古の不思議として來つたのであります。大正八年初めて此の聖地を發見してから後何等の異もなく、法華經の御供養を受けた事をどんなにお喜びなされた事でありませう。

共資公の御墳墓地

御縁祖共資公の御墳墓地御山塚は村楯村の東南端の小

高き丘の上にあつて、前方は濱名湖の勝景を眼下に見下し、遠く遠州灘から太平洋を望み、後には千古の白雪を頂く富士が巍然として聳へ、如何にも大聖日蓮聖人の御遠祖が永へに眠り玉へるにふさはしい勝地であります。地内には梅櫻が植り自然の公園の如く、春には櫻、秋には紅葉、夏は涼しく冬は暖く、一度此地に來る者其の聖地の有難さに自然頭の下るのを禁ずる事が出來ません。天氣の日此の御山塚に立つて濱名湖から太平洋を望めば、如何にも宇宙の廣大無邊なのに驚かされます。共資公は普段に此の金波銀波の亂れ飛ぶ太平洋を望み、太平洋の際涯ないと同様に此の法華經が末法萬年盡未來際を盡して一天四海に廣宣流布すべき事を豫言してゐるかの様に感ぜられます。

曾て昭和九年身延山法主現日蓮宗管長望月日謙猊下が静岡縣下御親教の際は態々村楯の御縁祖に御參拜せられました。此の時全村擧つて老ひも若きも小學生、青年團等有ゆる人達一村擧つて猊下を出迎へ、手に手に太鼓を

打鳴し異教の空に時ならぬ題目の華が咲きました。貌下にも非常に感激せられました。

由來同村は全村神徒で昭和の半まで題目の聲さへしなかつた此の海邊に今や除々に題目の華が開かんとしてゐます。是は九百五十年の昔共資公が初めて此地にトし後日蓮大聖人を出した爲であります。今や此の聖地を有する村民が擧つて此の由緒ある聖跡を永く保存すべく計畫をしてゐます。誠に喜ばしき次第であります。二十年前此地を壞して養魚池にせんとした村民が此に着眼し、永

諫

曉

く後世に傳へ廣く世に紹介せんとしてゐます。時機至らば此地に一寺を建立し、宗祖日蓮大菩薩への御報恩一端に供せんとするものであります。

参拜順路

△東海道線辨天島驛下車、村櫛行巡航船により約三十分
村櫛港に着、上陸約十町

△濱松驛前村櫛行乗合自動車、館山寺を経て約一時間
村櫛終点より約八丁

田邊正知

弘安三年十月八日、日蓮聖人寶齡五十九歳、身延山より鎌倉の四條金吾殿に御遺はしになつた『御消息』に次

の如く仰せられた。

弘長には伊豆國、文永には佐渡の國、諫曉再三に及べ

ば、留難重疊せり。佛法中怨の誠責をも、身には脱れぬらん。然るに今山林に世を遁れ、道を進めんと思ひしに人々の語、様々なりしかども、旁、存する旨ありしに依りて、當國當山に入りて、已に七年の春秋を送る。

即ち、日蓮は弘長元年五月十二日、四十歳の時、伊豆の國伊東へ流罪され、文永八年十一月、五十歳の時、佐渡の國塚原へ流罪された。斯くの如く再度の流罪を受けたのは、なんの爲であつたかを、今、弘安三年十月、五十九歳身延の生活より、振返つて見ると、外ではない、たゞ「諫曉再三に及べば」であつた、と追懷せられた。そして、まだその外にも大難小難の數へようもなく、重ねくゝの多難に遇ひ、今では漸くのことで、「涅槃經」の「佛法中の怨」と云へる佛誡より許しを得て、所謂佛使の資格が備つたと云はれたのである、

しからば所謂「諫曉」とは、何であるかといふに、北條幕府に立正安國論の採用を迫つた教化を指すので、建

治元年、五十四歳の時、身延の山で御撰述になつた「撰時鈔」に、「再三の諫曉」を數へられた。

外典に云く、未崩をしるを聖人といふ。内典に云く、三世を知るを聖人といふ、余に三度の高名あり。一には去し文應元年太歲庚申七月十六日に、立正安國論を最明寺殿（北條時頼）に表したてまつりし時、宿屋の入道に向つて云く、禪宗と念佛宗とを夫ひ給ふべしと申させ給へ、此事を御用ひなきならば此一門より事をこりて佗國にせめられさせ給ふべし。二には去し文永八年九月十二日申の時に平左衛門尉に向つて云く、日蓮は日本國の棟梁也。予を失ふは日本國の柱撞を倒すなり只今に自界反逆難とてどしうちして、佗國侵逼難とて此の國の人々他國に打殺さるゝのみならず、多くいけどりにせらるべし。建長寺、壽福寺、極樂寺、大佛、長樂寺等の一切の念佛者禪僧等が寺塔をば焼き拂ひて彼等が頸をゆひのは、まにて切らずば日本國は必ずほろぶべしと申し候了んぬ。第三には去年文永十一年四月八日

左衛門尉に語つて云く、王地に生れたれば、身をば隨へられたてまつるやうなれども心をば隨へられたてまつるべからず。念佛の無間地獄、禪の天魔の所爲なる事は疑ひなし。殊に眞言宗が此國土の大なるわざはひにては候なり、大蒙古調伏せん事、眞言師には仰付けらるべからず。若し大事を眞言師調伏するならば、いよ／＼いそいで此國ほろぶべしと申せしかば、頼綱問て云く、いつごろよせ候べき。予言く、經文にはいつとはみへ候はねども、天の御氣色いかりすくなからず急に見へて候。よも今年はずごし候はじと語りたりき。

此の三の大事は日蓮が申したるにはあらず。只偏に釋迦如來の御神、我身に入りかわらせ給ひけるにや、我身ながらも悦び身にあまる、法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。

即ち、文應元年七月十六日に初めて安國論を献じ、文永八年九月十二日に再びその採用を迫り、文永十一年四月八日に三たび安國論の採用を要求された、この事實を指

して「諫曉再三に及ぶ」と云はれたので、諫曉は安國論の實現を要望した師の指導であり、教化であり、その態度である。而もこの三諫や、我祖に取つては、生涯を捧げた救濟事業であり、その運動であつた。實際的救世家としての日蓮聖人その人から諫曉の二字を除去つたならば、重疊たる留難を忍受したことも、何等の尊味を加へない。徒に死生の間を往來し、猥に世間を騒がした一狂僧となるに過ぎない。法の爲めの犠牲、國の爲めの忍難とは云へなくなるであらう。

されば、宗祖の御一生は、畢竟「諫曉」を離れては存在しない。釋尊より「我が弟子」と云はれるのも、「眞の聲聞」と讃められるのも、「如來の使、如來の事を行するなり」と許されるのも、要するに諫曉の御修行に由るのである。従つて我祖の御門下としたならば、僧俗を問はず諫曉精神を持たないようでは、宗祖聖人の御前に出て、お目通りは到底叶はぬことは明らかである。



動もすると、古來から諫曉と諫言とを混じ「立正安國論」のことを天下諫言の御書と書いたものすらある。しかし、諫言は世間の道德行爲に屬し、諫曉は佛使の師導教化に屬する。二者の距離は頗る大きい、聊かの混同も嚴に慎まねばならない。即ち、諫言は臣下が君に對し、又は子が父に對し、君にして君たらざる時、父にして父たらざる時、臣下は臣の禮を踐み、子は子の禮を守りて君の行ひ父の行ひの、正しからざるを改めんとして、注言勸告することで、若しも聽かれざるときは、臣は身を退き、子は遂に父に隨ふことになつてゐる。その内、諫臣争子と云つて、諫はイサメ、争はアラソフと訓するが諫も諫争、争も諫争で、諫めるには争はねば、君の不善も、父の不善も、改めるわけに行かない。臣は臣の道、即ち忠道の禮によりて諫言し、子は子の道即ち孝道の禮を守りて諫言するのであるから、諫言は下の者が上の者に對して、兢兢として恐る／＼注言を呈し、勸告することで、要するに忠孝道德の範圍に屬する倫道に過ぎない。

然るに、諫曉は元と佛陀の佛弟子に對し、諫說曉諭されたるに名けたもので、諫言の如く、下のものが、上のものに對し、鞠躬如として言上するの謂ひではない。また諫曉の語は、宗祖創始の新しい専門語で、古書の内には漢籍にも佛書にもないのである。宗祖の御遺文には無論多々之を拜するが、第一に「開目鈔」には

又今よりこそ、諸大菩薩も、梵帝日月四天等も、教主釋尊の御弟子にて候へ。されば寶塔品には、此等の大菩薩を、佛我弟子等とをほすゆへに、諫曉して云く、諸の大衆に告ぐ、我滅度の後、誰か能く此經を護持し讀誦するや、今佛前に於て自ら誓言を説け。云云。とも、

二箇の諫曉提婆品にあり。

ともあつて、寶塔品の三度滅後の弘經をお勧めになつた所謂三箇の告勅と、提婆品の提婆の成佛と龍女の成佛を説いて滅後の弘經をお勧めになつた所謂二箇の風詔とを呼んで諫曉と云はれてゐる。これが諫曉の意味である。

即ち佛が弟子に向つて、説き勧め、諭したまひ給ひしより起つたもので、元と天台の文句に「流通を勧覓す」と註したところから、之を宗祖が改譯せられて、勸は諫なり説き勸むる義、覓は曉なり、諭し覓むる義とされ、以て諫曉の新術語を作り、寶塔品や提婆品の佛勅を諫曉と呼ばれたのである。また「觀心本尊鈔」に依れば、廣く教主の弟子に對する法華經の説法を諫曉と呼んでゐる。要之、此の語は師位のもものが弟子位のものに望むときの權威の語である。天子の一言を綸言汗の如しと云つて、絶對に臣民の犯すを許さざる如く、佛語の諫曉は佛弟子の絶對服膺に値するので、之を佛勅とも風詔とも呼ばれる。而して宗祖自ら佛の代理即ち佛勅の代行者たるを任じ、佛使の日蓮、如來使の日蓮として立ち、この資格から安國の爲めに立正を論じ、北條幕府に寄せて、國家に對し諫説曉諭されたのである。

されば我祖の諫曉は、自身を師位に置き、國家を弟子位に置いての教化運動であつて、敢て、臣日蓮として國

君國主に對する道德行爲を云ふのではない。説導者、開導者の師位を離れて、日蓮聖人の諫曉運動は斷じてあり得ない。

日蓮は幼若のものなれども、法華經を弘むれば、釋迦佛の御使ぞかし。
種種御振舞書

とも、

我身はいふに甲斐なき凡夫なれども、御經を持ちまいらせ候分齊は、當世には日本第一の大人なりと申すなり。
撰時鈔

とも云はれた如く、平民僧の日蓮にして佛使の大人を以て任ずるところに、その諫曉精神に、侵し難き權威と、抜きがたき金剛信とを見出すのである。



更に、宗祖の諫曉精神は、常に人間の國家に對する權威であるのみならず、人間以上の國神に對する權威でもあつた。即ち「種種御振舞御書」に
日蓮云く、各さわがせ給ふな、別の事はなし。八幡大

菩薩に最後に申すことありとて、馬よりさしをりて、
 高聲に申すやう。いかに八幡大菩薩はまことの神か。

とある如く、國神八幡大菩薩に對してすら、佛使の日蓮であり、師位の日蓮であつた。日蓮は諫曉する師位であり、國神は諫曉を受くる弟子位であつた。弘安三年十二月の晩年には、國神諫曉の爲めに「諫曉八幡鈔」と題し別に一書を作られたほどである。その態度、その使命、その識見の尋常ならざること、驚歎の外はあるまい。

況んや、人間の支配する國家に對する場合、なんで佛使の日蓮でなからう。師位の導師でなからう。『立正安國論』を獻じ「諫曉再三に及ぶ」と云はれた以上、武威に倣れる北條時頼も、時宗も、幕府の役人も、日蓮の識見の前には、諫曉される弟子位であつたことは、云ふ迄もない。蓋し宗祖の諫曉精神くらゐ、宗教家の權威を示して遺憾なきものは、他の佛教諸宗の宗祖開山達には殆んど匹儔するものを見出せまい。弘法は勿論、傳教大師にもせよ、法然、親鸞等何人と雖も、國神國家に對し堂々

正面から諫曉の態度に出たものはない。寧ろ彼等は權門に媚び、國家に阿諛し、貴族や武門の力を頼んで、己が宗旨の安寧繁榮を計るに汲々たるものであつたではないか。斯の「王法爲本」とか、「鎮護國家」とか、「興禪護國」など、稱する表看板も、實は餘りに見え透いた權勢迎合の哀れな記念の巧辭でしかない。茲に敢て其の理由を宣ぶる迄もなく、彼等の亡國的教義の第一義から推して、如何に附會を強いても、「思國」の看板を揚げるとは寧ろその心臓の強靱なるに啞然たるのみである。

兎まれ、諫曉精神こそは日蓮門下隨一の重寶であらねばならない。この精神の淺識と欠除とは、光輝ある「立正安國」の命題をして慘めな阿世の卑辭たらしむるに足る最も有力なる毒素であらう。



猶ほ、宗祖は嘗に國家國神に對するばかりでなく、内は弟子檀那に對しても、外は全世界に對しても、佛使であり、導師であり、父母であつた。即ち「一箇浮提第一

の日蓮」と仰せられ「日蓮の弟子は日蓮の如くせよ」と云はれ、また日本國の上下に對しては

自讃には似たれども、本文に任せて申す。余は日本國の人々には、上は天子より下は萬民にいたるまで、三の故あり。一には父母なり、二には師匠なり、三には主君の御使也。

經に云く、即ち如來使と。又云く、眼目也と。又云く日月也と。

その外、彼の有名なる『開目鈔』の三大誓願を拜しても何れも皆至高至烈なる諫曉精神の雄叫びである。

見よ、『立正安國論』には臣日蓮として國家諫曉を爲されたものではなからう。諫曉を諫言と混同し、佛使日蓮を臣日蓮として省ざるが如き惑者ありとしたならば、吾人は宜しく之を涅槃經の所謂壞法者として、大いに之を呵責し、驅遣し、擧處せねばならない。さうして佛法中怨の責を脱れねばならない。

思ふに、我祖の高風を慕ひ、その門下となれる人々は

時勢時局の常、非常の別無く、毎に徹底的諫曉精神に活きねばならない。

日蓮さきがけしたり、和黨共二陣三陣つどきて、迦葉阿難にも勝れ、天台傳教にもこへよかし。乃至佛の御使と名乗りながら、臆せんは無下の人々なりと申しふくめぬ。

種々御振舞書

即ち諫曉の魁は日蓮聖人その人であり、その門下一黨は二陣三陣の諫曉者であらねばならない。佛の御使と名乗りながら、臆せんは無下の人々なりと申しふくめられてゐる以上、先づ諫曉精神を把握し、その師位を高め、その權威を保ち、その識見を養はねばならない。

更に『四信五品鈔』に

請ふ國中の諸人、我が末弟等を輕んずること勿れ。

との御文を拜したならば、門下たる以上何人と雖も諫曉の師導精神に復活せずには居られまい。蓋し日蓮門下に於て僧俗共に諫曉の師導精神に覺醒するならば、教團の發展、日本國家の淨化安康、期して待つべきであらう。

醒めよ、諫曉精神に！

弘安當年の日本と身延、及び昭和現代の門下と日本とを對照凝視しつゝ、宗祖の諫曉精神に鈍慮を廻らし、謹

みて所信を披瀝して、祖山の鳳雛達に贈る次第である。

昭和丁丑秋

以上

結核克服に當りて

松 井 大 周

昭和九年正月に始まつた私と、眼に見えぬ微細な結核菌との死闘は、それから二年六ヶ月を経た去る七月十日大阪市立刀根山療養所の全快證明を以て一先づ終結を告げた。私を知る人々の凡てが、この抗争の成行を悲觀的見解を以て見守られたのも當然であつた。だが結果は私に凱歌が擧り、直接に間接に私を慰撫し、激勵し、心から私の恢復を禱つて下さつた人々の限りなき御厚情に應へることが出来た。

人生に於ける最も華々しい青春期の約三ヶ年を、凡そ

陰慘な病牀に過したのである。幾度か死に直面し、莫大な犠牲を拂ひ、筆紙に盡せぬ苦惱を嘗めた病生活は、この世界に觸れた人々にのみ理解し得る悲愴なる境地であり、顧みて多少の感慨を禁じ得ない。

特殊なこの世界に渦巻く幾多の問題の中には、吾々宗教徒の社會的役割に鑑みて、極めて注目し得る問題が尠くない。私自身の個人的闘病史は暫く措き、最も示唆に富むと認めた問題の一部を如實に摘記して、一應私の報告に代へよう。



現代の結核攻略戦線には科學の全部門が動員されて涙ぐましい健闘を續けてゐるが、宗教は未だ銃後に取殘されて呆然と之を見送つてゐる。尤も萬病唯心の轍を押立てた類似宗教や水を唯一の武器とする佛立講などといふ連中が、傍若無人に戦線に跳梁してはゐる。彼等は敵軍の性質やその防備の何たるかは固より、之を邀へ討つ味方の用兵、作戰已が本具の實力等はてんで御存じなく、反て味方の周到な作戰行動を妨害し、さなきだに長期に亘る戦闘を長引かし、味方を不利に導いて尙得々としてゐる。銃後の宗教は彼等の行過ぎを詰り、彼等は銃後の宗教の怯懦を嘲つてゐる。彼等が従軍の意圖及びその行動に非難の箇所が多々あるは贅言するまでもないが、彼等が第一線に立つ事が果して行過ぎであらうか。換言すれば結核戦線に關する限り、宗教はその活動の領域ではないのか。第一線に在て日夜惡戰苦闘する將兵達は、宗教そのものゝ活動をどう思つてゐるだらうか、這般の實

情を如實に傳へようとするのが私の使命である。



今現に皇軍は支那全土にその膺懲の矛を進め、幾多貴き犠牲者を出してゐる。然るに結核戰の犠牲者も殆ど大部分が春秋に富む青年男女である点、一脈相通するものがある。結核征戰の規模の大きさとその重要性を知悉する上に於て、此病死者と、實際戰歿の陸軍犠牲者と比較するのも極めて印象的で且つ有意義であると思はれる。

△陸軍戰死傷死病死者總數

日清役 一九、八七二人(約二ヶ年)

日露役 七七、二二四人(同)

滿洲事變 四、二〇〇人(約半年ト見做ス)

△本邦壹ヶ年結核性疾患病死者總數

約 一二〇、〇〇〇人

右の内(二〇才——四〇才、男子)

約 三六、〇〇〇人(約三割)

日清、日露兩役共約二ヶ年を要したので、各壹ヶ年で

はその半數で、之を自二〇歳至四〇歳男子壹ケ年間死亡者數と比較すると、

日清役 約一〇、〇〇〇人

日露役 約三八、五〇〇人

結核役 約三六、〇〇〇人

由之觀之、その犠牲數に於て、日清役の約三倍半、滿洲事變の約四倍半、乃木將軍をして山形改まると迄嘆ぜしめた旅順を始め、各地の戰に我國空前の犠牲者を出した日露戰爭と略同量の戰爭が、毎年この日本の國土に於て繰返され、その都度、參萬六千の壯丁がこの戰爭の犠牲となりつゝある。何と驚くべき慘害ではあるまいか。而もこの戰役は年を追ふて益々擴大し、何時平和の鐘が鳴るべくもない。此趨勢は陸軍壯丁検査に敏感に反映し非常時國防に任ずる軍當局を狼狽せしめ、所謂保健衛生省創設の直接動因となつたことは、諸賢の知らる所であらう。これでは皇軍構成の基礎をを揺せ、國力の消長をも左右するは當然で、その對策に重大關心を抱くべき

は獨り軍部のみでよいのだろうか。對岸の火事みたいに呆然と眺めてゐる宗教が、實は最も此の戰勝に役立つとしたら、必然的に長期戰となるこの結核克服戰に、門外漢と自慰してゐた宗教が、實は決定的な役割を演ずるものとしたら……。



世には精神力、信念等の立入る隙もなく瞬時に死に到る疾病もあれば、長期に亘つて勝敗の決せられるものもある。慢性と稱するものが後者に屬し、その長期に於ける精神力の如何が大いにその成績を左右することは想像に難くあるまい。こゝに初めて宗教が結核と交渉を持つこととなり、精神的宗教的領域が展開するのである。此疾患の長期性の理由としては次の二に要約することができる。

(一) 眞正の特効藥の絶無なこと。これは當然なことであつて、若しも茲に眞の意味の特効藥が存在したならば全世界數千萬の病者を立所に救濟し、結核問題の如きも

一瞬にして解消するのであるが、結核菌發見されて五十餘年、全世界科學者の心血を注げる努力にも拘らず、それは未だこの地上には現れてゐない。秦の始皇帝が東海の島に探し求めた不老不死の靈藥の如く、恐らくは永遠に出現しないであらうといふのが科學者自身の絶望的嘆聲である。

(二) 現在唯一の治療法であるサナトリウム療法（自然療法の長期性。

藥物を以てしては不治の業病である結核も、この自然療法に依る限り、最も確實に治愈し得る疾病の一種となるのである。然し乍ら此療法の性質上、征戦は必然的に長期に亘り、従て多大の困難が之に伴ふのである。このサナトリウム療法の推進力であり、この療法に不可欠の一要素となるものが宗教であり、又この療法の上に於てのみ宗教はその独自の妙用を期待し得るのである。

ではサナトリウム療法とは之を理解する前提としては非共結核病の本質を一瞥せねばならない。



一八八二年、獨逸のコッホが結核菌を發見してから從來謎とせられた結核の正体が、一種の傳染病と判つた。茲に於てチブス、コレラ等一般傳染病と同一範疇として扱はれ、従て豫防及び治療も専ら細菌學的方法の下に講ぜられて、此傾向は今尙長く尾を引いてゐる。だが結核認識の誤謬は、この一般傳染病と同一視する處に伏在するのである。即ち一般傳染病では感染は同時に發病となり、防疫は専ら感染を避ければ足るが、結核に於ては感染は同時に發病とならぬといふよりむしろ別物に齊しいことである。結核菌の感染は人類の普遍的現象で、この地上に棲息する限り何人もその感染を免れることは不可能だ。然し發病率は僅かに2%であるといふ現象は、結核病に於ては感染が發病の主要成因ではないことを物語る。では發病の主因は何か。身心極度の過勞に依る体内抗病力の激減と、これを醸成した生活環境の如何がそれである。爆彈を携へた便衣隊が既に城内に潜伏してゐる

のだ。身心兩面の過勞を自他俱に強請する青春期に、便衣隊蜂起の罅隙が生ずる可能性が多いのは當然であらう。是に於て豫防及び治療の原理が確立するので、而もそれは全く同一で且つ極めて簡明である。即ち生活方法の合理化に因て、体内抗病力をして常に結核菌より優位に保持しその蜂起の罅隙なからしめるのが豫防の要諦で、既に攻撃を開始した果敢なる結核菌の鋭鋒を抑へつつ、体内防禦力をして結核菌の優位に迄強化すべく生活方法の合理化を實行するのが治療の妙用である。

此要望を滿たし得る現今唯一確實な方法がサナトリウム療法である。抗病力の低減に因る全身的疾患てふ本質と之に因て導かれる豫防治療の原理とに鑑みて、此ナトリウム療法は唯一の治療法であると共に最上の豫防法でもあり、更に最も安全な総合的合理的健康法であり、一疾病の治療法といふよりむしろ健康的な生活法に近いといふことである。結核恢復と共に健康長壽の生活法を會得する所に結核療養の意義が存するのである。

◇ 埃及のミイラの肺臓に結核病跡がある所より考へて結核は紀元以前より人類を苦しめ來つたとみゆる。が、この恐るべき毒牙より確實に人類を救ひ得るサナトリウム療法の歴史は未だ僅々一世紀に滿たない。今より九十七年前、即ち一八二〇年英國に創唱され、獨逸、米國にて修補大成され今日の完成を見るまでには幾多先覺者の血の滲む貴い努力が拂はれてゐるのである。

ではサナトリウム療法とは如何。吾々の身体内には、何等醫療に依らずとも結核菌を包圍閉塞させる自然力が具備してゐることが解剖學上立證され、この自然力——一般に自然治癒力、又は自然良能力と呼ばれてゐる——を推進強化する事に依て治療の目的を成就する間接的方法である。即ち病勢増悪の凡ゆる原因を除去し、身体の安靜に依て病菌の活動を抑制し、新鮮な戸外の空氣中に生活する事に依て全身の機能を旺んにし、豊富なる滋養食に因て榮養の恢復を計り、更に適當の時期に至つて秋

序的運動に依て体力を鍛へるといふ、一見何等の新奇もない平凡迂遠なる消極的戦法かにみゆる。

病勢増悪の凡ゆる原因、安靜の効果とその方法、新鮮清純なる空氣とは如何、而してこの空氣を晝夜四季を通じて呼吸する方法、食料の精密なる榮養學的研究と最も効果的な攝取方法、蹉跌の危險を避けつゝ敢行する運動の種類と方法、更に日光浴、大氣浴、各種強健法、健康的住居設備の研究、各種不快なる症狀を除去する對症藥物、療法の研究等、凡そ動員し得る凡ゆる方法に亘り、現代科學の精髓を傾けて驚くべく精密な研究が累積されてゐる。之に依て蒸溜された最も適切有效な方法を實行に移しつゝある道場がサナトリウムである。假へ病者に非ずとも此方法を實行すれば体力向上に著効を收め得るは想像に難くあるまい、サナトリウムに之を奉ずる病者が、果してこの科學の命に忠實であり、科學の豫言する好成绩を擧げつゝあるであらうか。前記刀根山療養所——本邦最古最大の公立療養所、入院患者約壹千人、設備

に於てほど理想に近い——に於ける十ヶ月に亘る私の豊富なる見聞に徴する限り、科學の懸命の努力に拘らず多くはその約束と期待とを裏切りつゝあるかのやうである。科學は苦戰してゐる。



一見してわかるやうに、此療法は一舉に敵の牙城を衝いて、立所に敵軍を殲滅するといふ日本人向きの速戰法ではなくて、ジリ／＼と敵軍を壓迫しつゝその牙城に閉塞し、城の周圍を十重二十重に包圍して、徐ろに城兵の自滅を待つといふ兵糧攻めの長期戰術である。世界廣しといへど支那軍の自負する如く、長期戰術を得意とする軍隊はあり得まい。必然的に各方面に疲弊困憊を遞増するからだ。自然療法が短時日を以ては寸効も奏せず、尠くとも壹ケ年以上の長期間持續して初めて偉功を期待し得る戰法であることは、その各種の武器に照して明瞭だ。方法は平明であり、効果は偉大であつても、之を實行に移し、究極の勝利を收め得るには、實際上絶大の艱難を

克服せねばならぬ、今現に肉を蝕み臓を侵し、吾が生命を脅かしつゝある病菌の猛威の前に、この一見迂遠なる自然療法を以て冷靜を持し得やうか。

科學の豫言を確信しつゝも、焦燥の念は如何せん。而も敵は前面のみではなく、溺るゝ者は薬をも掴むてふ焦燥輕信の病者の心理に付け入て凡ゆる誘惑の魔手が延びてゐる。偽而非特效薬、特殊療法が本邦全新聞紙に年概算四百萬圓の廣告料を貢ぎ、手を替へ品を變へて、甚しきは皮肉にも自然療法の假面を冠つて、さなきだに亂れ勝ちな病者の理性を感亂する。

『僕の運命は目下の場合一頓坐した、先には洋々たる春の海の如き希望もないではなかつたが、今や暗雲悲風前路を壅塞するような感覺なきにしもあらずだ。千思萬量なんだか無暗に心細くなる』これは憧れの海外留學を壹ヶ月の後に控へて、咯血の病床より獨逸キールなる姉崎氏に送つた樗牛の書信の一節である。之は獨り樗牛のみではなく、幾十萬青年男女の感慨であり、鬱勃たる功名

心を抱きつゝ病床に横はる若人に取て、移り變る四季の風物と共に、空しく過ぎてゆく青春の流れは、最も耐え難き苦痛である。その間拂ふても拂ふても、まつはり來る死の影像は、絶えず恐怖と懊惱をかきたてる。而も後方より送り來る兵糧彈藥は日と共に薄れゆく。最も心強い銃後の精神的慰問袋は途絶える。かくして戦線に春が過ぎ夏が逝いて蕭々とわたる秋風に嗽々たる幻滅の胡笛を耳にしては、多感な若き兵士達は、どうして心の安靜を持し得よう。サナトリウム療法は肉体の安靜は教へても心の安靜は説かない。物質醫學に立脚する該療法にどうして心の安靜を期待し得ようか。四面楚歌の中に在て若き結核の戰士達は、敵彈に傷く前に多くは自ら精神的に斃れてゐる。醫學は、撫然として之を見送るより外はないのである。進歩的醫學者の『病氣そのものより、それを苦に病む被害の方が遙に大なるものがある』といふ悲痛な叫聲を外に、現代醫學は、サナトリウムからこの心の安靜を閉出して而も自ら苦戰してゐる。心の安靜な

き處、どうして身体の眞の安靜が求め得られやう。現代の自然療法がこの重大な一面を等閑に附する限り、幾多先人の苦心の結晶にも拘らずその本來の妙用を期待し得ないのも當然である。されば看過されたこの廣袤たる精神的領域の開拓せられた時が自然療法完成の黎明を告げる時である。



精神力介入の餘地なきかに見ゆる空中戦に於てすら、精神力が如何に偉大なる効力を發揮するものであるかは今次事變の明證するところだ。疾患に抗争する勇氣を喪つた者にどうして最後の勝利が得られよう。既に結核症の本質を知り自然療法の要領を知悉した上は、自己の周圍に必然的に湧起する凡ゆる精神的重壓を、長期に亘つて反撥し得る精神力を持つか否かごその全成績に決定的役割を有つ。己が生命の延長を欲求し、加へられる危害より敢然と之を護らうとするのは凡ゆる生物の普遍的本能で所謂闘病心は何人も之を具有してゐるのだが、この

單なる闘病的精神力を以てしては、結核の如き長期重壓を支へ得べくもない。小酒井不木唱ふる所の闘病術——生きんとする意志——の結核の前に如何に無力であつたかは、不木博士身を以て證明する所である。凡そ生きとし生ける者誰れか『生きんとする意志』無きものがあらうぞ。而も此本能的闘病的精神力が結核の長期重壓に抗し得るには、尠くとも次の要件を具備せねばなるまい。

- (一) 死の脅威に對する耐久性
- (二) 凡ゆる艱難に對する能動的彈力的強靱性
- (三) 永續性
- (四) 平和的安定性 等。

凡てのサナトリウム療法實行者の精神力に、容易にこれらの要件を注入し得る方法があるとすれば、心の安靜も立所に實現し、自然療法はその所期の偉効を奏し、喘ぐ人々をして速かにその惨苦より救出し得るに相違ない。されば生死解脱の道を説き、凡ゆる艱難に慈悲の觸手を教へ、永遠の生命を自らの内に明し、現實の世界に寂

光の相を示して安心立命を與へんとする宗教が、最も此の要望を充し得るは私の贅言を待つまでもない。

眞正なる宗教がよくこの自然療法の不備を救へば病者の肉体的恢復と共に精神的新生をも期待し得やう。かくて宗教は物質醫學の欠陥を補ひ、眞正なる醫學と宗教を寡る類似宗教の謬りも正し得て、その社會的矜持をも満足することが出来るのである。



宗教に依りて自然療法を完成し、肉体的恢復を期すると共に、健康的な生活法を會得し、更に陰慘の病牀を轉じて寂光の實土となし、新しく強き生活への推進力を獲得するのが、結核療養の意義である。

從て病者の宗教への關心と努力は極めて眞摯なるものがあり、形式的宗教は到底彼等の燃ゆるが如き渴望を満足し得ないのみならず、何等その精神的支柱とはならない。樗牛の日蓮上人研究も彼の文學的興味よりなされるものではなくて、『此英雄の生涯により吾等の弱き命の強くな

るように』即ち病漸く重く、多年憧れの海外留學の斷念に依て精神的支柱を失つた彼の眞剣なる宗教力への欲求の現れである。かくて宗教が人間生活への強き力を與ふる限り、永へに人類の光と仰がれるであらう。

凡そ宗教が人間生活の底流である以上、如何なる部門にもその活動の領域を發見することが出来るのであるが本來の役割に鑑みて、最もその開拓を要望せられ、最もその活躍を期待し得る新分野の一つとして結核問題の存在を報告するに止める。如何に開拓すべきは吾等の共に考ふべきところである。結核の本質とその療法の輪廓を詳述したのは、類似宗教の轍を履むを惧れたからである。この粗雑なる報告が、國家的問題化しつゝある結核に對する諸賢の再認識へのよすがとなり得れば正に望外の欣びである。

筆を擱くにあたりて、發病以來限りなき御厚意を蒙りし各方面へ衷心より感謝の意を捧ぐ。

如何に生く可き乎

宇佐美鍊昌

耶蘇は『空飛ぶ鳥に埒あれど人の子の吾れに宿なし』と叫び、宗祖は『日本六十六箇國島二つの内に五尺に足らざる身を一つ置く所なし』と述懐されて居る。それは悟り切つた聖者でさへ余りにも痛々しい人生悲劇であつたに相違ない。況して我等凡夫が寝るに宿がなく働けど働けど充分なパンも得られないとしたらそれは切實な人生苦であらねばならない。

ユーゴーの名作『レ・ミゼラブル』は語る、空腹に耐えかねた青年、ジャンバルヂャンはたつた一片のパンを盗んだが爲に拘引され、これが動機となつて終に大罪人となり果て社會の暗黒面にたゞき込まれることを。併し我々は此の小説を只一篇の物語と観てはならない。現實は如何に多くのジャンバルヂャンを生み出し彼等を社會の一

隅に葬つて行く乎。我等は暗膽たる許りである。然しながら金殿玉樓に歌詠亂舞し錦繡を纏ひ飽食する者にも脱し得ぬ悩みはある。愛を失つた悲み、病の苦、去り行く青春の悶、死の驚愕等々枚舉に追がない。望ち月の缺けたることなしと謳つた藤原氏も衰亡し、一人で萬里の長城を築き上げた豪邁な始皇帝は不老不死の妙薬を求めやうと苦心したが終に死の魔手を逃れ得べくもなかつた。

げに生くことは苦しい事實である。斯くて人々は如何に生く可き乎といふ人生課題を眞剣に考え其の謎を解かんと努力した。そして人々は其の課題に答へ得る世界を宗教に、藝術に、戀愛に、享樂等々に求め續けた。斯く人により求むる對象はそれ／＼違ふかも知れないが其の對象を通して幸福を求むるといふ点に於ては萬人共通で

あつた。然し求めよ與えられんの垂訓通り易々と幸福は我等のものとはならなかつた。

近世、科學の發達は急速な進歩をなし確かに人生生活に多大な貢獻を齎らした。これに依り人々は科學の世界こそ我等の求むる絶對唯一のものだと信する者も續出した。科學は飽迄人間の知識に依つて文化現象、自然現象を究明しその所産として人生社會を有益にした。

然し如何に優れた科學と雖も永生を望む人間の根本慾望を満たしては呉れなかつた。宇宙の無限に較ぶれば人間の一生は余りにも儂ない槿花一朝の夢に過ぎない。靜かに思索冥想すれば如何に現實が幸福でも眞の満足を得られない。現代は只往昔の如く生老病死の四苦のみではない。前にも述べし如く生活苦の目前の悩みがある。正に苦の二重奏である。爰に我等は科學のみでは永生の幸福を求め得られない事に想到した。

今夏、身延山夏期修養會に於ける法主猊下の訓話中、科學を評した適切な例話を拜聽した。曰『西洋の或る科

學者が左の如き宿題を學生に提示した』

『諸君は家庭に歸つたなら母親の流した涙を分析して余に示せ』と。學生はそこで時を得て母が子供の爲に流した涙を分析して先生に答へた、曰『鹽素と水素の二元素のみ』と。其の時、先生は莊重な態度を以て學生に教訓したのである。

『諸君！人の涙は科學的に分析すればそれは諸君が實驗した通り洵に簡單な二元素にすぎない。然し吾等が科學の領域を岐れて考えて見た時、世の慈愛深い母親が子供の爲に流した涙は單なる鹽素でもなければ水素でもない。それは吾々が測り知る事の出来ない深い愛情の含まれた尊いものである。涙に含まれた原素は物質的には安價なものであるが其の母の尊い愛情に於ては千萬圓と雖も購ふことは出来ない』と。

此の挿話は科學の世界を超えた所にも微妙な人生生活の奥所のある事を物語るものである。此の人生の奥所に潤ひを與へ解決の手を指しのべるのが宗教である。宗教

は闇の中から光を、苦惱の中から歡喜を見出し出す人生最高の安息所である。レーニンは『宗教は阿片なり』と罵倒排撃したが現在ソヴェットの民衆はレーニンの銅像に類き香華を焚いて宗教的禮拜をなし隨喜渴仰の泪にくれてゐるといふ。世の無宗教主張者よ！此の大きな矛盾をなんとする。現實の姿は否定すべくもない。

カントは『信仰に地位を與へんが爲に智識を止揚せざる可らず』と述べ、シュライエルマツヘルは『宗教とは絶對依憑の感情なり』と言つて居る。茲に儼として諸科學と宗教の分歧が存する。

現代一般インテリ階級にとつて理論を超越し思惟から離れた世界を肯定する事は許されないかも知れない。然し微妙極まる人生に於ては只理論や智識では忖度するを得ない事實が余りにも多すぎる。茲に我等は現實を肯定し且未來に生くる所謂永生に住し人間本然の叫びに應じ得るものこそは宗教であると確定しなくてはならないあらゆる苦を脱せんとして想到した如何に生く可き乎と

如何に生く可き乎

いふ人生課題に於て我等は宗教生活に生くることこそ生く可き方法であり最後の生活態度であると決論したい。『現代の英雄』それは宗教に依つて甦つた後半世に於ける、ジャンバルジャンの男々しき姿でなくてなんであらう。斯くて得られた宗教信仰は我々の生々しい生活の息吹の中に織り込まれては日常生活の一舉手、一投足皆之れ歡喜の焰となり法悦の光となつて憎惡、悲泣、苦惱を燒盡し人生永遠の常闇を照すであらう。

要之、我等は一部の科學者、哲學者が築き上げた唯物史觀的人生では満足が出来ず理想主義の世界、就中宗教のもつ理想郷への眞實一路の白道をたゆみなき努力を以て歩み続けよう。

樂土建設への歩み

——祖山學院雄辯大會優等第二席賞受領——

高等部二年 香 川 是 光

諸君！

現代に生息する我等に取りて最も切實に考へしめられる問題の一つは吾人等の世界の人文的將來であります。

人文的現象なる故唯自然の運命として斯く行くべしと斷定する事は出來なく、人間の力・人間の理想によりて斯くあらねばならぬと云ふ目的と努力が生ずるのであります。而らば日蓮主義の實義はこの世界の將來に對し如何なる指導原理を示してゐるでござらませうか。日蓮主義の宗教は一言にして云へば世界樂土の建設を目的とし一闍浮提に妙法流布し娑婆をして眞の寂光土への實現が日蓮主義主張の眼目であります。

法華經勸發品の於如來滅後闍浮提内廣令流布使不斷絶

の金言本化上行再誕吾祖が常に法華經の舞臺としての闍浮を主張し三大秘法悉く一闍浮提を自指してゐるはこれ即ち日蓮主義宗教の最後の目標は一闍浮提、吾等の世界の法華經化にあるを示せるものであります。而るに古來より幾多の宗教が已が宗教をあらゆる人類に信仰せしむべく努力し、傳道せしも皆その結果は一勢一衰、遂に宗教的統一と云ふことは云ふべくして行ふべからざる空想也と考へる傾向を生むに至つたのであります。然し乍ら諸君、世界全人類擧げて一つの正しい信仰に歸入せしむる事が出來ないと云ふ理由は何處に有りませうか。否——日蓮主義の宗教は如設修行抄の『天下萬民諸午一佛乘となりて——萬民一同に南無妙法蓮華經と唱ふる時』そ

の時を招來せねばならぬのであります。これ日蓮主義宗教が如何なる宗教をも爲し得なかつた大事をなさんとする別頭佛教たる所以であり、一天四海皆歸妙法の宗教たる所以であります。而らば世界を目標として開展する法華經化の實行運動は世界の何處を心棒として車を廻轉すべきやと云ふに事物展開の順序は必ず先づ以て其の急處中心より始まるべきであります。

これ吾祖が宗旨建立の基礎原理たる宗教の五義よりして、日本と法華經との切つても切れぬ關係を會談せられ『世界とは日本國也』と『又日は東より出で、西を照らす、眞の佛法必ず東土日本より出づべき也』と世界の急處中心を示し、法華經を全世界に流布するに先き立ちて先づ日本國を法華經の國とし法華經の本部を此の國に置き機能を世界中に押し弘ろめんと絶叫せられし所以であります。

眼を轉じて今我々は現實の世界を觀察し深くその將來を思ふ時、今や佛教の精髓たる日蓮主義の宗教を、をい

て世界の將來に對し堅固明確な指針を示し、今後の一切衆生を支配する信仰は無いと確く信するものであります。更に角度を變へ日本國の將來を考へる時に、日本建國の理想は日蓮主義の深遠なる教理に依りて原理付けられてゐるを痛感せざるを得ないのであります。明治維新以來六十年の短時日に於て日本が文明並に國際間に於ける位置は、いやが上にも高められ、今や全世界をリードすると云つて決して過言で無いまでに進歩し向上したのであります。先きに東洋否世界平和の爲に滿洲國の獨立を助け王道樂土を東洋の一角に出現せしめ、今又支那事變に於ける支那四億民の樂土建設への一殺多生慈悲の利劍を揮ひつゝあるは、世界文化史上重大なる意味を有してゐるのであります。これを單に日本の武力、經濟力によりてのみ爲され又爲されつゝあると考へるは大きな誤りであります。この力こそ日本を今日あらしめし偉大なる原動力、日本精神の正義の觀念が底力を發揮したるものにして、この道義の發露が世界の將來に及ぼす影響は想像

に余りあります。今や朝野舉げて國民精神總動員が叫ばれ、これが具体的に實行されつゝある今日、日本國民がこの日本精神の昂揚の上に更に日蓮主義の正しい信仰によりて人生國家の眞意義を堅持し、これを實踐躬行するならば其の力は幾層倍となりませうか——宗教的信仰の力が如何に驚ろくべき事業を爲すかは過去の事實に於て決して其の例乏しく無いのであります。日本全國が大信仰によりて統一せられ、王佛冥合の本門の戒壇建立し宗教的目的が直ちに國際的指導原理として運用せられし暁、世界に投ずる影響、衝動や如何に。法華經の教理日本國体の道義と云ふものが天地の絶對的眞理であり、その人類救済の道が大公至正、大慈悲心の發露であるならば一切の人類がこの眞理と公正と大慈悲心の前に永久に同化し得ないでありませんか。即ち諸君、地上の樂土は空想に非ずして顯現の事象として建設せらるべきであります。

即ち、諸君日蓮主義宗教の安心とは世界樂土の建設成

就を信じ、寝ても醒めても之れが達成に全力を盡すと云ふ處に無限の勵み、無限の力が湧き勇氣と活力とに充ちくたる生活が營なまれるのであります。

想起せよ諸君、折伏逆化の法鼓打ち鳴し世界樂土建設の大理想實現の爲に勸持品色讀の吾祖六十一年の御生涯をば。今又東洋平和の爲に、友邦支那民衆の樂土建設へと北支に上海に正義の劍を揮ひつゝある尊き皇軍の姿をば。

最後に諸君、立正安國異体同心の祖訓を奉ずる吾等は世界樂土建設へ世界樂土建設へと確實なる歩みを一歩一歩ふみいだそうではありませんか。この雄しき樂土建設への歩みこそ國難に處する佛徒の使命なり、國是たる國民精神總動員の叫びに答へる眞の宗教家としての務めなりと絶叫して降壇するものであります。

—十月十六日公會堂にて—

時局と立正安國

——祖山學院雄辯大會優等賞杯受領——

中等部五年 米 村 智 淨

盧溝橋一發の銃聲は極東亞細亞に血腥い風雲を引起し年來叫ばれてゐた非常時日本は爰に一轉いたしまして、

戰時体制へ突撃したのであります。隱忍自重充分培つた皇軍の實力は、向ふ所敵なく、到る所日本精神の花は咲き、曾つての爆彈三勇士を凌ぐとも、劣らざる勇壯果敢な肉彈戰は隨所に繰り擴げられております。

銃後の國民又よく一致團結し、それらの赤誠は尊い千人針となり、或は献金となつて、涙ぐまじき迄に興奮の坩堝をかきたてゝおります。今や空理空論の安價な思想はかなぐり捨て、正しき認識と、強き行動を以て眞一文字に進まなくてはならない秋であります。緊急の場合に於て最もつゝしむべきは、枝葉末節に拘泥する事であ

り、進んでなさなければならぬ事は、最も根本的な一線を死守すると云ふ事でありませう、

爰に我等は宗祖の立正安國の眞精神を色讀するものとしたしまして、如何なる役割を果さなくてはならぬかを決悟しなければならぬのであります。曾つての上海事變に於ける直接導火線が日蓮主義を撃鼓宣令する法師に對する迫害致死であつた事を想起しました時、日蓮聖人によつて提唱された立正安國の指導精神は、六百五十有余年の歲月を母胎として、愈々實質線上に躍りいでたものと見なければならぬのであります。撰時鈔の發頭に於きまして「先づ時を習ふべし」の聖訓を拜しました我等は「今や正に是れ其時なり」の感を深うし、日蓮教徒

の獨占舞臺に亂舞しなくてはならないのであります。

謂ふ所の根本的運動、即ち正しき認識の上に立つた日蓮主義の運動、堀り下げていふならば立正安國の精神運動こそ、我等教徒のなさねばならぬ最大要務であります。

これ即ち銃後に於ける日蓮門下の使命であり、君に忠であり、宗祖に奉仕する所以のものと確信する次第であります。然しながら、立正安國とは單なる文字であつてはならないのであります。金殿玉樓の床の間を飾る額であつてはならないのであります。それは大衆の中にあつては生活の息吹の中に織りこまれては歡喜と安住の泉となり、國家にあつては國威顯揚の指導原理となり、世界にあつては四海同胞の人類愛の基調とならなければならぬのであります。これを要約すれば、社會正義と國際正義の根本思想となるのであります。我々は墮落せる葬式讀經、佛教の形骸を蹴飛ばして、爰に生ける明朗な潑刺たる佛教運動に参加しなくてはならないのであります

「日蓮が弟子檀那は臆病にては叶ふべからず」。よし此

の運動の爲に我等は生活をおびやかさるゝも、命危しとするも、それは只天諸童子以爲給仕の金言を信じて、躍進をつどけなくてはなりません。彼の東洋の聖雄、ガンヂーのあの熱烈な愛國運動を見よ。今や印度三億の民衆はガンヂーの爲に生き、彼の爲に死す決意を以て、貪婪飽なき英國の重き鐵鎖に足を引きづりつゝ、鞭打たれながらも、無抵抗主義の抵抗をつどけてゐるではありませんか。彼等三億の民衆は劍をとりたくも現在の處それは出來ないのであります。武器は勿論、大きなナイフでさへ手に入らないといふ有様であります。然し乍らガンヂーの精神は、たとへガンヂーが死すとも永久に印度民族の血の中に止り、成長し、やがて幾年かの後には、世界歴史に特筆大書さるべき聖なる復讐戰を展開するに相違ありません。仄聞する所によればガンヂーも法華經を信じまわらぬ舌をあやつり乍ら題目を唱へて居るといふ事であります。されば吾人は光は東方よりの掛聲も、近きにあると信じて疑はないのであります。

我等は爰に於て、立正安國の指導精神を植付けて先づ東洋の獨立平和を獲得しなくてはならないのであります。暴風の後に風が來る様に、先に上海事變は好轉して、日滿の友邦關係を生じ、今時盧溝橋一發の銃聲はやがて北支に明朗な交歡の爆笑の響と變る事でありませう。

要之、立正安國の指導精神は東洋の平和、牽いては世界平和の根幹となる事を信じ、今や時來るの秋、我等教徒よ奮起せよ、我等教徒よ奮起せよと、吾人は高く／＼絶叫して降壇する次第であります。



文 藝

病 む

岡 村 教 正

いたつきはいつ癒ゆるらむ夜のふけを時雨は雪となりたるけはひ
寝つゝ見るをちの高山うす暗く蔽ひ來るなり雪降るらしも
肉の痛み寝つゝすべなく耐へてをりところに觸るゝ夕しぐれ雲
街道の夕べつめたき北風に吹かれてバスの來る間をあゆむ
山里は松の内より谿々に杣の手斧のひどき透れる

歸 省

みちのくのみふゆの山に時雨ふる夕べは弱き身をぞなげかむ 福島先生より
はたれ残る山低く覆ふ雲寒し岡村正雄氏思へばかなしも 熊谷利道君より

ひさびさに聞くさと訛りひんがしの磬梯山は明けしらみつゝ
老いらくの父が手飼ひのカナリヤの聲すがすがと朝床に聞く

小鳥飼ひ鉢植を樂しむこの頃の父よまことに老いていませり
宵のほど風呂焚く吾れに聲かけて下士斥候か過ぎゆきにけり
斑雪野は霧のまぶかく垂れこめて伏したる兵ら未だ動かす
この路も幾年ぶりか陰町の翁館屋はそのまゝにあり
微笑みて吾がまなかひに浮び來る集ひなりけりたど歸りたき
(身延歌會寄書)

岡山に遊ぶ

落ちつけぬ幾夜か經たり背戸に鳴く蛙のこゑは家思はしむ
すがすがと雨にぬれつゝ芍藥のいま四五日は咲くべく見えぬ
吾が髯を剃る娘子の岡山訛り聞きつゝうつゝまどろみにけり
夏來なばすがしからむとのらせしが梅檀の芽の顯あらわちて來にけり
(齋藤先生に)
二三日臥れば遠き母こほし松の枝に來て鳴く雀らよ
わか葉影たゝへてふかき朝庭に咲くべくなりぬ榴柑の白花
蘭草田に露の光れる野のうちを單衣すがしみ遠來つるかも
蘭草田はくがねの露をふゝみつゝこの明るさに涯しなく見ゆ
棕櫚の實は風に揺れつゝほろほるとこぼれて片寄る庭土の上
かにかくに假の住居にやすらぎて培ふ背戸の胡瓜は伸びたり

朝雨に濡れつゝ庭の南天の花まさやかに白かりにけり
はづかなる庭の空地にトマト植ゑ仲びゆくほどに住まひ馴れつゝ
朝まだき經誦むさへやすがと山あぢさゐの眼に泌むる色
これの世のはかなき思ひ朝床に目醒めて吾れのなしといはなく
刈急ぐ蘭刈人らのむれたつを夕燒雲はうつろへにけり
驟雨清しけれども蘭草濡れゆくをあせりにあせり取りこむ村人
ひそやかに秋立ならし朝吸あしたふ味噌蜆汗の舌にさやらふ
またの日はいつと思ひしが斯くは今日登りつゝゆく吾わがをうたがはず
(身延にて)

支那事變

千人針とみに殖えつゝ御さわがしなにか追はるゝ思ひにて行く
上等兵吾れに寄留を急げとてふるさとの父ゆ便りつきたり
夜くだちて蟲音は徹れますらをら修羅戰場に思ひ深からむ
寄留届すませし心ゆとりには未だ來ぬ動員令した思ひをり

雜 詠

田 村 孤 雪

幌出でし伯母の笑顔やお年玉
探梅や垣越へ入りて叱らるゝ
花の雨あなどり難くなりけり
水車踏む裸に笠や炎天下
忽然と蛋あらはれし本の上
秋風やめしひが檐の古き鈴
縫ひ上げて長き夜親し手紙かく
唐 黍 に 提 灯 吊 る し 在 祭
日向ぼこ抑へし怒りいつかなし

學友の入營に

日 蓮 の 魂 う け よ 入 營 子

晴曇

後藤康信

群青の空を染めぬき日章旗鳴りはためくも強き北風に
血も臭はむ戰場に兄の立ちませる幻の見ゆ秋の月の夜
言の葉のふと止絶へたる一瞬にこの大いなる哀しみは來ぬ
酷寒は戦場の土も裂くといふ現身の兵は何程ならむ

×

薄日洩る机に寄りて我が心書かむとすれば想ひのみ充つ
假名文字の母の便りを判じ讀む眼はいつか涙溢れし
鉛筆の指先をもて幾夜経つしたゝめしならむこの母の便り
晴曇の變りはげしく幾日かこもらひつ降る霜月の雨
話しすればそれぞれの言葉みな重き響をもてる霧海の夜
朝露に重くしとりて庭狭に大輪の菊は交々咲けり
かゞよへる花瓣の露もふるゝかにかうべをよする黄菊と白菊
秋日照る道に幼な兒は糸もちて落ちし紅葉を刺し重ぬるも

厚德寮斷章

寮 附 住 人

厚德寮が圓頓寺平賀僧正の扶宗護法の念と、特に厚い教學に對する理解のもとに此處東谷智教房跡に創設されて早くも五星霜。その昔西谷に松木先生の手に依つて建設された西溪寮の昔から數へれば、十三年を經過して居る。光陰矢の如きに譬ふれどもなほ夢のやうにしか思へぬのである。本年は創立五週年に際し色々と催をしたいと張切つてゐたのであるけれど、時局に勘みて小旅行と記念の葉をこしらへただけで、たゞ内輪の祝賀に止めて置たことは残念のやうでもあるが、また却て意義の有つたことゝも考へられるのである。教頭先生を始め前舍監である今村先生、松木先生、中條先生の五週年を祝しての玉章は、身延山に於ける寄宿舎の一大歴史を物語つてなほ餘りある尊いものであつた。たゞに我等は淳良なる寮風の確立を目的に、自肅自戒、以て五週年を意義あらしめむと念願するものである。

○ 自然の莊嚴に眼も魂も奪はれてしまふ紅葉の靈域、耳を訪づれて來るものは法鼓唱題の音のみ、實に寂光を髣

髣させる有難いみ山である。而も其處に安住所を得て日々夜々大聖人の御教を三業に修行することの出來ることは何と云ふ限りない法悦であらう。現在寮生は六十二名福島、林兩先生の膝下に和氣霜々裡に各自の本分に精進して居る。先日、武内觀良、田口榮治の兩君を名譽ある出征軍人として我が寮から出したことは、また厚德寮に取つてもこの上なき榮譽でなくてはならない。

○ 毎日の生活は、午前五時起床、本山朝勤出仕、其以外の者は六時より内外の清掃を行ひ、七時朝食、八時より午後三時迄は登校學業に就き、夕食五時六時半より自習時間、九時点檢を受けて十時漸く就寝するのである。かうした激しい晝夜常精進の中にも、また楽しいものは新しい知識に遅れ勝ちな我々の唯一の慰めである岡安氏寄贈のラヂオである。其の他閱覽室の各新聞雜誌や、ピンポン、砲丸等の娛樂機關等に寮生はうるほひを求めて將來なすところある宗門人としてのスタートに準備をしつゝあるのである。

校友會々報

祖山學院開設以來全國に散働せる本學院在籍者の數は優に千を越すであらう。毛利氏ではないが現實の社會を動かすにはどうしても團結の力が必要である。すでに東京大阪中國の諸學兄は團結の力を認め校友會支部を結成して爲宗爲國不惜身命の聖訓を如實に實行してゐるといふ事である。かように支部が結成せられたのにもかゝらず未だ本部が明瞭でなかつた事は實に遺憾であつた。おくれればながら昭和十一年の秋とりあへず身延在山の會員が惠善坊に集つて本部の會則を創作訂正し更に會則にのつとり五名の常任幹事を選擧しこゝに本部結成の第一聲をあげたのである。いよゝ本部を結成してみると第一考へさせられたのは本會の事業を何によつて運轉して行くかと云ふ事であつた。それは云ふまでもなく經濟力である。しかるに本部には何等の經濟力もなかつたのである。經濟力がなければ何もできない現代に生れた我

等は幸か不幸かわからないが、こゝで本部結成第一の難關にぶつゝかつたのである。今年から身延中學林を新設したので學生間には同窓會基本金をどうするかと云ふ問題が擡頭してゐた。時恰も四月初旬萬葉の櫻咲き匂ふ頃母校には例年同窓會大會が開かれた。俄然基本金問題が勃發した。遂に基本金七百圓は校友會へ移管し永久に記念塔として残す事に確定し大團圓となつたのである。

會報も今年度より發行したいと念願してゐたが成立も淺く會員諸兄の動靜も知るによしなくわづかに會則を發表し、來年度からは大馬力をかけて會則通り會報を發行する豫定である。會報は幹事の會報でなく皆様御自身の會報だから支部や諸兄の動靜近況御住所等をハカキで結構ですからは是非知らして頂きたい。

常任幹事 樋口是端 松木本興 遠藤是雄

林 是幹 岩田堯親

學生幹事 小崎龍雄 田中泰勵 難波智龍

祖山學院校友會々則

第一條 本會ハ祖山學院校友會ト稱シ本部ヲ祖山學院ニ

置キ支部ヲ各地ニ置ク

但シ時宜ニヨリ本部ヲ支院ニ置クコトアルベシ

支部規則ハ支部ニ於テ定ム

第二條 本會ハ祖山教學ノ振興ヲ期シ祖廟中心ノ宗風ヲ

宣揚シ以テ會員相互ノ親睦ヲ計ルヲ目的トス

第三條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス

一、名譽會員 學院教職員タリシ者

二、特別會員 學院改稱以前ノ祖山出身者

三、正會員 祖山學院ニ學籍ヲ有セシ者

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、顧問 若干名 祖山關係者中ヨリ役員合議ノ

上推薦ス

二、會長 一名 會員中ヨリ役員合議ノ上推戴

ス

三、幹事 若干名 各支部長

四、常任幹事 五名 身延在山ノ正會員中ヨリ五選

シ内一名ヲ會計幹事トシ、任期ヲ二ケ年トス

但シ改選ハ定期總會ノ時ニ行フ

會長ハ會務ヲ統率シ幹事ハ會長ノ命ニヨリ會務ヲ

處理ス

第五條 本會ハソノ目的ヲ達成センガ爲ニ左ノ事業ヲ行

フ

一、毎年一月十三日定期總會ヲ開催シ、臨時ニ役員會

ヲ開ク

二、毎年二月十六日會報ヲ發行シ學院ノ現勢本會ノ事

業、會員ノ動靜、各支部ノ狀況ヲ報告ス

第六條 本會ノ基本金ハ費消スルコトヲ得ズ

但シ學院問題ニ限り校友會幹事、學生幹事及學生大會

ノ決議ヲ經テ使用スルコトヲ得

第七條 本會ノ通常經費ハ基本金利子及ビソノ他ノ收入

ヲ以テ充ツ

殘金ハ基本金ニ繰入ル、モノトス

第八條 正會員ハ終身會費トシテ祖山學院卒業ノ時金參

圓ヲ納入シ終身會費未納者ハ毎年會費トシテ金五拾錢

ヲ納入スルモノトス

第九條 本會ノ會計報告ハ會報ニ發表ス

第十條 本會々則ノ變更ハ役員會ノ決議ニヨツテ定メソ

ノ都度會報ニ發表ス

以上

同窓會々報

昭和十二年度同窓會役員左の如し。

會長 院長 望月日謙 猊下

副會長 教頭 遠藤是妙 先生

庶務部 部長 鹽田義遜 先生

幹事 齋藤貫城 君

齋藤幹事 齋藤貫城 君
出征後八月以降

會計部 部長 中條是明 先生

幹事 米村智淨 君

辯論部 部長 松木本興 先生

幹事 難波智龍 君

難波幹事 難波智龍 君
務移任後九月より

文學部

部長 今村是龍 先生
高野幹事出 征以後十月 十二日以 兼任

幹事 穗坂真彌 君

助手 熊谷海善 君

運動部

部長 林是幹 先生

幹事 齋藤威遼 君

購買部

部長 福島義孝 先生

幹事 清水文要 君

助手 香川英頂 君

幹事のことば

祖山學院全學生の自治行政機關たる同窓會は如上の陣容の下に多少の異動はあつたが多端なる昭和十二年度の祖山の第一線に立つた。

指導を賜つた各部長諸先生は暫く措き火線に躍る幹事は孰れも決して練磨の士ではなかつたが、光榮の重責を擔つた我等の指導原理は「日蓮が弟子は臆病にては叶ふべからず」の勇猛心と「異体同心なれば諸事を成す」の盟約であり、夫れに終始した我等幹事自身多少の異動は有つても一貫したる鐵則としてガツチリと腕を組合せて歩み、而も齋藤、高野兩幹事の出征の後を守り益々強固な意志の下に兎に角に大半を大過なく歩み得た事を喜ぶと共に會員各位の絶大なる支援に對し先づ以て感謝の意を表し、且つ筆を新にして終始指導を賜つた院長殿下を始め部長諸先生に滿腔の謝意を表するものであります。

我等は今我等の重責を完うし得た喜を以て、幕を閉ん

として徒事を省みず敢て感想の一端を述べんに、祖山の教學たるや宗祖西谷の講說以來茲に六百五十有餘年の永きに亘り、脈々相承し、他に見得ざるの淵源を有するものであり、且つ宗祖身延御入山の九ヶ年を銳意法資養成に資されたるを拜する時、現在の教學の殿堂がより以上の充實と飛躍を望まずにはいられないのであり、夫は少くとも祖山に學んだ者の忘れてはならない大責任事ではあるまいか。人或は本山の學院への誠意を疑ひ、宗門人の祖山の教學への無關心を怨嗟する者有らんも其の前に先づ我々の愛校の熱情を望ましいものである。

少くとも我等丈けなりとも學院を愛し我々の教學の殿堂をして哺くみ育て宗祖の唯一つ止め置き給ふたものとして、末法萬年の二陣三陣の法資に残して置いてやり度い。斯る至誠の精進の上には宗祖の加被力も垂れられ來る事を信じて止まない。願くば斯る願業が我等の一貫したる熱禱であらん事を願望し、敢て蛇足を加へた次第である。

—昭和一二極月一三日 難波智龍記—

各部記事

庶務部

幹事 難波智龍

榊神廿二號所載以後を簡單に報告する。

榊神第廿號記載已後（昭和十一年十二月以降）主要記事

一月卅一日 劍道部寒稽古納會開催。

二月十三日 榊神第廿二號製本完了發行す。

二月十六日 宗祖降誕の聖日を卜して校内雄辯大會開催

多數辯士若人の情熱を吐露して壇上を花々しく飾る、

會員一堂に會して此の日を意義あらしめたり。

二月十八日 榊神第廿二號頒布を終る。

三月十六日 昭和十一年度第廿六回卒業式舉行、式後送

別茶話會開催、閉會後記念撮影を行ふ。本年度卒業生

左の如し。

高等部（十九名）

田邊 正知	永瀧 堯順	井澤 清光
小友 寛榮	山田 英夫	古川 宣悦
中谷 堯順	林 惠龍	田島 仙易
松本 良温	草ヶ谷 宜慶	的場 文雄
片岡 光乘	井口 智正	掛橋 泰壽
丹羽 好文	葛原 榮靜	

中等部（十二名）

下邨 顯淨 高野 教誓 穂坂 眞彌

大橋 智雄 武智 實靜 小山田 鳳隆

田川 義烈 平岡 正學 岩佐 海廣

守山 恭司 新津 義尙 四條 貫要

三月十三日 立正大學、學部、専門部本年度卒業生十六

名登詣各幹事接待に努む。

四月廿一日 新幹事選舉（當選者上の如し）

四月廿九日 滿洲靈廟西岡大元師日滿僧五十餘名引卒登

山歡迎。

五月四日 同窓大會開催。

前年度幹事解任

庶務部幹事 (幹事長) 田中 惠 嚴君

會計部幹事 下邨 顯 淨君

辯論部幹事 宇佐美 鍊 昌君

文學部幹事 牛居 行 信君

同 助手 穗 坂 眞 彌君

運動部幹事 香 川 是 光君

購買部幹事 米 村 智 淨君

同 助手 清 水 文 要君

の諸君の過去一ケ年間の勞を多とするものである。

同日 新幹事就任、即日事務引繼す。

五月五日 校友大橋智宥師入山祝電。

五月六日、七日、八日 灌佛會辯論部活躍(該部参照)

五月十八日 永年の間大奥主事を兼ねて本學に教鞭を取

つて居られた望月德英先生が函館實相寺に勞轉される

事に成り惜別に臨み、記念品贈呈す。

五月廿日 望月德英先生出發に就き、學院生一同お見送

り。

五月廿日 立正中學七十二名登山歡迎。

五月二十四日 伊藤海聞師母堂葬儀弔電。

五月卅日 元教頭高田惠忍先生遷化弔電。

六月五日 伊豆大島旅行出發(運動部記事参照)

六月七日 望月德英先生入山祝電。

七月二日 高田先生葬儀、庶務幹事參列。

七月十五日 暑中見舞發送。

七月十七日 清水房母堂葬式參列。

七月廿七日 島添前昭君出征見送。

八月十五日 庶務幹事齋藤貫城君出征。後任は辯論幹事

難波智龍君を以て充つ。

九月初旬 辯論部幹事後任として高野教誓君就任。

日支事變動發に際し當身延町よりも應召兵士多數なる

が其の都度本學院は誠心誠意歡送を爲す。其の詳細は

省略す。

九月上旬 校友半田清師出征祝電。

九月中旬 本學教授加藤雲洞先生出征。

九月中旬 古屋是聞師出征祝電。

九月中旬 武内觀良君出征。

九月中旬 谷響淨君入營。

九月中旬 伊藤慈照君出征。

九月下旬 田口榮治君出征。

九月下旬 松岡堯雄君入營。

十月一日 勅額拜戴道路布教(辯論部記事参照)

十月二日 中山法華寺貫主宇都宮僧正登山同窓會に金一

封寄附さる。

十月十日 校内劍道大會舉行(運動部記事参照)

十月十三日 辯論部幹事高野教誓君出征。後任は難波庶

務幹事兼任と決す。

十月十二日 宗祖鶴林會道夜說教(辯論部記事参照)

十月十六日 秋季聯合雄辯大會(辯論部記事参照)

十月十七日 甲府街頭布教(同部記事参照)

十月十八日 吉川海音君の本葬參列。

十月卅一日 立正商業生五十名登山歡迎。

十月卅一日 校友結城瑞光師身延山派遣の従軍布教師と

して壯途に就かれ見送り。

十月卅一日 石黒湛全師出征祝電。

十一月二日 元本學教授田中惠春先生の入山式に際し祝

電を送る。

十一月廿日 嶽南野球大會參加、三年連續榮冠を獲得し

た事は運動部の記事に譲る。

十一月廿三日 本學青年學校教練査閱本會の名を以て支

院宛案内狀發送。

十一月六日 松木本興先生の母堂葬儀參列弔意を表す。

會計部

幹事 米村 智 淨

元來會計と云ふ役はケチ會計といつて憎まれる。それが會費納入期日が迫つて來ると一層濃厚になる。

然し乍らそのケチ會計もなくてはならない存在である

何故ならば本部は表面的な活動性を有しないが。各部の性能を十分に發揮する原動力ともなるものだ。その任務重大なる當該幹事に不肖私が自己を顧みずに就任いたしました。が、今や幸にして部業の大半をなし遂げた事は各部長先生と幹事諸兄の御指導によるは勿論、會員諸兄の克く會則を遵守された爲と茲に衷心より感謝の意を表する次第である。

十一月下旬出征兵士多數見送りの爲部長先生並に當局合議の結果臨時徵集をいたしました。

寄附者芳名

- 金一封 中山貫主宇都宮猥下
- 金拾圓 山梨布教師會殿
- 金拾圓 立正商業殿
- 金拾圓 身延山内野日運殿
- 金貳圓 静岡小野智雄殿
- 金貳圓 大阪田中義正殿
- 金貳圓 高松五水井榮誠殿

- 金貳圓 身延町松司軒殿
- 金壹圓 同望月寫眞館殿
- 金壹圓 同望月源次郎殿
- 金壹圓 同加藤市郎殿

辯論部

幹事 難波智龍

佛陀及び宗祖が聖教弘布の爲に選給ひし有力なる方は何かと云へば、我々は先づ口業の説教であると答へるであらう。

佛陀八萬四千の法門が金口の所説たるは云ふもしがな宗祖小町街頭の獅子吼は池上、四條、荏原等の衆多純信無垢な熱血護法の士を得給ひ、又不斷の講説談議は遺法相承の六老を初め末法萬年弘教の法器をして法華折伏の大利劍を磨かせ給ふ。三諫容れられず、默諫身延にして尙「書は終日御法論談」の御生活あり。既に法華經中「常説法教化」五十展轉」の弘法教化を以て其の常軌とする

等々。我等の軌るべき最善の弘教手段は自ら此の中に明示され、宗祖自ら「力あらば一文一句なりとも語らせ給ふべし」の誠勸の所以も是に在る事を知るものである。

吾が祖山學院の誇りは高祖の膝下に末代弘教の法器を哺み育て得るにあり。處尊きが故に其の成果の期待は勿論、夫が辯論の錬磨に於ては祖山のみに許された恵みがあり。毎月優に十數座の實演舞臺を有し、夫が唯の練習に非ずして宗祖照覽の御前に於ての弘教の第一線の實演たる事は眞摯に斯道の精進を望む者にとつて生涯忘る得べからざる感激であり。又此が將來への礎へたる事は過去の祖山辯論部史が語つて呉れて居り、未來の部史も語つて呉れる事であらう。

茲に祖山の眞面目と、重大なる意義はある。

而して日支風雲急を告げ、支那事變動發に際しては銃後の完璧を急務とし、國民精神總動員に率先して、立正報國の大精神を掲げ、終始叫び続けた本年度の吾が辯論部の活動には果敢なるものがあり、部を預る幹事にも度

々異動ある中に宗祖の御庇護に併せて松木部長先生の指導宜しきと會員諸兄並に大方諸賢の絶大なる聲援に依り重大時局下に於ける重責の大半を完うし得た事を感謝しつつ本年度の當部活躍の跡を簡單ながら報告する。

四月廿八日 前幹事宇佐美兄より事務引繼完了。

五月六日 釋尊御降誕會道路布教開演。

所 身延町山門前

演題辯士左の如し。

日蓮聖人の眞佛教把握の由致

生命淨化の道

信仰の實踐的意義

信仰生活の法悦

眞佛教の信

宗祖三祕の現代的意義

五月七日 同道路布教並映畫

所 山門前

宗祖の眞精神

難波 幹事

田中 泰勵君

土屋 詮肇君

加藤 智學君

藤本 正弉君

部長 松木 本興先生

小崎 龍雄君

宗祖身延入山の聖意

難波 幹事

御草庵説教出張

本化教徒の覺悟

武田海正先生

山門説教出張

佛陀出世の本懐

松木 部長

五月十五日 耕辯會開催、於高貳教室。

映畫：身延山ニユース、宗祖御一代記

課題 思親閣上の日蓮上人

五月八日 同前 同所

難波 幹事

出演者 江口、田中(寛)、清水、厚海諸君。

日蓮聖人と日本國

丸山淳孝布教師

五月廿二日 耕辯會開催、於高貳教室。

現代世相と本化教徒の覺悟

結城瑞光布教師

課題 國体明徴と日蓮主義

靈域身延山の眞意義

出演者 高野、田中(泰)、齋藤、木崎、難波、尾崎の諸君。

映畫：ニユース、御一代記

六月五日 池上學林春季聯合雄辯大會に中五田村啓孝君を派遣す。

映寫監督 丸山布教師

演題 本性の閃きを讃ふ。

解説 丸山布教師、難波

六月 大善坊出張、深敬病院出張。

技師 米村、清水、齋藤

六月十二日 光山學院創立記念雄辯大會に中五田中靜光君を派遣す。

三日間に亘る道路布教並に映畫布教は本山後援の下に

演題 廟前の老杉に祖猷を聴け

頗る盛大に開催する事を得、本山並特には丸山布教師

六月十五日より三日間 開闢會説教出張。

の御盡力に深謝す。

六月十五日より八日迄釋尊降誕會説教出張。

五月 深敬病院講演出張、大善坊説教出張。

六月十五日 山門説教出張。

六月十七日 開闢會道路布教。

場所 山門

宗祖身延御入山の眞意義

身延の眞意義

六月廿三日 學内各級選出春季雄辯大會開催。當日のプ

ログラム左の如し。

一、開會之辭

難波 幹事

一、身延河の淨化に就て

中二 勝山政夫君

一、宗教の必要なる所以

中三 藤 英晋君

一、本化宗門青年の自覺

中四 井上龍温君

一、自己を再認識せよ

中五 田中靜光君

一、二陣三陣續かん

高一 河端清瑞君

一、希望の根源を導ねて

高二 大住快仁君

一、所 感

高三 吉田孝存君

一、批評訓辭

部長 松木 先生

一、閉會之辭

齋藤 幹事

七月十八日 深敬病院出張。

七月十八日 大善坊出張。

七月廿三日 總門發軔出張。

七月三十日 清正公祭禮出張。

七月卅一日 覺林房祭出張。

因みに山門、御草庵、覺林房、大善坊、本妙庵、深敬

病院等は當直割に依り毎月出張す。

特に松木部長の指導と尾崎、三好、加藤、宇佐美、大

住、小林、武内、高野、田中諸兄の奮闘を謝す。

九月十四日 齋藤幹事出征に依り難波幹事庶務部に移り

高野新幹事當部を擔當事務引繼を爲す。

九月廿五日 說教式練習舉行。

十月一日より三日間 勅額拜戴記念道路布教。

一日は雨天の爲中止。

二日 同 場所山門前

辯士 松木部長、武田教授、尾崎、加藤、土屋、熊王

宇佐美、大住、望月、太田、難波の諸君。

十月十日 山門祭禮說教出張。

十月十一、十二、十三日 宗祖鶴林會說教出仕。

十月十二日 映畫並に同道夜說教。

丸山執事、結城布教師、尾崎、土屋、眞能、宇佐美、

大住、難波、高野

映畫：ニュース、御一代記

監督 結城布教師

技師 米村、清水

解説 難波、高野

十月十三日 高野幹事召に應じ出征、難波幹事兼任と爲

す。

十月十三日 甲府立正閣御會式映畫布教出張。(結城布教

師、難波幹事)

十月十六日 秋季聯合雄辯大會開催。

吾が祖山の辯論部が一年間鍊磨せるの辯を大衆の眞只

中に吐露する待望の日である。而も本年は時正に非常

時局下國民精神總動員眞最中、護國の聖者日蓮棲神の

地に於て繼法鑽仰の青年學徒が立正安國の大精神の雄

叫びを爲さんとす。一山の衆の耳目はいやが上にも

此の上に注がれ八ヶ團體二十五名に依り交々論陣は張

られるに折柄公會堂も狭しとばかり來場せる聽衆は酔

へるが如く、魅せられるが如き中に大日蓮の抱負を聞

き感銘を深うした。

參加團體 立正大學、日本大學、池上學林、法苑學院

祖山中學林、木化同心會、男女青年團。

當日審査員諸先生を左の如く御願す。

遠藤是妙先生 松木本興先生 望月舜勝先生

今村是龍先生 望月歡爾先生

プログラム左の如し。

プログラム

一、玄題三唱 一 同

一、開會の辭 幹 事 高野教誓君

◇優勝カツプ返還式

一、審査員挨拶 本學教授 今村是龍先生

一、道は此處に在り 本學 後藤 博君

一、時局に際して 祖山中學林 丘 龍芳君 一、宗教の時代性 立正大學部 鹽崎辨仁君

二、破邪顯正と儒教 本 學 田中寛光君 一、現代青年の指導者に訴ふ

一、時局と青年 女子青年 伊藤たき嬢 本 學 福井泰嚴君

二、佛陀の道場へ 法苑學院 古館海靜君 一、日本精神と立正安國 本 學 加藤智學君

一、大和魂 本 學 厚海學眞君 一、根本佛教の精神より現代世相を見る 立正大學部 岩瀬惠音君

一、所感 身延青年 芹澤徳藏君 一、揆 摺 辯論部長 松木本興先生

二、曉の大進軍 池上學院 鈴木戒厚君 一、閉會の辭 幹 事 難波智龍君

二、時局と立正安國 本 學 米村智淨君 一、玄題三唱 一 同

二、よし膂力は無くとも 女子青年 内野千恵子嬢 審査の結果左の六君が優勝、準優勝の榮冠を獲得され

一、日支事變をして平和の序曲たらしめよ 本 學 望月孝雄君 た。

一、未定 立正大豫科 野口戒心君 本學優勝(カップ授與) 中 五 米村智淨君

一、生活に意識を持て 女子青年 若林千登世嬢 同準優勝(賞品授與) 高 二 香川是光君

二、盲目への道 本化同心會 片田爲丸君 他校派遣優勝(カップ授與) 立正大學 鹽崎辨仁君

二、樂土建設への歩み 本 學 香川是光君 同 準優勝(賞品授與) 池上學林 鈴木戒厚君

一、自ら燃えて聖火に點せん 本 學 眞野英秀君 男女青年優勝(カップ授與) 内野千恵子嬢

同 準優勝(賞品授與)

芹澤 徳藏君

十月二十三日 耕辯會開催。於高三教室。

尚本大會開催に際しては部長の御指導は云ふ迄もなく

野口、橋本、杉山の諸君賞演

本山當局、審査員諸先生の御参加並に各参加辯士諸君

十月二十四日 松木部長批評訓辭あり。

の奮闘に對し盛會の喜びと共に満腔の謝意を呈します

鏡圓坊祭禮講演出張。

尙當大會數日前より犠牲的御盡力を下さつた梅屋旅館

十月三十日 耕辯會開催。於高三教室。

御主人並に御一家の方々に深謝申上げ、併せて當日御

増田、田中(靜)、望月(孝)、小林(芳)、難波、上木、

芳志を忝なくした松司軒、加藤旅行案内所の方々に厚
く御禮申上げます。

宇佐美諸君の交々の熱辯は祖山雄辯道に一段の活氣を
添へるものあり。後松木部長の批評訓辭あり。

因に當大會前該當幹事として準備に専任する事久しう

十一月六日 説教式練習。(於釋迦堂)

して十二日征途に上り、此の盛會に會ひ得なかつた高

十一月十五日 立正大學各大學高專聯合雄辯大會に高三

野幹事の勞を多とするものであります。

尾崎龍雄君を派遣す。

十月十七日 甲府市制祭特別道路布教出張。

十一月二十日 甲府立正閣講演出張。

所 (A) 太田町公園

第三學期

(B) 甲寶劇場附近空地

二月十六日 宗祖降誕會雄辯大會開催。

以上

統率者 部長松木本興先生

辯士 小崎龍雄君、加藤智學君、宇佐美鍊昌君、難

波幹事

運動部

幹事 齋藤 威 遵

老若男女を問はず、今やスポーツは全世界を通じて非常な勢をもつて普及されつゝある。如是き時代が來る事を二十年以前には夢にも想はなかつたらう。それ程一般の人々が、スポーツに對して關心を持つ時代となつたのだ。オリンピック、甲子園がそれなのだ、今や吾が國にオリンピックが開催され様としてゐる時なのだ。凡そ若人たるものは屋内に引込み思案に沈り、神經衰弱の頭をひねらずとも「良く學び良く遊べ」の一語を以て身心の鍛鍊に勉むべきであらう。

社會の文化は雄辯と文學であると言はれてゐるが、健康なき處に何の雄辯、何の文學があらう、此處に於て必然起るべき問題は各自の健康である、譬ひ天才聰明、大

雄辯家と雖も病弱であるならば吾が日本帝國に生を得た價値がない、更に現代非常時國難を双肩に負ふだけの資格があるだらうか？ 此の超國難を打破し國家の柱石となるべき眞の資格者は健全なる体軀と、精神の所有者であらねばならぬと斷言す。

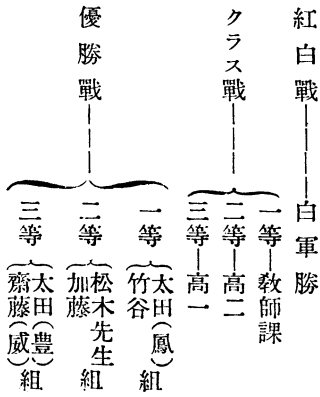
所謂「健全なる精神は健全なる身体に宿る」とユフエナルが言つた如く、如何に高遠な理想、抱負を以つても其れに伴はない肉体にては到底其の理想を實現さす事は不可能である。吾々青年宗教家が將來自覺せる宗教家として複雑極りなき社會の表面に立ち混沌として渦卷き流るゝ思想海に浮沈してゐる時代の人心を救濟するには本化別頭の大法を學ぶ事のみを以て能事終れりとしては居られない。自ら其の渦中に進んで行くと云ふ覺悟がなければならぬ。その覺悟がある以上身体の強健と言ふ事は片時も忘却してはならない。請ふ、獎勵を待つべからずより進取的なれ、幸にして吾が祖山は此處一二ヶ年運動熱はいやが上にも高まり來る事は喜びに堪えぬものであ

る。必ずや近き將來に於て祖山運動部黄金時代の現出するを見るであらう。

△庭球部記事

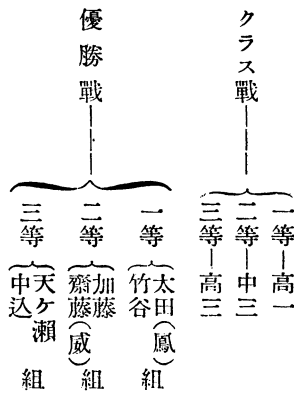
本年春葛原兄を當部より失つた事は實に残念である、然し祖山庭球部は竹谷、加藤、天ヶ瀬君が當部を堅く保守してゐる事は、欣びとする處である。第一學期新入部員として太田、中込君等を迎へて吾が庭球部のハリキリ方は大變なものだ。

六月廿日 春期校内大會を松木先生出席のもとに開催す成績左の如し。



十月廿三日 秋期校内大會を開催す。成績左の如し。

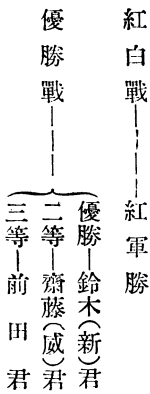
紅白戦——白軍勝



終に優勝旗は太田、竹谷組に授與せらる。

△剣道部記事

十月十日 秋期校内大會を劍士多數出場のもとに開催す劍士の意氣正に天をつくの勢、戦績左の如し。



高点試合——

一等	日野君
二等	前田君
三等	齋藤(威)君

正月二十二日より小野五段を迎へて寒稽古をなし、三十日納會を開催し後猛練習して身中劍道部に挑戦する豫定である。

△卓 球 部

當部の存在こそ我が運動部に於ける唯一の誇なり。僅々數年間に於ける當部の長大足の發展や將に一大驚異の對象とも謂ひつべし。

名選手の輩出と相俟つて部員の烈々たる意氣、加ふるに臥薪嘗膽の血みどろの永き苦闘……今日の隆盛の豈偶然ならざるを察知すべし。

今や我が部の名聲は近く峽南の巷に喧傳され、遠く山靜の果に及べり。峽南の惑星と謳はれ堂々縣下の強豪陣に伍して伯仲の技を競ふに至りしは欣快の極みなり。然して過去を省みて轉た今昔の感を禁ず能はず。

現在の顔振れは藤、増田、鈴木、大森、竹中等、將に一騎當千の強豪を網羅せり、多年校内隨一の權威者の名をほしいまゝにせし藤、今や漸くその技を發揮し、これに加ふるに増田、鈴木、大森等その技愈々圓熟を加へ藤に迫らむとせば惑星竹中の擡頭するありて、今や將に群雄割據の盛況を呈し以て龍護虎搏の風雲を孕めり。

先きに藤英五郎君本年二月彼の山靜選手權大會に優勝し母校の爲に萬丈の氣を吐きしは當部興隆の最も力強き導火線となり、次いで甲府に於ける縣下學生チーム對抗に傳統を誇る甲中の強豪陣を攪亂し或は峽南隨一の強豪陣YSとの對戰に觀衆の眼を酔はしめ、中央大會豫戰峽南選手權大會等々に各々好成绩を収め對外的飛躍の目ざましき躍進振り、對內的には望月寫真館寄贈盃爭奪戰春秋二回に亘る校内大會等々に豪華を誇る。見よ此の絢爛たる豪華の足跡を！ 讚へよ祖山卓球黃金時代を！

昭和十二年度に於ける當部の記事次の如し。

二月十一日 山靜大會出場選手決定試合舉行、林部長來

臨の下に卓球部幹事辭令授與式並に望月寫眞館寄贈盃、小友寛榮氏寄贈盃獻納記念撮影等ありて錦上に花を呈し以て近年稀に見る盛況を收む。

A組優勝 藤 君 (望月寫眞館寄贈盃)

二等 小友君

三等 増田君

B組優勝 齋藤智靜君 (小友氏寄贈盃)

二等 帶金君

三等 石原君

同 青柳君

山靜兩縣下選手權大會

主催 祖山學院同窓會

後援 山梨日日新聞社

東京卓球協會堂

四回戦前の戦績省略す

◇第四回戦

望月	3	0	萩原	(身)
山田	3	0	鈴木	(祖山)
佐野	3	0	小友	(祖山)
藤	3	0	佐野	(YS)
芦澤	3	2	齋藤	(祖山)
石原	3	1	久保	(YS)
味岡	3	0	佐野	(YS)
増田	3	0	坪島	(高工)

◇第五回戦

山田	3	2	望月	(YS)
佐野	3	1	増田	(祖山)
藤	3	0	味岡	(身)
芦澤	3	1	石原	(遞信)

◇準優勝戦

佐野	3	0	山田	(榮)
藤	3	0	芦澤	(YS)

◇決勝戦

藤	3	0	芦澤	(YS)
---	---	---	----	------

藤(祖山) 3 --- 0 佐野(隆) (Y S)

昭和十二年四月十八日

第十回縣下新人大會

主催 山梨卓球協會
後援 山梨縣体育協會
山梨日日新聞社

場所 山梨縣立甲府高等女學校

祖山を代表して藤君出場、今此處に藤君の戦績のみ記す。

藤 3 --- 0 千葉 (法曹) || 一回戦
 藤 3 --- 0 五味 (甲中) || 二回戦
 藤 3 --- 0 瀧田 (韭中) || 三回戦
 藤 3 --- 1 井上 (甲商) || 四回戦
 藤 1 --- 3 芦澤 (Y S) || 五回戦

勇闘空しく五回戦に芦澤の強打に封ぜられ悲憤の紅涙をのみしは千載の痛恨なり、されど中央遠征への初陣として其の健闘の跡歴然たるを見て彼の技の那邊たるか察知

し以て雪辱の日を期役するや久し。

五月二日

山梨水晶遠征記

峽南隨一たる強豪Y Sの陣容を粉碎し、以て峽南に覇者たらむの意氣すさまじく藤、増田、大森、鈴木、田口の名コンビになる強陣を調へ遠征の途に就く。試合は三点先取法と勝抜戦との二回に亘る、戦績左の如し。

◇三点先取法

Y S		祖山
○芦澤	3 --- 1	増田 ×
×大日方	0 --- 3	藤 ○
○望月	3 --- 1	田口 ×
○久保	3 --- 1	大森 ×
○望月	3 --- 0	藤 ×

◇勝抜戦

Y S 祖山

×芦 澤 0 ——— 3 藤 ○

○久 保 3 ——— 1 田 口×

○大日方 3 ——— 1 大 森×

○望 月 3 ——— 0 増 田×

×久 保 1 ——— 3 藤 ○

×大日方 1 ——— 3 藤 ○

○望 月 3 ——— 1 藤 ×

我軍の悪戦苦闘も終に空しく刀折矢盡彼に屈せしは痛恨なれど此の一戦に於ける藤君の健闘目ざましく峡南の強豪を網羅せる彼のY Sの堅陣を攪亂せしめ祖山の爲めに萬丈の氣炎を吐きしは欣快の極みなり。

五月廿日

春季校内大會

本學講堂に於てA B二組に岐ち望月寫真館寄贈盃並に小友寛榮氏寄贈盃爭奪戦を舉行す。

A組 優勝藤君、二等増田君、三等鈴木君、

B組 優勝中村君、二等帶金君、三等香川君、笹部君

六月六日

第四回山靜チーム對抗大會

於身延中學校、此の日本學よりA B二チーム出場、A組善戦連勝破竹の勢すさまじく山身俱樂部を3—0にて軽く破り、次で身鐵、水晶B組等を各々3—1にて撃退せしめ堂々決勝戦に出で峡南の覇者Y S A組と對戦せしも武運拙く千載一遇の好機を逸せり。決勝戦に於ける戦績次の如し。

Y S 祖山

望 月 3 ——— 0 鈴木

久 保 1 ——— 3 藤

芦 澤 3 ——— 0 増田

望 月 3 1 藤

3 1

六月二十日

第一回縣下男子學校對抗大會

於 甲府中學校

主催 山梨縣体育協會
後援 山梨日日新聞社
同 山梨卓球協會

此の日本學代表として藤、田口、鈴木、増田、大森の五選手優勝を期して堂々參加出場す、戦績本學外は省略す。

○藤	3	0	高橋×
×鈴木	1	3	望月○
○増田	3	0	千野×
○大森	3	0	小澤×
田口	1	1	瀧田

○鈴木	3	0	堤×
×藤	2	3	井上○
○増田	3	0	大木×
×田口	1	3	望月○
○大森	3	0	千野×
×増田	0	3	古澤○
○藤	3	0	望月×
×田口	1	3	神澤○
○鈴木	3	1	小林×
×大森	2	3	花論○
2	3		
×大森	0	3	永島○
祖山			高工
祖山			甲商

×増 田 0 ——— 3 鶴 田 〇
 ×藤 1 ——— 3 永 田 〇
 0 ——— 3

本舞臺初の出陣を飾る此の榮光の事實は我が卓球史空前絶後の壯舉にして縣下中等校の王座として傳統を誇りし甲中の堅陣に對し龍讓虎搏の熱戦を交へ彼の陣容を十二分に攪亂し狼狽措く能はしめし壯快は、喩え武運拙く2-3、ゲーム得点實に10-9のドタン場迄追ひつめて惜負の血涙を收めしも其の戦績や峽南の惑星祖山の面目躍如たらしめき蓋し數年前に於ける學院卓球陣を知る人にして此の試合を観戦せしなば、只々驚嘆の聲あるのみならむ。實に此の一戦こそ、學院卓球部史を飾る劃期的事實として永久に記念さるべきのみ。

十月廿四日

秋期 校 内 大 會

幹事來臨のもとに身延小學校に於て學院校内大會舉行。

優勝戰 一。等。藤君、二。等。増田君、三。等。鈴木君、大森君
 高點試合一。等。鈴木君、二。等。窪塚君、三。等。青柳君

第二回峽南卓球大會

十一月廿日 於身延中學

主催 峽南卓球聯盟

後援 山梨日日新聞社

本學より藤、竹中、大森、鈴木、増田、中村、帶金、青柳、鈴木寛君等參加、藤、竹中の兩君善く戦ひ入賞す藤君不調にて天運に恵まれず優勝を逸し決勝戦にて斃れ惜負の血涙をのみ勇闘空しく千載の痛恨を留む。

亦二回戦にて竹中、大森兩君の同志打ちのやむなきに至り、近來の好調を謳れし大森君、新鋭竹中君の健棒に斃れ、藤君、増田君の二回戦に於ける同志打は増田君の闘志と策戦に藤君攻撃を封ぜられ苦戦の中に一セットを先取され、暗雲の影を深め、挽回を危ぶまれしも精根の

限りを盡して健闘し續に苦境を脱し3—1にて増田君を撃退し、次回戦に出でしも、その不調振りは優勝を期するに難く、僥倖を期待するの一途あるのみなりしも、哀れその僥倖も空しく決勝戦にて望月君(Y.S.)の猛撃に一蹴されしは惜みて餘りあるものなりき。

然れども、新鋭鈴木君意氣軒昂にして第二回戦に於ける峽南の巨將望月君との對戦は近來稀に見る熱戦且つ激戦にして波瀾萬丈虚々實々の技を盡し宛然龍護虎搏の概あらしめ觀衆の眼を魅了せしめ以て祖山鈴木のシートを確保せし事は欣快の極みなり。喩へ3—1にて彼の老巧に屈せりと雖もその前途を囑望するに餘りあり。

準決勝以後の戦績を録す。

準決勝

望月(Y.S.) 3 ——— 0 萩原(山身)

藤(祖山) 3 ——— 1 竹中(祖山)

決勝戦

望月(Y.S.) 3 ——— 1 藤(祖山)

△野 球 部

一昨年、昨年と歩一步基礎を固め、向上の一路を辿つて來た我が學院野球部は、年更りて我等後進を人格的に技術的にうますよく指導誘掖された田邊、草ヶ谷、河南の三先輩を送り、それと共に山田監督、鈴木新主將以下前年度の錚々たる猛者連に新入生の太田、武波君等を加へて、宿望の峽南大會三年連覇の偉業を達成せんと張り切つてスタートを切つた。然して鈴木主將は部員の勧誘に努力し、主として中二、中三から多數の入部を見た事は我が野球部の前途に彌が上にも多幸の影を投げるものがあつた。

部員諸君がああ何時もながらの小さなグラウンドにて日の暮れた後迄も、よく異体同心に互に勵まし合ひ、へと／＼になつて精進するさまは見る者をしてきつと何かの感に打たしたに違ひない。例年の通りに、今年も土曜日曜には小學校、中學校に出かけて或は町のチームと試合し、或は平生思ふまゝに出來ぬ外野ノック、フリーバ

ツチングを行つた。高い日の下に、廣々とした気分にて練習する壯快味、又練習半ばに丸くなつて寄宿舎より持参した握り飯を食ふ時の美味さ等、此等は平生齷齪した處に自由を奪はれ、まづい味噌汁しか食はぬ者だけに、特に深い感銘を得、苦しさの中にも祕かに他の者に味へぬ喜びとした處であつた。

又野球部として決して多からぬ部費は必然的に部員の經濟的負擔を少しばかり強ひたが、よく此の難を突破して二、三年前に比べて用品も漸く揃つて來た事は何よりも嬉しい事であつた。もつと暇と費用があれば一日か二日位は遠征もしたいと思つてゐたが、それも實現されず僅に近くのチームを撃破しては渴を癒やしてゐた。

其の内、待望の峽南大會が今年は非常時局下に一人の意義を副へて、秋もいよ／＼深まり薄ら寒ささへも感ずる十一月二十日に開かれた。

我軍王者の貫祿を示しつゝ入場した。鈴木主將より優勝旗を返還し、午後一時半、第一回戦の幕は切つて落さ

れた。先づ身延中學通學生チームと對戦す。學校を終つて多數の諸兄が應援に駆けつけてこられた。敵はレギュラーを二、三名交へ仲々強敵であり、前半接戦を繰返したが後半に入り我軍の奮闘物凄く遂に二十對六にて快勝す。

翌二十一日午前十時準備優勝戦に身鐵クラブと對戦、我等の意氣の赴く處無人の野を行くが如く、敵陣を攪亂して二十對〇、五回コールド・ゲームにて一蹴す。

午後、優勝戦にて鰍澤チームと當る。折悪しく雨が降り來たり、その中に兩軍必死の意氣物凄く、我れが三年連勝の榮を得んとすれば、彼も亦雪辱を期して戦はぬ先既に激烈な争闘が豫想された。

祖山	0	0	0	3	2	0	0	5
鰍澤	2	2	0	0	0	0	0	4

兩軍メンバー

澤 鰈		山 祖	
崎川橋澤瀨柳村澤藤	得点 4	部竹谷本木波原田田	得点 5
安打 5		安打 6	
場山矢山大深一青志遠	四球 7	笹青竹宮鈴武梅内山	四球 7
三振 9		三振 5	
遊一投 芦 捕	盜壘 5	遊中三投二捕左右一	盜壘 3
失策 2		失策 0	

我軍先攻にて、例の如く笹部巧みに出壘したが後援續かず、代つて宮本投手の肩定まらず、無死満壘に敵の頼む強打者深澤に左中間に安打を許し、ぬかるみに變轉し不幸二壘打となり二点を許した。

第二回、我軍三壘に走者をおいたがスクイズ失敗し挽回ならず、その裏、又敵に二安打を許し更に二点を加へられ、我軍の前途漸く悲觀されるに至つた。三回をすぎ四回に入れば俄然奮起した我軍は、斃れて己まんの氣概にて青竹、竹谷四球の後、宮本痛烈なる二壘打を中堅越に放ち歡聲裡に青竹生還、竹谷三本間に狭まれ危なく見

えたが、よく三壘手暴投に還り、鈴木亦ヒットを放ち宮本生還、一点の差に迫り試合は全く白熱化した。相變らず雨は一層激しく降る。スパイクに踏まれたダイヤモンドは全く泥海と化し、各選手のユニホームは至る處泥が付着した。此處で強敵鰈澤に若し一点でも入れられるならば最早や望なし、死んでも今後一点も許すまいと一同悲壯な決心をして守備につく。

宮本投手の調子やゝ復し、三振凡打に打取り、背後の好守又水も漏らさず、五回笹部大きく二壘打して出で、青竹四球、二死後鈴木三壘失に笹部還り、猶ランナー一壘にあり、武波次いで投ゴロに危はや萬事休すと見えだが、敵投手一壘に暴投し線外に轉々す。青竹勇躍ホームベースを踏めば、鈴木亦決死の勢にて本壘に殺到、泥濘に手よりすべり込む。一瞬右翼手よりの送球速く、審判の手高くアフトを宣す。あゝ。然れども胸より脚へ一杯、泥まみれになつたその姿を見て誰か感激しないものがあらうか。我等の元氣は更に倍加するを覚え、一層張

り切りの度を加へた。敵亦二死後ながら二壘打を放つたが、よくしまつて入らせず、六回、梅原、内田二走者をおき、山田宿將憂然バットに音あり流星の如く左翼に飛ぶ、危やヒットと思はれたが惜しくも敵真正面を突き得らる。敵一死後、烈しくライナーで二壘横を襲ふも鈴木隻手に捕へ、右翼大飛球内田亦好走よく捕へる。

最終回に入り竹谷三壘に猛衝を呈し、決然一壘にすべり込むも惜しくも刺され、後走者を出せど空しく。一点勝越のまゝいよ／＼土壇場に來る。敵強打者深澤バツターボックスに現はれ、不氣味な豫想に觀衆等しく沈黙したが宮本投手の快腕冴え遂に三振に退け、次いで四球に出すも二盗に殺し、最後遊匍、ショートよく泥の中を掬ひ上げて好投、見事一壘手山田の手に收まつた。

遂に勝つた。勝つた。興奮、緊張した顔にもほのかに喜びの色が見えた。遂に先輩の偉業を継ぎ三年連覇を爲した。三日間を通じて宮本投手の好投、優勝戦に於ての内野の好守備、特に山田名一壘手數々の難球を處理し

捕手と三壘手との好リレーによる敵走者の鮮やかなる刺殺、笹部遊撃手の絲を引いたやうな送球、青竹、内田兩外野手のカバー、鈴木、梅原の好打等すべて日頃の練習の結果を餘す所なく表はしたものであつた。

本大會打擊ベスト 4

原	木	本	部
0.500	0.375	0.363	
梅	鈴	宮	笹
			0.333

我等は今年の結果に満足せず、更により明朗、堅實なる野球部への飛躍を期す。

終りに學院諸兄の熱援を感謝します。

十一月廿二日 校内クラス野球大會を執行す、各級代表選手は雨天を物ともせず優勝を目指して大いに奮戦した同大會の 優勝 中三級

準優勝 高三級

文學部

幹事 穂坂 眞彌

時の推移、それは文學の必然的要求の叫びである。私達が如何に幽遠な眞理の把持者であらうと、將た深淵なる思想の所有者であるとしても、其處に文學の存在を若し認め得なかつたと假定したなら、その幽遠な眞理も、思想も、共に限られた個々の人生のそれ以外に存續し得ない。よしそれが存續し得たとしてもそれは不的確なものである事の非は免れ得ない。世界の三聖として謳はれる佛陀の慈悲の教も、基督の愛の教も、孔子の仁の道も共に文學の力なくしては現代私達の胸底深く喰ひ入つて除去し難い根柢を持つと云ふことも許容出來得ないことであり、また考へ得ないことである。私は今、時の推移それは文學の必然的要求の叫びである、と前言した。私の言つたことは妥當を缺いた言葉かも知れない、然しそれが全然否定されるものではなく尙一面の眞理性を有つ

言葉として容認される可能性のあることを私は信ずる。

かうした私の考へから云はしむれば、文學は古しへの所有する人々の思想、研究、思索等を現今(後世)の私達にまで送り届けてくれる重要な役割をなすものであると、更に節言するならば文學は時(昔—今)から時(今—後世)への然も重責を負つた傳達夫であると。

本會文學部も此の意からして設置されたことは次の條則によつても推察される。

第四條 本部ハ雜誌棲神ヲ發行シテ會員ノ文想ヲ鍊磨

シ研究及ビ意見ノ發表機關トス

即ち私達學徒の文想を鍊り研究及び意見(思想)の發表機關として『棲神』なるものが年々發行されて來たことは事實である。そして此の『棲神』によつて祖山文學の命脈が所謂「時から時へ」と移されて今時に至つたことも贅言を要しない。然も茲數年間に於ける幹事諸兄の献身的努力によりその飛躍的進歩の結果は『棲神』を權威ある學報として一躍斯界の檜舞臺へ登場させることに

なつたのである。

しかし私達にとつて權威ある學報としての『棲神』は「然其書浩瀚人多興望洋之歎終置之高閣」之感を抱かしめ、剩へ前掲の「會員ノ文想鍊弊」云々の本誌創刊當初に於ける條則の趣旨に悖つて同胞學徒の投稿するものゝ余りにも尠きに至つては、思ひ半に過ぐるものがあつた。此の点前年度幹事の牛居兄とも數々其の編輯方法に就いて懇談したことがあつたが、とにかく學界の權威はあつたにしても、その内容そのものが私達學徒のものでないとしたら恐らく巨額の資用を投じて、然も該當幹事津が幾分なりとも學業まで犠牲にして努力する編輯から刊行までの勞苦は何によつて慰はれるか？ 私達の唯一の發表機關であり、然も特に私達學徒の爲に發行されてゆく此の『棲神』のすべてが學徒自身のものであつてこそ始めて投資の意義もあり、また幹事の勞苦も心根から慰はれるのである。私は今年度の編輯は會員諸兄を中心として原稿を募集した。それで校外の諸先生にはあまり

御寄稿を依頼しなかつたが、然し第一回、第二回の募集には一人も投稿がない。第三回めの募集にやうやく三、四の投稿を見たのみ。これでは到底會員中心など、云ふ方針ではやつてゆけない、と思つた時はすでに二學期も半ばに入つてゐた、苦しい時の神頼み式に方々へ當つて依頼して見たけれど何れも急場の用に間に會はない。それで結局は今までに依頼して置いた方々のだけを組版に付することに、やうやくこれだけで出来上つたので、唯だ學生諸兄の投稿の尠かつた事が遺憾に思はれる。そして私の編輯方針が一も二もなくあつさりと裏切られたことを私は私自身に訴へやうとする。そして一年間に於ける文學部としての仕事に對し私の熱意の足らなかつたことは該當幹事として自責の念に耐へない。然し私の仕事に對し消極的な氣分をもたせるやうにしたのは誰の罪でもない、それは今年の大會に於ける四辻兄の提案が決議されたことである。

「赤字負擔は各部幹事に於て責任をもつこと」私達幹事

は會員と遊離した請負師的存在ではないのだから……況やそれを職業とするものでない限り各部共に未経験者ばかりなのだ。會員諸兄の支持なくして請負仕事に手を出した私は性來の氣象からして思ひきつたことの出來なかつた事は仕方がない。

私の部としての仕事はこれで大体終つたことになる。以上は私の文學部に對する感想の偽らざる述懐である。

— 十二、五 —

◆文學部へ寄贈書籍

立正史學	立正大學史學會殿
叡山學報	比叡山專修院叡山學會殿
信人	松楓居殿
求道	求道園殿
山柿	山柿會殿
鶴林	池上學林殿
其他新聞雜誌等	各位殿



編輯後記

⊗ 東洋平和の爲暴支膺懲、破邪顯正の劍に蹴ち大慈悲の千才を交へてより、聖戰此處に幾月、凱歌の喊聲天地に震撼し萬歳の聲巷に滿つ時、待望の『棲神』を皆様の机上にお送り致します。

⊗ 鷲峰の法華、呱呱の聲を揚げてより貳拾參號、思へば欣喜の涙に咽ぶ。

⊗ 時變下の多忙裡にあつて棲神學徒陶冶の爲、玉稿を給はつた諸先生に滿腔の熱意を持つて謝意を表します。

⊗ 御寄稿を御願ひした諸先生のうち、玉稿を戴く事の出来なかつた先生の多かつたのは残念なことでした。亦學生の投稿の尠なかつたことは、學生の熱が減退したやうに思へて残念でした。乞ふ精進を。

⊗ 未經験の私達、人知れぬ辛苦と戦つて参りました。それだけに成就の喜びは一層です。

⊗ それも皆今村先生の誤らざる羅針に依るものです。改めて深謝致します。

⊗ 猶、多忙中手を煩はした、太田、小山田兩兄に厚くお禮申し上げます。(穗坂、熊谷)

昭和十二年十二月十五日印刷
昭和十二年十二月十八日發行

編輯人

今村是龍

發行人

山梨縣南巨摩郡身延町
穗坂眞彌

印刷人

甲府市柳町七十四番地
青柳幸雄

印刷所

甲府市柳町七十四番地
芳文堂印刷所

山梨縣南巨摩郡身延町

發行所 祖山學院同窓會文學部